２０１９年度

龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報

「うまれる・育つ・生きる＜いのち＞」プロジェクト

―「健やかに育つ＜いのち＞」を中心にして―

２０２０年３月３１日

龍谷大学短期大学部こども教育学科

目　次

1．　巻頭言　私たちの教育の《いま、ここ》を「見える化(可視化)」する
・・・中根　真　1
2．　2019 年度実習指導授業における「健やかに育つ＜いのち＞」
プロジェクトのねらいと概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田岡由美子　3
3．　実習指導授業および真宗保育学会における仏教讃歌合唱の取り組み
・・・田中知子　8
4．　乳児担当制・異年齢混合保育の実践に学ぶ
～こどもの生活と遊びを支える質の高い保育者を目指して～・・・・・・・・・羽溪　了　15
5．　童心に帰って遊びを通しての仲間づくり
（加藤清正ジャンケンを中心としたレクリエーション）・・・・・・・・・・・・・・星野繁一　19
6．　「実習生のマナーとお礼状の書き方」指導のあり方と課題・・・・・・・・・・・生駒幸子　21
7．　「健康管理」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・野口聡子　24
8．　ストレス・マネジメントとセルフ・マネジメント・・・・・・・・・・・・・・・・・赤澤正人　26
9．　反省的実践家への歩み―ある実習報告から考えたこと―・・・・・・・・・・・・・堺　恵　29
10．　実習事前指導における障害理解に対する取り組みとその試験的評価
・・・松溪智恵・武岡ゆかり　37
11．　保育・教職実践演習（幼稚園）における各種実習の省察・反省・ふりかえり
―現状整理と猛省、今後の私たち教員の課題―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中根　真　45
12．　0，1 歳児の育ちとその援助・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・北村眞佐美　49
13．　育ちを重視する保育指導案作成にむけた実習指導
～２歳児の育ちと援助を通して～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・野澤良恵　54
14．　“健やかに育つ”姿―3 歳児・4 歳児・5 歳児の保育から学ぶ―
・・・齊藤真由美　59
15．　響き合う心を育む歌遊び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・土井由美　65
16．　実習サポート講座「名札づくりにチャレンジしよう！」実施報告
・・・・・・辻友理・松原亜朋衣・大西　圭子・北村眞佐美・生駒幸子　70
17．　映画「夜間もやってる保育園」の鑑賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・堺　恵　74
18．　「こどもの口はふしぎがいっぱい」講師：岡崎好秀先生・・・・・・・・・・・・野口聡子　76
19．　♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学　講師：岩倉政城先生
・・・野口聡子　84
20．　映画「いのちのはじまり」の鑑賞前後のアンケート結果・・・・・・・・・・・・赤澤正人　90
21．　1 年間の実習指導授業を通して―「健やかに育つ」とは
・・・田岡由美子　96

巻頭言　私たちの教育の《いま、ここ》を「見える化（可視化）」する

中根　真

昨年度に引きつづき、『2019 年度　龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報　健やかに育つ・生きる＜いのち＞』を作成いたしました。

以下、昨年度の「巻頭言」から再掲します。

こども教育学科が掲げる保育者養成教育の特色の１つは、「やりっぱなしにしない実習教育」です。保育士、幼稚園教諭二種免許状の両方の資格・免許状を取得するには２年間に５回（およそ 50 日間）の実習を経験しなければなりませんが、真の学びは実習後に始まると考えています。

実習は、学生たちにとってみれば、不慣れな実習園・施設の現場に飛びこみ、緊張や気遣いのなか、保育者の仕事の実際を学んでいく貴重な学びの機会です。こどもや利用者と直接関わる仕事はもちろんですが、こどもや利用者と直接関わらない、いわば裏舞台の仕事など、大学入学前に描いていた仕事のイメージと実際のギャップに少しずつ気づいていきます。

こうして学生たちが苦労の末、大学に持ち帰ったさまざまな経験や気づき、発見、疑問などは、まさに「ダイヤモンドの原石」の山です。磨けば光る、輝く原石をどのように取り扱うかは、私たち教員集団の力量や技量が問われる場面です。

実習期間中に毎日作成する実習記録をはじめ実習総括レポート、そして、大学での学生同士の実習ふりかえりの話し合いや議論、実習報告会での発表（レジュメ、ロールプレイ、映像等）、フロアー参加者（学生や教員、卒業生）との質疑応答などを通じ、個人、グループ、学年全体で磨きをかけていきます。

もちろん、単純明快な答えが導けることはほとんどありません。ただ、提起された問題に対し、一人ひとりが向きあい、「こんな見方もあるし、あんな見方もある。さらに、別の見方もできる…」と多面的・多角的な思考を巡らせながら、問いを抱え、考えつづけるしかないという結末を迎えます。誰もが正解は何なのかと問いたくなりますが、学生も教員もそれを軽々に導けないことに気づいていきます。ふりかえりの営みを通して、保育や支援の奥深さと難しさを実感する、実に豊かな時間であると思います。

以上の文章は、こども教育学科の実習教育を簡潔に要約したものですが、2019 年度より、私たちの教育の《いま、ここ》が具体的に見えるようホームページでの広報にいっそう努めてまいりました。年間を通じての様々な取り組みにつきましては、短期大学部ホームページの「News」を併せてご覧下さい（https://www.human.ryukoku.ac.jp/）。

この教育年報は、実習教育を担う教員一人ひとりもまた自らの教育を「やりっぱなしにしない」というねらいから、自主的に作成されました。内容は、2019 年度に実施した「健やかに育つ・生きる＜いのち＞」の教育プロジェクト（2019 年度学部教学充実費による事業）において、各教員がそれぞれ担当した教育内容、あるいは関連するアンケート結果の分析を通して、その意義と課題を見極めようとするものです。教員個々の省察の積み重ねが次年度以降の教育の見直しや刷新（イノベーション）につながればと考えております。

終わりになりましたが、在学生をはじめ受験生、保護者のみなさまにご覧いただければ、こども教育学科における教育の《いま、ここ》を少しばかり感じていただけるのではないかと思います。みなさまから忌憚のないご意見等をお寄せいただければ幸甚です。

2019 年度実習指導授業における「健やかに育つ＜いのち＞」プロジェクトのねらいと概要

田岡由美子

１．はじめに

龍谷大学短期大学部こども教育学科では、2018 年度 4 月より「うまれる・育つ・生きる＜いのち＞」というタイトルでプロジェクトを立ち上げ、保育者を目指す学生が、子どもの＜いのち＞の諸相について考える様々な取り組みに参加することを通して、あらゆる＜いのち＞を大切にして生きる豊かな人間性を涵養する保育者養成プログラムの開発を試みている。1 年目の昨年は、人が「うまれる」という営みに焦点化して、＜いのち＞の不思議さや力強さ、＜いのち＞を喜び、寿ぐこと、他方、うまれることを望んだけれどかなわなかった苦しみやつらさなど、一つの＜いのち＞がこの世に誕生することにまつわる様々な事象に思いを巡せるために、通常の実習指導授業の中で＜いのち＞の誕生の映画や講演会を実施し、考える機会を持った。

2 年目の今年度は、うまれた＜いのち＞が「健やかに育つ」ことに着目して、通常の実習指導授業内容に加えて、講演会、映画会を実施した。この取り組みを通して、生まれてきた子どもが「健やかに育つ」とはどういうことなのか、そのためにどのような環境が必要で、保育者・養育者はどのような支援をしたらいいのか、さらには子どもを取り巻く自然環境、家庭、社会の変化やそれに伴う親の養育のあり方についての問題等々を幅広い視野で見つめ直し、改めて子どもの＜いのち＞が健やかに育つことについて考える契機とした。その根底には、昨年度と同様に、この世にうまれた＜いのち＞を寿ぎ、尊び、一人の人間として十全に育つことに心を砕く資質を備えた保育者になってほしいという願いが通奏低音として流れている。

２．「健やかに育つ」とは

ところで、「健やかに育つ」の「すこやか」とはどのような意味を持つのだろうか。広辞苑には、「病気をせず、からだの丈夫なさま」と記されている。また「すくよか」とも読み、「心や体のしっかりしているさま」と述べられている[1)]。さらに『保育所保育指針』では、基本的な考え方として、「全ての子どもの健やかな育ちの実現へとつながる取組が進められていくことが期待される」と記され、どのような状況下であろうとすべての子どもの「健やかな育ち」を保障することが保育所の役割であることが示されている[2)]。また、「環境を通して乳幼児期の子どもの健やかな育ちを支え促していくことに、保育所保育の特性があるといえる」[3)]と述べられ、環境を通して「健やかな育ち」を実現させていくという保育の特徴が明示されている。一方、『幼稚園教育要領』の前文においても「・・・・国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備、その他適当な方法によって、その振興に勤めなければならないこととされている」[4)]と記され、「健やかな育ち」の助けとなる環境構成や指導方法を整えることの重要性が示されている。

このように「健やかな育ち」とは心と体が元気で充実した状態を表し、それは、乳幼児期には環境を整えることを通して実現されていくのであり、その意味を具体的に考えることは、まさに保育の核心に迫っていく取り組みだと言えよう。

学生一人ひとりが「健やかに育つ」ことの意味を考え、そのために乳幼児期にどのように環境を整え、どのような支援をしていくのかを、あるいは子どもとかかわる保育者・養育者自身が「健やかに生きる」ためには何が大切なのか等々に思いを馳せることができるように、実習指導授業にかかわる教職員が協力し合いながら、それぞれの専門性を活かした授業・活動を展開した。その取り組みを以下に示す。

３．2019 年度の主な取り組み

今年度（2019 年度）の主な取り組みは下記のとおりである。昨年度と同様、今年度も実習指導授業において必須の授業内容（日常性・連続性）と、特別に今年度のみに設けた取り組み（非日常・非連続性）を組み合わせながら企画・実施した。

今年度、「健やかに育つ」に即して特別に実施した授業は以下である。

（１）映画「夜間もやってる保育園」の鑑賞（2019/4/17）
子どもの育ちを取り巻く状況を理解するために映画を鑑賞し「子どもの目線」「保護者の目線」で見て多様な世界を知る。

（２）園長 油谷幸代先生の講演「子どもの生活と遊びを支える保育者」（2019/6/5）
異年齢で遊ぶことの意味を考える。

（３）歯科医師　岡崎好秀先生の講演「「乳幼児の歯の現状について」（2019/7/10）

（４）映画「いのちのはじまり」の鑑賞（2019/11/6）
海外の様々な文化の中で子育てが行われている様子を見て、子どもが親や周囲の人々とかかわりながら次第に人らしくなっていくことを理解する。

（５）歯科医師　岩倉政城先生の講演「げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」（2019/11/13）

また、昨年度同様に毎回授業開始時に仏教讃歌の合唱を行った。2 年生はこの集大成として、2019 年 12 月 7 日（土）に龍谷大学深草キャンパスで開催された第 26 回真宗保育学会大会の開会式の勤行で仏教讃歌を合唱し、全国から集まった学会員に披露した。

他方、毎年実施している実習事前事後指導の内容が以下である。

（１）「子どもの世界へのアプローチ」（1 年生・前期）
子どもの世界をもう一度思い起こし、そこに生起する様々な感覚・感情を学生が再体験するための取り組みである。また、DVD 視聴やそれをもとにしたクラスごとでの対話を通して、子育て・保育を取り巻く家庭や社会状況についても学ぶ。

（２）「観察プログラム」（1 年生・前期）
実際の子どもの生活や遊びを観察し、それを記録することを学ぶために、街で目にした大人と子どものかかわりにおいて気になる場面を観察・記録し、それらを持ち寄

って各クラスで話し合う。さらにクラスでひとつの話題を検討し、情報機器を用いて発表し合い、問題点を共有し、物の見方の多様性、子育て・保育を取り巻く周囲の状況について学ぶ。

（3）保育実習施設の研究①～⑤（2 年生・前期）

各種児童福祉施設実習への準備として、母子生活支援施設、知的障害児・者施設、児童養護施設の基本事項や現状と課題について、さらには児童福祉施設での記録の書き方や考察の仕方を、実際に現場で働いた経験を持つ教員や社会福祉を専門とする教員から学ぶ。

（4）「実習記録の書き方①・②」（1 年生・後期）、「指導案の考え方・書き方①・②」（2 年生・前期）、「保育実践・実技指導①～⑧」（2 年生・前期）

保育所・幼稚園・こども園における実習記録の書き方、指導案の考え方・書き方について、その理論と方法、子ども発達段階に即した実技指導を、保育の現場経験のある複数名の教員によるチェーンレクチャー方式で学ぶ。

（5）個人票作成

実習に向けての目的や課題、留意事項を記した自己紹介にあたる個人票を作成する。

（6）実習生のマナーとお礼状の書き方、名札づくり

実習生としてのマナーやお礼状の書き方を学ぶ。実習で役立つ手作り名札を作成する。

（7）食・体調管理の話とストレスマネジメント

実習中の学生が心と体双方の健康のための食事や睡眠のとり方、ストレスを緩和させる方法などを学ぶ。

（8）実習報告会①～⑤

やりっぱなしにしない実習教育を掲げている本学科では、実習で体験した種々の出来事を取り上げ、その問題点や課題、改善等について情報収集、分析、考察を行い、全員で共有する。ここで大事なのは正解を求めことではなく、学生が多様なものの見方、考え方、方法があることに気づき、問題をより深く考える機会とすることにある。そのために、現場で働いている卒業生や未だ実習に参加したことのない 1 年生も加えた実習報告会を実施し、より多くの考え方や意見を知る機会とする。

以上が、実習指導授業の取り組みと概要である。なお、2019 年度のスケジュール表を掲載しておく。引き続き次章以降において、実習指導授業で行われた授業内容のより詳細な報告を行う。

注

1）新村出編、『広辞苑　第六版』、岩波書店、2012 年。

2）厚生労働省編、『保育所保育指針』、フレーベル館、2018 年。

3）同上。

4）文部科学省、『幼稚園教育要領』、フレーベル館、2018 年。

3．表 1．2018 年度「保育実習指導」授業のスケジュール（次頁及び次々頁）

2019年度 こども教育学科 水曜日授業スケジュール（前期） ― 健やかに育つ・生きる<いのち>

	保育実習指導Ⅰ（1年生 座席指定）		保育実習指導Ⅲ（2年生 座席指定）		教育実習（2年生 座席指定）	
日程	1講時 21号館 603（1年次前期）	備考	2講時 21号館 603（2年次前期）	備考	3講時 21号館 603(2年次前期)	備考
4月10日	1.「保育実習指導Ⅰ」授業オリエンテーション （注意事項・クラス顔合わせ）	実習配属のための調査用紙 麻疹・風疹のフローチャート＆提出用紙配布	3.「保育実習指導Ⅲ」授業オリエンテーション （注意事項・クラス顔合わせ）	授業1・2回目は、3月18日（実習振り返り）実施済み	1.「教育実習」授業オリエンテーション 「健やかに育つ・生きる<いのち>」の概要説明・課題用紙を全員に配布	履修カルテ配布
4月17日	2. こどもの世界へのアプローチ（1）童心に帰る	体育館（2F）	4. 映画「夜間もやっている保育園」を鑑賞 （1, 2年生合同、1年生3回目の授業）	3号館301	2. キャリアガイダンス （保育業界における就職活動のマナーとルール）	履修カルテ回収
4月24日	4. こどもの世界へのアプローチ（2）仲間と協力する ＆2講目に大学基礎力レポート解説会に参加	柔道場	5. 保育実習施設の研究（1） 母子生活支援施設	仏教讃歌	3. 指導案の考え方・書き方（1）	
5月1日	5. こどもの世界へのアプローチ（3）子どもの目線	仏教讃歌	6. 保育実習施設の研究（2） 知的障害児・者施設	仏教讃歌	4. 指導案の考え方・書き方（2）	
5月8日	6. こどもの世界へのアプローチ（4） 声なき声に気づく / 保護者の目線	仏教讃歌	7. 保育実習施設の研究（3） 知的障害児・者施設	仏教讃歌	5. 保育実践・実技指導（1）歌とゲームの指導	レク室と柔道場
5月15日	休講		8. 保育実習施設の研究（4） 残りの時間を保菌検査の説明	保菌検査書類等配布	6. 保育実践・実技指導（2）歌とゲームの指導	レク室と柔道場
5月22日	7. 図書館・キャリアセンターコモンズの紹介		1年生：8. 観察プログラム（1）観察・記録入門 2年生：休講		7. 講演：保育者として働く（稲荷保育園油谷先生）	
5月29日	1年生：休講 2年生：9. 第1回保育実習Ⅰ（施設）オリエンテーション	①実習先確認 ②実習ハンドブック配布	10. 第1回保育実習Ⅱ・Ⅲオリエンテーション	①実習先確認 ②保育実習Ⅰ（保育所）の評価票FB 仏教讃歌	8. 第1回教育実習オリエンテーション	①実習先確認 ②教育実習（春期）の評価票FB 仏教讃歌
6月5日	9. 観察プログラム（2）学内観察実習と記録の作成	仏教讃歌	11. 保育実習・教育実習の個人票作成指導		9. 保育実践・実技指導（3）乳・幼児の発達・観察から始まる保育	
6月12日	10. 観察プログラム（3）学内観察実習と記録の作成	仏教讃歌	12. 保育実習施設の研究（5） 記録・考察の書き方		10. 保育実践・実技指導（4）0, 1歳児の保育	
6月19日	11. 観察プログラム（4）学内観察実習報告会1		11. 保育実践・実技指導（5）2歳児の保育 （教育実習の授業）	個人票（コピー）・評価票提出	休講	
6月26日	12. 観察プログラム（5）学内観察実習報告会2		12. 保育実践・実技指導（6）3歳児の保育 （教育実習の授業）		13. 保育実践・実技指導（7）4歳児の保育	
7月3日	13. 観察プログラム（6）学内観察実習報告会3		休講		14. 保育実践・実技指導（8）5. 6歳児の保育	保菌検査書類等配布 （教育実習分）
7月10日	休講		13. 講演会「乳幼児の歯の現状について」 （1, 2年生合同、1年生14回目の授業）	和顔館B-201 1, 2年生合同	休講	
7月17日	15. 卒業生によるこども教育現場報告		14. 第2回保育実習Ⅱ・Ⅲオリエンテーション 保育実習の注意事項確認		15. 後期に実施	
			15. 第2回保育実習Ⅰ（施設）オリエンテーション ［期間外実習生対象］	7月24日(水)2講		
			15. 第2回保育実習Ⅰ（施設）オリエンテーション	8月22日(木)2講		
夏休み	―		保育実習Ⅱ(7/29-8/8) 10日間 保育実習Ⅲ(7/29-8/8) 10泊11日 保育実習Ⅰ（施設）(8/28-9/7) 10泊11日		―	

2019年度　こども教育学科　水曜日授業スケジュール（後期）

	保育実習指導Ⅱ（1年生　座席指定）		保育・教職実践演習（幼稚園）（2年生　座席指定）		補講ほか（2年生）	
日程	1講時　21号館603（1年次後期）	備考	2講時　21号館 603（2年次後期）	備考	3講時	備考
9月18日	1.「保育実習指導Ⅱ」授業オリエンテーション・仏讃を歌う はじめての保育・教育実習にむけて	履修カルテ説明・配布→9/25クラス担当教員に提出 9/25と10/2の予告（教室）			＜1年生対象10/9の補講＞ 2. キャリア（就職・進路）ガイダンス	21-603
			1.「保育・教職実践演習（幼稚園）」 授業オリエンテーション・仏讃を歌う	履修カルテの配布（2年前期の履修済み科目の記入）→9/25の2講回収		
9月25日	3. 保育実技指導（1）	★教室注意（柔道場とレクレーション室） 履修カルテ回収（クラス別）	2. 保育実習Ⅱ・Ⅲ、保育実習Ⅰ（施設）を終えて 実習振り返り（1）	3講時にOTあり 履修カルテ回収（クラス別）	15. 第2回教育実習オリエンテーション ■幼稚園免許登録説明会	21-603
10月2日	4. 保育実技指導（2）	★教室注意（柔道場とレクレーション室） 10/23　OT予告	3. 保育実習Ⅱ・Ⅲ、保育実習Ⅰ（施設）を終えて 実習振り返り（2）			
10月9日	休講（2年生教育実習のため教員が巡回により不在） →9/18（水）3講時キャリアガイダンスに補講		休講（教育実習（10/7-10/18）のため） →11/6（水）3講時に補講			
10月16日	休講（2年生教育実習のため教員が巡回により不在） →11/6（水）2講時に補講（1・2年生合同で映画鑑賞）		休講（教育実習（10/7-10/18）のため） →12/14（土）3講時に補講			
10月23日	5. 第1回保育・教育実習オリエンテーション （いつもどおりクラス別で着席）	実習ﾊﾝﾄﾞﾌﾞｯｸ配布 実習目標・課題設定 個人票作成指導（一斉）	4. 教育実習（秋期）を終えて 実習振り返り（3）各クラスに分かれる	★21-603他		
10月30日	6. 個人票作成・面談指導（教室指定）	個人票作成指導（クラス別）	5. 実習振り返り（4）クラス別で実習報告準備	★21-603他		
11月6日	7. 実習生のマナーと お礼状の書き方	11/20のOT予告（教室）	（1・2年生合同授業）「いのちのはじまり」 8. 映画上映会（1年生） 6. 映画上映会（2年生）	3-301または2号館	7. 実習振り返り（5）クラス別で実習報告準備 ■保育士登録説明会	★21-603他
11月13日	休講 →11/13（水）2講時に補講		9(1年生)，8(2年生)，講演会：岩倉政城先生「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」	和顔館B-201		
11月20日	10. 第2回保育・教育実習オリエンテーション （★教室注意、配属園ごとに着席） 実習オリエンテーションのアポイントの取り方	配属確認・書類配付（評価票など）・班長決め	9. 実習報告会（1）3クラス発表 ■幼稚園免許登録説明会→昼休み			
11月27日	11. 実習記録の書き方（1）	個人票コピー・評価票提出	10. 実習報告会（2）3クラス発表	【終了時間注意】全学防火・防災訓練(12:00～12:30)		
12月4日	12. 実習記録の書き方（2）		11. 実習報告会（3）3クラス発表			
12月7日（土）					12.真宗保育学会大会（2年生による仏讃、基調講演への参加）	22号館
12月11日	13. 第3回保育・教育実習オリエンテーション （いつもどおりクラス別で着席） キャリアサポート（先輩の就活体験談）	実習ファイル等配布 保菌検査説明・キット配布 12/14（土）3講時の予告 1/8(水)の服装・教室（柔道場）	13. 実習報告会（4）3クラス発表			
12月14日（土）					（卒業生を迎えて1・2年生合同授業） （社会福祉の補講）2年生の実習報告会に参加（1年生） 14. 実習報告会（5）3クラス発表（2年生）	21-604
冬休み	―		―		―	
1月8日	14. 卒業生による保育実技指導	柔道場	休講 →12/7（土）3講時に補講			
1月15日	15. 保育・教育実習　直前指導 食・体調管理の話とストレスマネージメント		15. キャリアサポート （社会人として働くためのセルフマネージメント） 「私のこれからの課題」 カリキュラムアンケート・実習アンケート実施	実習評価票のフィードバック		
春休み	教育実習（春期）（2/3－2/14） 保育実習Ⅰ（保育所）（2/25－3/6）					

実習指導授業および真宗保育学会における仏教讃歌合唱の取り組み

田中知子

Ⅰ，はじめに

本報告は、昨年度に引き続き、筆者が実習指導授業で担当した仏教讃歌合唱の取り組みを中心に報告するものである。こども教育学科においては、浄土真宗に根ざす建学の精神を基盤とした保育者養成を目指し、＜いのち＞の大切さに学生が向き合い・考える授業を展開している。学年全体で仏教讃歌を合唱することもその一環であり、人間性豊かな保育者の育成に資する取り組みとして位置付けられている。

実習指導授業において仏教讃歌合唱を行う筆者のねらいは、次の四つである。

①建学の精神における報恩感謝の精神に触れ、その情操を培う。

②姿勢を正し歌うことによって、心が一つになる一体感を味わう。

③歌うことで心を落ち着かせ、授業を受講するかまえをつくる。

④仏教系の実習園でよく歌われているこどもの仏教讃歌に親しむ。

今回は、本学科２年次生に焦点をあて、以下の二つを明らかにすることを目的とする。一つ目は上記のようなねらいを持った取り組みを、入学して以来２年間体験したことについてどのように捉えたか。二つ目は、2019 年 12 月に本学で開催された、真宗保育学会での仏教讃歌合唱の体験をどのように捉えたかについてである。

Ⅱ，仏教讃歌合唱の取り組みについて

１．　取り組みの概要

今年度 2 年次生が歌った仏教讃歌は、「真宗宗歌」（作詞　土呂基/作曲　島崎赤太郎）、「恩徳讃」（親鸞聖人御和讃/作曲　清水脩）、「おはようのうた」（作詞　安藤徇之介/作曲　本多鉄麿）、「ねね」（作詞　三橋あきら/作曲　本多鉄麿）、敬礼文（バーリ原文/編曲　伊藤完夫）、三帰依（バーリ原文）、さんだんのうた（讃仏偈意訳/作曲　伊藤完夫）、念仏（編曲　D.Hunt）である。

仏教讃歌を歌うにあたり大切にしていることは、正しい音程で歌うだけではなく、歌の内容を知り気持ちを込めて歌うことである。そのため、新しい曲目を歌唱する際には、僧侶である本学科の教員より必ず歌詞の説明を受けて、学生と共に自身も内容理解を深めている。今年度は、昨年度より歌っている「真宗宗歌」「恩徳讃」以外の曲目についての説明を受けたのち、歌唱指導に入った。今年度は、２年次生全員で真宗保育学会に参加し、音楽礼拝において仏教讃歌を歌うことを踏まえ、後期科目である「基礎技能Ⅲ（音楽）」とも連携を取りながら歌唱指導の機会を確保した。歌唱指導のスケジュールについては、表１を参照された

い。

表１　仏教讃歌の歌唱指導スケジュール

科目	日程	指導時間	曲目
＜実習指導授業＞			
保育実習指導Ⅲ（前期）	4月24日	約15分	「真宗宗歌」「恩徳讃」「おはよう」
	5月1日	同上	「ねね」「恩徳讃」
	5月8日	同上	「真宗宗歌」
保育・教職実践演習（幼稚園）（後期）	9月18日	同上	「敬礼文」「三帰依」「さんだんのうた」
	9月25日	同上	「さんだんのうた」「念仏」
	10月2日	同上	「敬礼文」「三帰依」「さんだんのうた」
	10月23日	同上	「真宗宗歌」「敬礼文」「三帰依」「さんだんのうた」「念仏」「恩徳讃」
	10月30日	同上	
＜音楽系授業＞			
基礎技能Ⅲ(音楽)（後期）	11月29日	45分×４回	「真宗宗歌」「敬礼文」「三帰依」「さんだんのうた」「念仏」「恩徳讃」
	12月6日	45分×２回	
（22号館101室：音楽礼拝のリハーサル）	同上	45分	

※11月29日は授業実施の２，３講時ともに、45分間をピアノの個人指導、残りの45分間を仏教讃歌の指導に充てた。

12月６日は２，３講時とも音楽理論のテストを30分間実施し、その後45分間を仏教讃歌の指導に充てた。なお、昼休みの12時15分から13時までは、翌日、真宗保育学会において音楽礼拝を行う22号館101室でリハーサルを行った。

２．歌唱指導の状況

１）実習指導授業における歌唱指導

「保育実習指導Ⅲ」での取り組みでは、学生を半分ずつに分け、お互いの歌声を聴き合う機会をつくったり、全部の歌詞を歌うのではなく１番だけ取り上げて歌うなど、できるだけ学生が集中して歌えるよう心掛けた。なぜならば、１年次の時に比べ、仏教讃歌を歌うこと自体に新鮮さを失ったのか、緊張感がなく声量も乏しかったためである。

「保育・教職実践演習（幼稚園）」では、12 月に真宗保育学会で歌唱することを念頭に置きながら、指導を行った。音楽礼拝で歌う曲は「真宗宗歌」「敬礼文」「三帰依」「さんだんのうた」「念仏」「恩徳讃」である。短い曲も含まれている

が、６曲を歌えるようにするには一定の時間を要する。しかしながら、授業のスケジュール上、歌唱指導が行える機会は 10 月末までであったため、歌の輪郭を仕上げるところまでに留めた。

２）音楽系授業における歌唱指導

実習指導授業で学生が一通り歌えるようになったあとは、「基礎技能Ⅲ（音楽)」との連携を図り、実際に聖典を手に持ち、声が豊かに響くような口の開け方や姿勢・目線などに留意しながら歌唱指導を行った。また、念珠のかけ方や礼拝するタイミングなど、細かく確認しながら音楽礼拝全体の練習へと繋げた。

学会前日は、授業内での練習の他に、音楽礼拝が行われる講義室でのリハーサルを昼休みに行った。歌唱指導の際、普段はピアノを使用しているが、当日は電子ピアノにプログラミングされているオルガンの音色での伴奏になるため、耳に馴染むように、当日と同じ楽器を用いた。その際、「基礎技能Ⅲ（音楽)」を担当する他の教員にも協力を仰ぎ、伴奏と学生の歌声のバランスなどを確認しながら調整を行った。また、学生は、学会当日も別室に一旦集合し、10 分間の声出しを行ってから音楽礼拝に臨んだ。

３．歌唱時の学生の様子

先述したように、前期４月から５月にかけてはモチベーションが低く、声量もあまり出ない状態であったが、後期９月に入ってからは、真宗保育学会で合唱するという新たな目標ができたことによって、表情が変化してきたように思われた。バーリ語で書かれた「敬礼文」や「三帰依」の語感に、新鮮な感覚を覚えたようであったが、「敬礼文」を独唱する同級生の歌声には「すごい！」という声が上がり、その美しさに感動していた。また、それまではプリントで配布した楽譜を見て歌っていたが、「基礎技能Ⅲ（音楽))」の歌唱時に、聖典を持ち念珠を手にかけてからは、自ら歌おうという意志が感じられるようになってきた。声量も増して合唱コンクールのように一つの目標に向かっていく雰囲気に包まれていた。

リハーサルでは、ピアノとは違うオルガンの音色に違和感があったのか、練習を始めた直後は歌いづらそうにしていたが、終盤では伴奏を聞きながらバランスよく歌えるようになっていた。学会当日は、緊張した面持ちで音楽礼拝に参加したが、背筋を伸ばし歌う姿や一つひとつの所作が美しかった。また、合唱時の歌声は、全員の気持ちが一つにまとまっていると感じられる、のびやかなものであり、自信を持ち意欲的に取り組めていることがわかった。他の学会参加者の歌声とも調和が取れており、会場全体が仏教讃歌合唱を通して一体となった瞬間であった。

Ⅲ，学生へのアンケート調査

２年次生 131 名を対象に次の２点についてのアンケートを行った。一つ目は、実習指導授業において２年間連続的に仏教讃歌を歌ったことについて、二つ目は、真宗保育学会に参加し仏教讃歌を合唱したことについての感想を得るものである。以下にアンケート調査の結果を報告する。

アンケートの設問は以下の二つである。

設問１．実習系授業で仏教讃歌を２年間歌ってみた感想を、次の１～５の中から選び○をつけてください。

設問２．真宗保育学会での音楽礼拝で仏教讃歌を歌った感想を、次の１～５の中から選び○をつけてください。

なお、設問１・２とも、①よかった②どちらかと言えばよかった③どちらとも言えない④あまりよくなかった⑤よくなかったからの選択、および、自由記述の二通りで回答を求めた。

設問１に関する選択回答は、①「よかった」80 名（約 61%）、②「どちらかと言えばよかった」36 名（約 27%）、③「どちらとも言えない」14 名（約 11%）で、④「あまりよくなかった」０名⑤「よくなかった」1 名（約１%）であった。

設問２については、学会当日に欠席者がいたため 127 名の回答である。選択回答は、①「よかった」79 名（約 60%）、②「どちらかと言えばよかった」33 名（約 26%）、③「どちらとも言えない」14 名（約 10%）で、④「あまりよくなかった」０名⑤「よくなかった」1 名（約１%）であった。

これらのことから、授業において学生が仏教讃歌を２年間歌ったことや、真宗保育学会において仏教讃歌を合唱した体験について、概ね肯定的に捉えていると言えるだろう。

次に学生の自由記述より抜粋して、以下に示す。

（設問１に関する記述）

・初めは仏教について全く知らず、関心もなかったが、仏教讃歌を歌うことで仏教に親しみがもてた。
・仏教に触れ、歌うことで先入観が無くなり、もっと知りたいと思うようになった。
・浄土真宗について歌を通して知ることができてよかった。
・楽しく宗教に触れることができた。歌をうたうことは思い出になったし、仏教讃歌だったからより濃い印象が残った。
・仏教讃歌を歌うことは身近にないし、この大学に来て、この学科だったかたこそ歌に親しむことができたと思うので、よい機会だったと思った。

・仏教の大学に通っているのに、仏教讃歌を知らないということにならなくてよかった。
・今まで触れたことがなかった分野だったので、龍谷大学に入ったからこそできた貴重な経験だったと思う。
・みんなで声を合わせて歌ったことで、よりこども教育学科全体の雰囲気が良くなり、仲が深まったと感じた。
・水曜日の授業でうたうことによって、クラスや学年のみんなとの団結力が高まったように思う。
・良い気分転換にもなったし、仏讃ならではの音階がとても心落ち着く時間となった。授業におちついて取り組めた気がした。
・仏教讃歌を歌っているうちに心の中が落ちついたりして、ほっと一息つけたり、そういう気持ちになった。
・初めはあまりやる気がなかったけど、やっていくうちに意味とかを知ってしっかり歌うようになった。
・初めは正直面倒くさかったのですが、歌っている間にとても楽しくなった。歌詞の意味等も知ることができ、気付けば仏教讃歌が大好きになった。
・実習の時に子ども達と一緒に歌うことができてよかった。
・実習園が仏教の園だったので、授業で学ぶことでスムーズに伴奏することができた。
・歌うことは良いことだと思うけれど、なぜ歌うのかよく分からなかった。
・普段に生活で使わないため、良い悪いが分からなかった。

学生の記述を概観すると、実習指導授業において学生が２年間、仏教讃歌を連続的に歌った体験は、前述した取り組みの四つのねらいを概ね満たしたものであったと感じる。一部、歌うことの意味を疑問視している意見も見受けられたが、本取り組みが建学の精神を具現化し、保育者としての資質・能力の向上に繋がるものであったと捉えている。加えて、学生が仏教に親しみを抱いたり、本学・本学科への帰属意識の高まり、あるいは自分達のアイデンティティの共有に繋がる契機にもなったと言えるであろう。

昨今、自分達の生活において、宗教が身近に感じられない学生は少なくないと思われる。宗教に関して、「怖い」「冠婚葬祭の時に必要な儀式」といったイメージが先行していたかもしれない。しかしながら、学生の記述からは、仏教讃歌を歌うことを通して、仏教の教えが我々からかけ離れたところにあるのではなく、毎日を生きる自分にとって大切なことをわかりやすく教えてくれるものだと気づいたのではないかと推察する。

（設問２に関する記述）

・こども教育学科２年生全員でとてもきれいな合唱ができてよかった。普段の練習も頑張ってよかった。
・みんなで一つのことをやり遂げられることができてよかった。本番は楽しかったしノリ気で取り組んでいる自分がいた。
・沢山の人の前で練習してきたことを披露できて達成感があった。また、みんなで歌う機会があまりないため貴重だと思った。
・発表の機会があることで歌にも力が入り、また、学科としての思い出になったと思う。
・学生以外にお寺の方などのお客さんがたくさん来られている中で、一緒に歌えたのでとても良い経験になった。
・初めて学会に参加して、学生以外の人達と歌を歌うことで一つになれたように思った。
・色々な人達と歌ってみて、皆と何かをしている同じことをしているということが初めての経験だったので、良い経験になった。
・記念になったのはよかったけど、土曜日に行われたのが少し残念だった。

学生の記述からは、真宗保育学会という特別な場で歌唱した経験を通して、「皆で一つのことをやり切った達成感」と「人との繋がり」を体感したことがわかる。音楽礼拝という一つの目標に向けて練習を重ねた結果、自分達の満足のいく歌唱ができたことへの達成感や、学年全体が一つにまとまり共振したことに対する高揚感が見て取れる。

また、仏教讃歌合唱を通して、学生が初めて出会った人たちとの繋がりを感じ、響き合った心地よさを肯定的に捉えているところは意義あることと言えよう。人と人との繋がりが希薄になっている今だからこそ、他者と共振している実感が持てるような取り組みは重要と考える。

Ⅳ，まとめ

今回のアンケート調査により、実習指導授業において仏教讃歌合唱を取り組むねらいが、学生の中に概ね浸透していることがわかった。また、真宗保育学会という特別な場で歌ったことが、学科の友人たちとの繋がり、さらには新しく出会った人達との繋がりをも感じさせる大切な経験となっていることもわかった。

以上のような結果を踏まえ、今後も、学生の中に「周りの人達と繋がりながら共に表現してみたい」という気持ちが芽生えるような仏教讃歌合唱の取り組みを、模索していきたい。

＜参考・引用文献＞

今田達（1994)『こどもたちの讃歌（１)』同朋舎出版
今田達（1994)『こどもたちの讃歌（２)』同朋舎出版
浄土真宗本願寺派保育連盟教育原理委員会（2014)『真宗の教えとまことの保育』浄土真宗本願寺派保育連盟
本願寺仏教音楽・儀礼研究所編（2010)『音楽礼拝-正信念仏偈による-』本願寺出版社
仏教音楽・儀礼研究室企画・監修・編纂（2013)『聖歌・讃歌集全６巻セット』本願寺出版社

乳児担当制・異年齢混合保育の実践に学ぶ
～こどもの生活と遊びを支える質の高い保育者を目指して～

羽溪　了

１.はじめに

一回生春期（2～3 月）に、幼稚園教育実習、保育所保育実習をそれぞれの配属園で、１０日間経験した新二回生に対して、個々の経験や課題を踏まえながらも、その現状だけに安住や幻滅をすることなく、保育の本質について不断の問いを持ち、質の高い保育に向けての学びを継続的に深める機会を、如何にこの時期に設けるのか？このことは、実習依頼園の現状としては、残念ながら保育のあり方やその質において、歴然とした差が存在する保育現場での実習経験を経た学生に向け、如何にフォローしていくのかが、大きな課題として横たわる。

その様な中、毎年５～６月頃にかけて、質の高い保育を求め、その検証と実践を積み重ねる保育現場の責任者を招聘し、単なる理念・理想ではなく、そこを目指し実践する、具体的な内容や経験について講義いただくことを、ここ 3 年間取り組んで来ている。

このことは、学生自身が初めての実習経験の中で、感じ経験してきた課題や失望が、決して解決出来ないことではなく、実際に解決しようとする不断の実践があることを、この講義の中で学び、自身の経験という小さな殻にだけ止まるのではなく、実現可能な実践やそれに向けた学びへと繋がることをねらいとしている。

このような背景とねらいの中で、本年度は、０・１・２歳児の乳児担当制、３・４・５歳児の異年齢混合保育（縦割り保育）を確立してきた（社福）稲荷保育園 稲荷こども園の油谷幸代園長を招聘し、学生達にもまだまだ馴染みの薄い、所謂「異年齢保育」という保育について、保育の現場で抱える問題やそれに向けての取り組みとして、如何に展開されているのかを学ぶ講義が、２０１９年６月５日 3 講時になされた。

2．講演内容

（1）はじめに

保育の仕事について、「思い通りにいかない保育」「様々な保護者からのクレーム」「決して高くない給与」「危機管理」等、保育の難しさ、保護者対応の難しさ、こどもの安全を守る責任等、オールマイティーさが求められる専門職であることを述べている。その一方で、「こどもの可愛さ」「こどもから教えられる」「こどもの成長・変化」「保護者から教えられる」等、こどもと直接に関わる素晴らしさをはじめ、そこに様々な学びがあり、自身の成長＝やりがい・生きがいへと繋がり、生涯をかけることの出来る仕事であるとも述べている。受講学生が、既に実習で一度は保育の現場を経験しているからこそ、保育の仕事における正負・明暗の現実をつつみ隠さずあげている。その上で、保育とは、「こどもの心を育てること」、「乳児期が人としての基盤を作る時期であること」であり、その為の

取り組みが、稲荷保育園のこれまでの実践＝「異年齢混合保育」の積み重ねであるとした。

（２）異年齢混合保育を取り組んだ背景

同園の沿革や概要を踏まえ、何故「異年齢混合保育」を取り組んできたのか、その要因について、次のように述べている。

こどもを取り囲む社会・地域・家庭の変化である。１９９８（平成 10）年頃までは、両親が共働きながらも、こどもが他の保護者や地域に見守られて育つことの出来る環境に、同園の周囲はあった。しかし、その後、核家族化、兄弟姉妹の減少化や、女性の長時間労働、家庭や地域での人や自然との関わる機会減少や、子育て力・養育力の低下、一人親家庭や虐待が疑われる家庭の増加等、その背景が急激に変わって来た。その様な変化に伴って、こども達の生活やその様子にも変化が表れる。具体的には、食事や遊びが意欲的でなかったり、休日明けには疲れ興奮しての登園等無気力、情緒不安定なこどもの増加であり、特に乳児達にその変化が顕著であるとしている。こうした日々のこどもの変化を、保育者が真っ先に感じていたという。

同園では、同じ年齢児によるクラス全員が、同じ遊びを行う一斉保育であったが、上記の様なこども達の変化のなかで、集団に入れないこども、個別の援助が必要なこどもの増加等の理由で、従来の様な一斉保育が成り立たないという状況になっていた。この状況に対して、「従来の保育形態では、こどもの育ちを保障することが出来ないのではないか？」そして、「人として育つ上で、人格形成の基盤となる乳幼児期に、最も大切な特定の大人との愛着形成の保障が必要ではないのか？」との考えが、現場の保育者から立ち上がった。この様な経緯で、同園の保育形態が、現在の二本柱である「乳児担当制保育」(2005 年～）と「異年齢混合保育」（２００９年～）へと変革した。

（３）乳児担当制保育とは

０～２歳乳児の食事や排泄、午睡等の生理的な要素を多く含む行為の援助を、一人のこどもに一人の決まった保育士が行うことによって、こどもの成長発達や、心身の微妙な変化に速やかに気づくことが出来、こどもにあわせた適切な援助が出来る。そのことによってこどもは、担当保育士との間に信頼関係を芽生えさせ、人への信頼や愛着を築くことに繋がることは無論、「自分は人に愛されている」と実感し、安心と安らぎの中で、自信や意欲が育まれていく。

内面的なこと以外での視点として、一日の大半を園で過ごすこどもたちにとって、園は第二の家庭であり、園では、保育者は保護者の代わりとなって、保護者と共に、こどもの成長を支える、重要な役割を果たしている。

この様な保育の姿を、具体的に画像を通して、食事の援助・絵本の読み聞かせ・あそのびの様子として紹介がなされた。

（４）異年齢混合保育とは

３～５歳幼児が、同じクラスに混合で共に生活する保育であるが、同園では、乳児担当制を始めて４年後、３歳児以上の幼児クラスに、異年齢混合保育を導入した。その結果、

１クラス３０名程度の異年齢のこどもが共に過ごす中で、こどもの上に表れた変化として、年少者は、１年先、２年先の自身のモデルとして年長者見習い、尊敬し、見通しを持って生活をすることが出来る。年長者は年少者に優しく関わる心を育むことが出来ることである。又、保育者としては、３～５歳児が一緒に生活する中では、年齢に関係なく、こどもの発達にあわせた援助が可能になった。又、こどもがそれぞれに自分で選んだ活動に取り組んでいるので、必要な時に必要なこどもに援助が出来るようになった。

無論、言葉にすると簡単なようだが、全くの手探りから試行錯誤を繰り返す中で確立してきたものであり、今日に至るまで、職員あげて講習会への参加、実践園への見学、クラス構成（縦割りクラスでありながら同年齢の活動も出来るよう）、日課の見直し（従来の一斉集団保育からの脱却）、行事の見直し（日課の見直しに伴うこども主体とした）、そして保護者や地域住民への周知に努めた。その中でも、新しい保育に変わることへの不安や戸惑い、そして批判的な思いを最も抱く保護者への丁寧な対応、保育を様々な手段を講じて伝えることに努めた。それと並行して、実際にこどもが変わってくると、保護者にも変化が現れ、異年齢保育への理解と力強い支援へと発展していった。又、異年齢保育へ至るまでに既に実施されてきた、乳児担当制により、前述の通り、「自分は愛されている」「ありのままの自分を受け入れてもらえている」という、育まれてきた自信が、異年齢保育での人間関係の土台となっている。

この様な異年齢保育の姿を、発達にあわせた玩具を整える、様々な遊びへと展開を可能とする環境設定等、具体的な画像を通して紹介がなされた。

（５）まとめ

色々な保育の取り組みがあるなかで、保育の仕事とは「人と人とを繋ぐ」仕事である。それは、「こどもとこども」、「親とこども」、「親と親」「地域と園」を繋ぐ仕事である。又、未来を生きるこどもを育てることであると同時に、それは自分の未来でもある。

３．総括

こどもを取り巻く環境が著しく変化する今日においても、こどもと直接に関わる保育者が、先ずはこどもとの信頼関係をしっかりと築き、その上で、こどもが安心して環境に関わり、個々の活動が豊かに展開するように環境を整えること、そして保育者自身が、こどもと共に、よりよい育ちの環境を作り上げていくことが肝要とされるところは、周知のことではある。保育者養成の一環として行う保育現場での「実習」も、この姿を実際に経験的に学び、大学での専門教育や自身の保育者としてのキャリアへと繋ぐ目的としてなされるものである。

しかし、先述の通り、個々の配属実習園や保育者の実態は、残念ながら保育のあり方やその質において、歴然とした差が存在する。そのことによって、実習経験の中で感じ発見してきた課題や失望を、小さな殻の中だけに留め置く、或いは放置させたまましない学びの保障することは、次回実習や今後の大学での学びの上においても、極めて重要な位置づ

けとなる。

学生達の個々の経験は経験として、様々な課題が多い中、その保育の質の向上に向けて、「乳児担当制」を基礎基盤とした「異年齢保育」という取り組みが、現状の課題解決を目的とし、実際に展開されていることを、全ての学生が学ぶ機会を得ることが出来た。そして、それは単なる事例の紹介だけではなく、講義のまとめでも述べられているように、保育の仕事とは何であるのか？という、保育者養成の肝要とするところと底通することを、改めて学ぶ機会となった。

童心に帰って遊びを通しての仲間づくり
（加藤清正ジャンケンを中心としたレクリエーション）

星野繁一

ジャンケンは幼児や小学生～大学生、大人、高齢者、しょうがい者等にとっても生活に根付いた遊びのひとつである。何かを決めるときにジャンケンをする事で円滑に決めることもできる。筋力がない幼児でも簡単に大人に勝利することも可能である。

ルール説明をするとグー（石）、チョキ（はさみ）、パー（紙）の３種があり、どれが１番強いというものはなく、例えばグーの場合はチョキには勝つがパーには負け、チョキはパーには勝つがグーには負けて、パーはグーには勝つがチョキには負ける。

「三すくみの関係」をそれぞれに変化させる事によって多くのジャンケンゲームが誕生する。

●「清正ジャンケン」を紹介しよう。

登場するのは「清正」「虎」「母上」で、それぞれ「グー」「チョキ」「パー」である。

「清正　グー」は「虎　チョキ」には勝つが「母上　パー」には負ける。

「虎　チョキ」は「母上　パー」には勝つが「清正　グー」には負ける。

「母上　パー」は「清正　グー」には勝つが「虎　チョキ」には負ける。

・手だけじゃなくからだ全体を使ってジャンケンする。

① 手拍子をしながら

② 歌いながら

③ ジャンケン　ホイで、ポーズ（それぞれ違うもの）をとる。

・ 清正は槍の名手。槍で虎を突くつもりで、片足を踏み込んで「エイ」と叫ぶ。

・ 虎は両手の爪を立てながら「ガオォー」と叫んで片足を前に出す。

・ 母上は片手で杖を持って、弱々しく「およよ」と言って身体を前に倒す。

・次のように手拍子しながら歌う。

「かとうきよまさ♪　虎たいじ♪　ジャンケン♪　（エイ）・（ガオォー）・（およよ）

✿それぞれのポーズを決める

・ゲームパターンの紹介

① ひとりのリーダーと残りの全員で清正ジャンケンを立って対戦する。

（リーダーに負けたら座る。何回も行って、最後の勝者を決める）

② １チーム５人程のグループを作り、チームごとで約３メートル離れて向かい合う。
何を出すかチーム全員で相談して対戦（手拍子、歌、ポーズ）する。
チーム全員が同じポーズでない（1 人でも違うポーズをする）と
それだけで負けになる。

③ どちらかが３勝すれば違うチームと対戦する。

④ 「負けるが勝ち」 清正は母上に勝ち、虎は母上に勝ち、母上は虎に勝つ。
逆パターンでやることで、負けが多いチームには結果が良くなるかも。
※ここでは「加藤清正ジャンケン」を紹介しました。
手を叩き、歌いながら、ポーズを決めて、じゃんけんを楽しむ。
グー、チョキ、パーの「三すくみの関係」をアレンジして、
あなたも違うジャンケンゲームと友達をつくってください。

『４才児がジャンケンに戯れている姿は、それなりにジャンケンを楽しんでいるように見えますが、まだゲームとして確立しておりません。４才半頃になりますと、ルールを理解できる子どももいますが、今ひとつです。５才児も６才児に近づくと、ジャンケンのリズムもテンポもよく、お互いにリズミカルにゲームを展開し、何度も何度もくりかえして熱中し、興奮状態をつくりあげていきます。この場合、思考能力や体力レベルが一致していることが大切であることは間違いありません。ですから、５～６才児が４才児にじゃんけんを申し込むことは、まずありません。このことは、小学校１年生と５～６才児にもあてはまります。そして、高学年になるにつれ、さらに思考能力を働かせます（相手が〇〇をだして、あいこだったら、次はこれだとか)。さらに、相手の癖を見破るといった思考を高め、ゲームを複雑化していきます。しかし、ジャンケンのもつ大きな特質は偶然性にありますので、大人とも同じ舞台で楽しめるゲームであると言うことができます。

相手に勝つために、あの短い時間の中で、あらゆる情報を整理し、処理する能力を満たしてくれるジャンケンゲームは、まさにゲームの始まりだと考えています。』

参考文献

（ジャンケンゲーム 110 番　水野豊二著　遊戯社
P149 より）

「実習生のマナーとお礼状の書き方」指導のあり方と課題

生駒　幸子

本学では保育士資格、幼稚園教諭二種免許状の取得を目指して、学生は希望する資格・免許の取得に必要な実習を保育所、各種福祉施設、幼稚園、認定こども園等で行う。実習生が現場に赴きご指導いただきながら、利用者や乳幼児にかかわることを通して現場の福祉・保育・教育の実際を体験的に学ぶ機会を持っている。

本稿では、実習事前指導の一環として「現場で学ばせていただく」実習生として、身に付けておきたいマナー、また実習後に実習施設にお送りするお礼状の書き方についての指導内容と指導のあり方を振り返り、課題を提示する。

１.「実習生のマナーとお礼状の書き方」の指導内容

学生により理解しやすくすることを心掛け、説明をコンパクトにまとめたパワーポイント資料を作成し、当日は３種の配布資料と併せて指導を実施した。

日時：2019 年 11 月 6 日（水）1 講時（70 分）

対象：本学１年生（約 135 名）

配布資料：

（１）『就職活動ハンドブック 2019』龍谷大学キャリアセンター編

（２）『実習ハンドブック 2019 年度版』「10.実習前の準備③服装・身だしなみ」龍谷大学短期大学部実習指導室編

（３）田上貞一郎『＜改訂＞保育者になるための国語表現』萌文書林　2018 年「実習礼状の例（p.96-97）」

［１］実習生のマナー

マナーは「相手への敬意と感謝」を示すものであり、日本文化においては特に重視される振る舞いの基本であり、信頼関係や円満な人間関係を構築するうえで欠かせない礼儀作法である。

まず、実習においてなぜ適切なマナーが必要なのかを説明した。実習生としてのマナーの根底には「乳幼児や施設利用者の前に立って手本となる品性を備えていること」、「学びの機会を与えてくださる方々に感謝しつつ誠実に学ぶ姿勢をあらわすこと」がある。この核心が軸となってはじめてマナーが生きてくることを伝えた。

基本的なマナーとして（１）あいさつ（２）姿勢（３）表情（４）服装・身だしなみ（５）言葉遣いの 5 項目が挙げられるが、すべてを説明する時間的な余裕はないため、本学の実習指導で活用している『実習ハンドブック 2019 年度版』から「10.実習前の準備③服装・身だしなみ」を抜粋し、特に実習生として留意すべき以下の留意点の説明を行った。

③服装・身だしなみ

服装

a.清潔感のある（色・デザイン）、子どもと一緒にいるのにふさわしい服装・靴。（実習園・施設の指示に従う）

b.胸元や背中、太ももを露出しない服装。（座った時に、お尻・背中・腰・太ももが出ないように）

c.下着・肌着の色や柄も考慮し、清潔感があるものを着用する。（清潔なイメージが大切）

d.長いひもやストーン等が付いていないもの。

e.透ける素材の服は避ける。

f.キャラクターの付いているものは避ける。

身だしなみ（頭髪・化粧等）

a.頭髪の色染めは厳禁、髪の毛が肩より長い場合は顔が見えるように束ねる。

b.アクセサリー（ピアス・ネックレス・指輪・ブレスレット等）は身に付けない。

c.香水やコロン、その他においの強いものは身に付けない。

d.爪は短く切り（指先から出ない長さ）、マニキュア・ネイルアートは外しておく。

e.化粧は日焼け止め程度とする。（付けまつ毛、まつ毛エクステ、カラーコンタクト、マスカラ等も厳禁）

以上の説明を行った後、特に「笑顔で、相手に聞こえる声で、挨拶をする」ことについては、皆で顔を合わせて実践を行った。挨拶とは相手に与える印象を左右し、相手に快不快の感情を湧かせる重要なものであることを伝えたうえで、一朝一夕で身に付くものではないため、常日頃からお互いに「笑顔で気持ちの良い挨拶」を心掛けるように指導した。

［２］お礼状の書き方

各種実習後に、実習生は実習施設・実習園に感謝の気持ちを伝える「お礼状」を送付する。近年の傾向として、学生が「手紙を書く」経験が少ないためにお礼状を適切に作成・送付することに困難を抱えていることから、実習の事前指導のなかに手紙の書き方を位置づけ指導を行っている。説明事項を（１）手紙の基本構成、（２）封筒の書き方、（３）封をする、切手を貼るという３項目に集約して説明を行った。

まず（１）では、図１のように手紙の基本構成を図示し、これをもとにして資料（３）「実習礼状の例」（お礼状の例文）を読み、各自で８つに区切り、手紙の構造を説明した。前文（時候の挨拶）の意味、また主文

図１　手紙の基本構成

に置くエピソードが書き手の感性や学びの質をあらわす個性の出やすい箇所であり、手紙の最も面白いところであることにも言及した。（２）封筒の書き方では、本学キャリアセンターが作成している『就職活動ハンドブック 2019』を参照して宛先と宛名の位置、敬称の種別、差出人の住所氏名を書く位置等、基本的なことがらを再確認した。また（３）においてわざわざ「封をする、切手を貼る」という項目を設けたのは、過去の礼状送付において誤りが散見されたためである。また 2019 年 10 月の増税で切手の料金が変更になったことにも触れ、過去にお礼状の料金不足で先方にご迷惑をおかけした事例についても話をした。

２．「実習生のマナーとお礼状の書き方」指導のあり方と今後の課題

2019 年 11 月に実施した指導の内容を振り返り、以下の課題が明らかとなった。実習生のマナーでは、服装と身だしなみのほかにも、挨拶や姿勢・表情など基本的な立ち居振る舞いについても触れる必要があったと考える。一部の実習生であるが、実習巡回指導の際に「自分から積極的に挨拶ができない」「声が小さい」「コートやリュックの扱いに問題がる」等のご指摘をいただいた。生活習慣に含まれる部分もあるため、授業だけでなく学生と共に過ごす機会において日頃から基本的マナーについて伝えていく必要があると考える。

また指導を行う自分を振り返り、学生や周囲の方々に笑顔で気持ちの良い挨拶をはじめとして、誠実に向き合えているのかを改めて問い直す機会となった。学生の手本となるのは教員の私であることを胸に刻みつつ、さらに指導の内容と方法の改善に努めていく。

「健康管理」について

野口聡子

日時：2020 年 1 月 16 日(水)　9：00 ～ 9：45

場所：龍谷大学深草キャンパス　(22 号館　603 教室)

実施主体：こども教育学科　1 年生

来場者人数：教員　15 名

1.経緯・目的

保育士養成課程において、保育所・幼稚園実習に向かうにあたり事前指導授業の一つとして「健康管理」について講義を行った。4 月 6 日に開催した入学時のオリエンテーションでは「京の食文化」を学ぶイベントの一つとして「健康と食事」について、「食のバランス」、「朝食の大切さ」を講義した。その後の本講義では、「朝食の大切さ」を復習し、関わる子どもたちが①自分の健康を自分で管理できるように、②食文化を身につけ、心の豊かさが形成されるように、幼児たちを自立に向けて援助するためには、学生自身が自立していなければならないと伝えることを目的とした。

2.講義内容

学生自身にとって日常生活の中での自立の基本は、①朝はだいたい決まった時間に起きる②1 日 3 回 朝、昼、夕に食事をしている③毎日排便がある④睡眠時間は足りていることである。学生自身がそれぞれどのように過ごしているか、どのように今後過ごすべきかを考える機会とした。

1.朝ごはんがからだに良いわけ、2.毎日排便があるか、排便習慣をつけるためにどうするべきか、3.睡眠時間が足りていないとどうなるかを考え、実行できていない場合はどのように取り組むかを伝えた。

最後に、食事のマナー、おはしの正しい使い方とマナーについても伝え、学生自身のマナーを確認し、実習に臨む前に改める機会とした。

3. 講義後のまとめ

朝ごはんがからだに良いわけ

1)からだを温める・・・睡眠中に低下した体温を上げる。

体温がひくいままだと免疫力が低下し、風邪などの感染症にかかりやすくなる。また、基礎代謝が低くなり、カロリー消費が少なく、肥満になりやすい。さらに、熱中症をおこしやすく、汗腺の機能低下で、熱を放出できなくなる等の影響がある。

2）脳への栄養で脳の活動開始・・・ぶどう糖はただ一つの脳のエネルギー

朝食には炭水化物（ぶどう糖）をとり、脳へのエネルギー供給することが必要である。ジュースやコーヒーだけではダメ 12 歳までの栄養は体だけでなく、脳を育てるためにも大切である。

3）便秘に効果的である・・・胃・直腸反射で便意が起こる。

便秘による体への影響では、腹痛 、食欲低下 、集中力がなく、イライラ、だるさ、疲労感 、ニキビ、吹き出物等がある。

4）便秘にならないために

○毎日朝ごはんをしっかり食べること。

○好き嫌いせずに野菜、肉、魚やごはんをしっかり食べること。

○毎朝トイレに行くこと。

朝ごはんを食べて、生活リズムを整えて実習をのりきろう！

食事のマナーについて

1)良い姿勢で食べよう

食事の時の良い姿勢とは、良くない姿勢とは

2)正しい食器の持ち方

3)おはしを正しく持って食べよう

おはしの正しい持ち方、おはしの正しくない持ち方、ぎょうぎの悪い使い方

えんぎの悪い使い方

マナーを守って楽しく食べましょう！

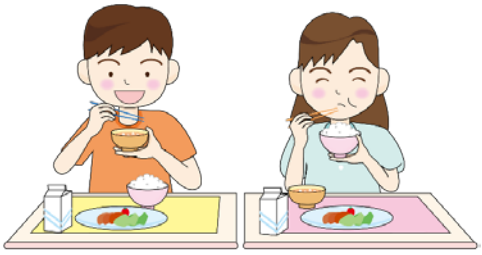
4. まとめ

保育士養成課程において、保育所・幼稚園実習に向かうにあたり「健康管理」について講義を行った。4 月 6 日に開催した入学時のオリエンテーションにおいても「朝食の大切さ」を講義したが、関わる子どもたちが①自分の健康を自分で管理できるように、②食文化を身につけ、心の豊かさが形成されるように、幼児たちを自立に向けて援助するために、学生自身が自立していなければならない。ことを学ぶ機会となった。

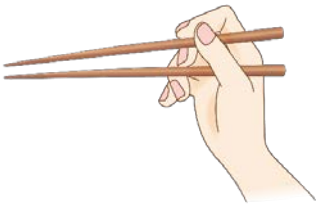
学生自身が自立していなければならないため、①朝はだいたい決まった時間に起きる②1 日 3 回 朝、昼、夕に食事をする③毎日排便がある④睡眠時間は足るように過ごすことを学ぶ機会となった。

最後に、食事のマナー、おはしの正しい使い方とマナーについても伝え、学生自身のマナーと比べ、改めることは保育所・幼稚園実習に臨む前に改める機会となった。

良い姿勢で食べよう



おはしは正しく持ちましょう



ストレス・マネジメントとセルフ・マネジメント

赤澤　正人

こども教育学科の 1 回生にとって、初めての実習は大きなストレスになることは想像に難くない。それは、実習が始まる前に学生が見せるワクワクしていながらも、不安で緊張しているようなアンビバレントな表情からもうかがい知ることができ、実習巡回で学生からの話や相談を聴く中で、十分に実感できる。実習の中でしか学べないことを学び、自らの力にしていくためには、実習期間中のストレスと向き合って、身体だけでなく心も健康を保つことが大きな課題であると言えよう。まずは、筆者が 1 回生に向けて行った、ストレスと上手に付き合うにはどうすればいいのかといった、ストレス・マネジメントの講義を概説する。

私たちが日ごろ口にするストレスを心理学的観点からとらえると、様々な刺激や変化であるストレッサー、ストレッサーに対する捉え方や対処といったストレス耐性、ストレッサーを体験したことで生じる心身の変化であるストレス反応の 3 つの要素に分けて考えることができる（図 1)。

ストレスの原因であると考えられる人間関係、実習記録の作成、食事、体調、気候など、体験しうるものなんでもストレッサーになりうる。そのため極論すればストレスをゼロにすることはほぼ不可能である。だからこそ、ストレスをうまく管理し、お付き合いするストレス・マネジメントが重要になってくる。

ストレッサーをどのようにとらえ、どのように対処しようと考えるかといったことをストレス耐性といい、特にストレスから自分を守ったり、対処したりする様々な方法をコーピングという。例えば、解決策を調べたり、人に相談したりといった問題中心型の方法がある。また、音楽を聴いたり、美味しいものを食べたり、仲間と気持ちを共有し合ったりといった、情動中心型の方法もある。こうしたコーピングは、個人差があることや、一人でできることには限界があることに留意しておく必要がある。自分一人で抱え込まずに周囲に頼る、相談することもストレスに対処するうえでとても大切なことである。

ストレッサーに対してストレス耐性を発揮し、ストレスが自分で対処可能であったり、適度なものであったりした場合には、やる気やパフォーマンスの向上といったポジティブな結果にもつながる。一方で、ストレスが自分にとって過度なもので対処が困難であったり、周囲からのサポートが得られなかったりした場合には、食欲不振や不眠、集中力や意欲低下、不安や緊張、飲酒量の増加といった、心身にネガティブな影響（ストレス反応）を及ぼすことになる（図 2)。

講義の終盤では、自分のコーピングスタイルや、力になってくれる人や大切な人を書き出す簡単なワークを行った（図 3)。これには、自らのストレス対処方法や、ストレスに押しつぶされそうになった時であっても、自分の本来持っている強さやしなやかさ姿を見失わないようにすることの重要性を認識することをねらいがあった。また、実習に取り組むのは学生自身であるが、支えになる人や、応援してくれる人、励まし合う仲間といった、自分の

身の回りの重要他者の存在、いわゆるソーシャルサポートの重要性と、それらを積極的に活用することの意義を認識してもらうねらいがあった。

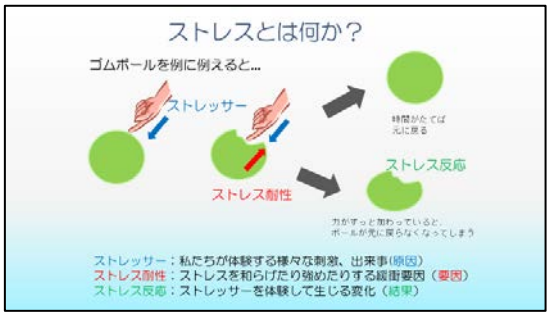


図１　ストレスとは何か

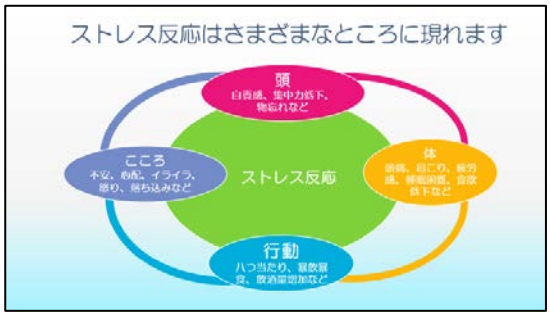


図２　様々なストレス反応

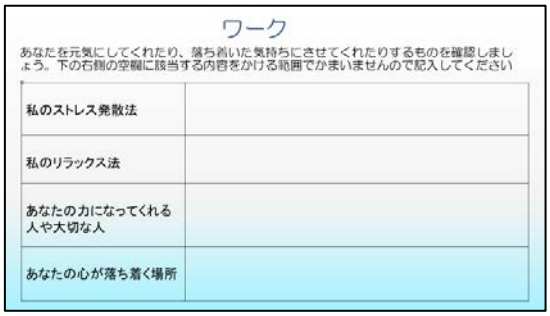


図３　ストレス・マネジメントでのワーク

次に、こども教育学科 2 回生に向けて行ったセルフ・マネジメントの講義について概説する。2 回生は短い期間ながらも充実したであろう学びを経て、就職、編入等それぞれが新たな次のステップに進むことになる。環境の大きな変化によって、様々なストレスにさらされることになるため、上記のストレス・マネジメントが重要になってくるのは言うまでもない。さらに彼らには、大人として社会人として、自らを管理し、自分を見失わずに人間的な成長を続けていくセルフ・マネジメントが大切になってくる。セルフ・マネジメントは、心身の健康管理（ストレス・マネジメント、セルフ・ケア）だけでなく、感情のコントロールや、モチベーション、課題への取り組み、円滑な人間関係の構築など、自分自身を高めていくために、自分を律していく力・能力といえる（図 4）。

セルフ・マネジメントを高める方法として、①具体的で小さな目標を立てて、成功体験を積み重ねる、②感情をコントロールする、③自分を省察し、自らの強みや価値観を知る、といった 3 つの視点を紹介した。①の視点では、1）4 月からの大きな目標、2）大きな目標を

達成するための小さな目標、3）小さな目標を達成するために、明日からでもできそうな具体的な行動を書き出してもらうワークを実施し、新生活に向けてイメージや予測を立てて、小さなことから行動しそれを積み重ねることの大切さを説明した。また②の視点では、認知行動療法の相互作用モデルを用いて、偏った認知が感情や気分、行動にネガティブな影響を及ぼすことを説明した（図 5）。そして、仮想事例のワークを実施することで、認知の癖に気づき、適応的な考えで感情を含めた自分をコントロールする一例を示した。

セルフ・マネジメントを高めるこれらの方法は簡単にできるものではないし、一朝一夕に身につくものでもない。社会経験の中で時間をかけて育んでいくものであるので、とらわれ過ぎて、逆に自分を見失わないようにしてほしい。

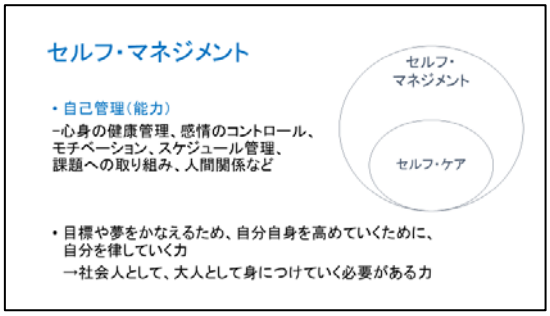


図 4　セルフ・マネジメントとは

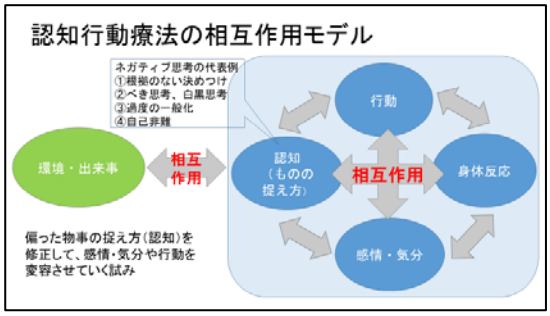


図 5　認知行動療法の交互作用モデル

ここまで筆者が水曜の授業で担当した講義について簡単に概説した。実習に限らず、日常生活も含めた様々なストレスの中で、自分自身をケアし人間的に成長していくことの大切さとその方法を、多くの学生に気づき学んでもらいたい。

反省的実践家への歩み
―ある実習報告から考えたこと―

堺　恵

1　本学科における実習報告の目的とは

本学科では、毎年、2年生による実習報告を実施している。これは、保育実習Ⅱ・保育・教職実践演習という授業の数コマを使い、各クラスでの話し合いを経た上で、その成果を他の学生及び教員たちの前で報告するものである。実習報告は、保育者になるために必要である全ての実習を終えた2年生にとって、実習を通して経験したことや、学んだことを問い直す重要な機会となっている。

本学科においては、実習報告を次のように位置づけている。

> 報告会のねらいは、保育や支援の正解を軽々に導くのではなく、参加者が「もし自分が実習生/職員だったら…その対応でよかったのか」など自分の事として問いなおし、思考を巡らせてみる機会です。反省的実践家（reflective practitioner）と言われる保育者だからこそ、「やりっぱなしにしない」実習教育は、「常にわが身を省みて」（浄土真宗の生活信条）の実践であり、建学の精神にも裏うちされています[1)]。

上の文に示されているように、学生たちは、「保育や支援の正解を軽々に導くのではなく」「自分の事として問いなおし」「思考を巡らせ」た結果を、実習報告において発表する。これは、これまでの学びにおいて、問いに対する正しい答えに早くたどり着くことを求められてきたであろう学生たちにとって、とても難しいことのようである。しかし、本学科の実習報告では、「正解を軽々に導く」ことをよしとしていない。実習中に経験した出来事の、何をどう考えたのかという思考の過程を報告することが求められるのである。

こうしたことに慣れていない学生たちは、報告に際して、当然のことながら、戸惑い、悩み、苦しむ。だが、この戸惑い、悩み、苦しむといった経験に耐えうることこそが、反省的実践家といわれる保育者にとって、重要な経験の一つではないだろうか。

本稿では、「保育や支援の正解を軽々に導くのではなく」「自分の事として問いなおし」「思考を巡らせ」た実習報告の一例を示す。そして、学生たちが、実習を通して何をどのように考えたのか、そのプロセスを記したいと思う。さらには、保育者を養成する立場にある教員として、筆者が学生たちの報告を「自分の事として問いなおし」「思考を巡らせ」た結果を述べたいと思う。つまり本稿は、保育者を目指す学生たちと保育者養成に携わる教員である筆者の、反省的実践家としての足跡を辿るものである。

2　実習報告の一例　－“実習生が一人っきりになること”についての報告－

本稿で取り上げるのは、「私はどうしたらいいの～一人ぼっちは怖い～」と題された、あるクラスの報告である。以下に、報告の概要を示す。

1）報告の契機となった出来事

障がい者施設での実習中、ある利用者が突然発作を起こした。その場に職員は不在であり、実習生だけしかいなかった。突然の出来事に、実習生である自分はとっさに動くことができなかった。しかし、他の利用者が職員を呼びに行き、事なきを得た。

2）この出来事を取り上げた理由

1)で示した出来事を通して、学生は、実習生だけでその場を任されていたことに不安と恐怖を覚えたという。そして、障がい者施設での仕事の大変さにも驚いたという。このクラスでは、学生が経験したこの出来事について、他の学生たちと共有したいと考え、報告の題材として取り上げることにした。

3）報告を通して考えてみたいこと

この報告では、他のクラスの学生たちと共に考えてみたいこととして、次の 2 点が挙げられていた。1 点目は、他のクラスの学生たちのなかでも、実習生だけでその場を任され、戸惑った経験を持つ人はいるのか、ということである。2 点目は、施設の種別によって、実習生だけでその場を任される機会が多い、または少ないなどの違いはあるのか、ということである。

4）アンケート調査の実施

3)で示した、報告において考えてみたいことの 2 点にアプローチするため、学生たちは、2 年生全員にアンケート調査を実施している。アンケート調査の項目は、次のようなものであった。

・実習中に実習生だけでその場を任された時間はありましたか。
・実習生だけになった時、何か困ったことはありましたか。

このアンケート調査における「実習」とは、保育所、幼稚園以外での実習を指している。

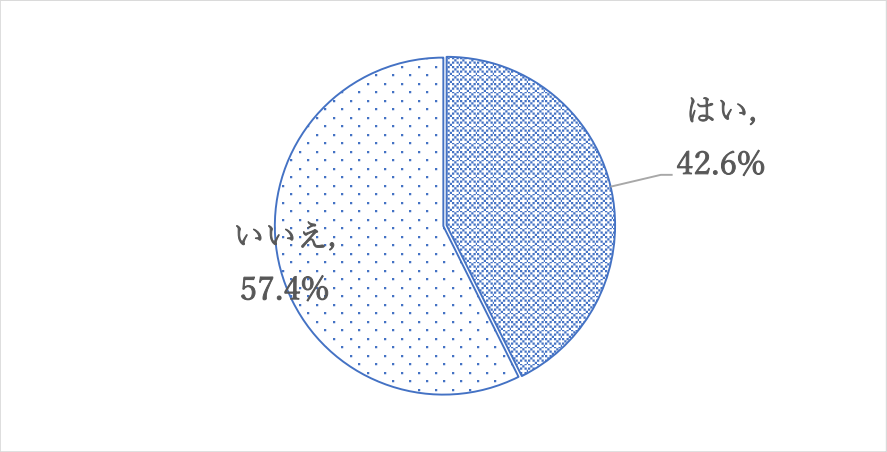
つまり、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設、母子生活支援施設、児童発達支援センター、障がい児・者の入所施設及び通所施設等での実習のことである。

また、このアンケートでは、実習生だけになって困ったことがあったと答えた人に対し、実習先の施設の種別を尋ねている。さらには、困ったことを具体的に記述するよう求める箇所を設けていた。

5）アンケート調査の結果

アンケート調査の結果、次のような結果が示された。

(1) 実習中に実習生だけでその場を任された時間の有無

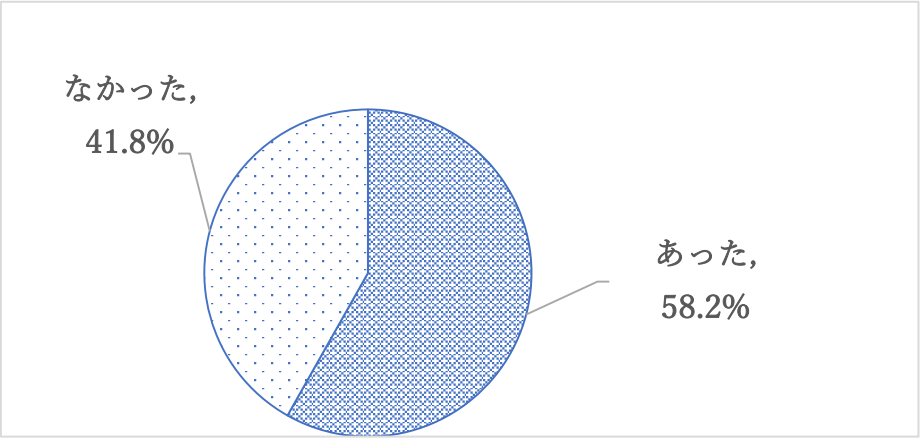


(図１)実習生だけになった時間の有無

学生たちのうち、実習中に実習生だけでその場を任された経験を持つ者は、全体の 42.6%であった。つまり、アンケート調査に答えた半数近くの学生が、実習中に一人きりになった経験をしていたのである。

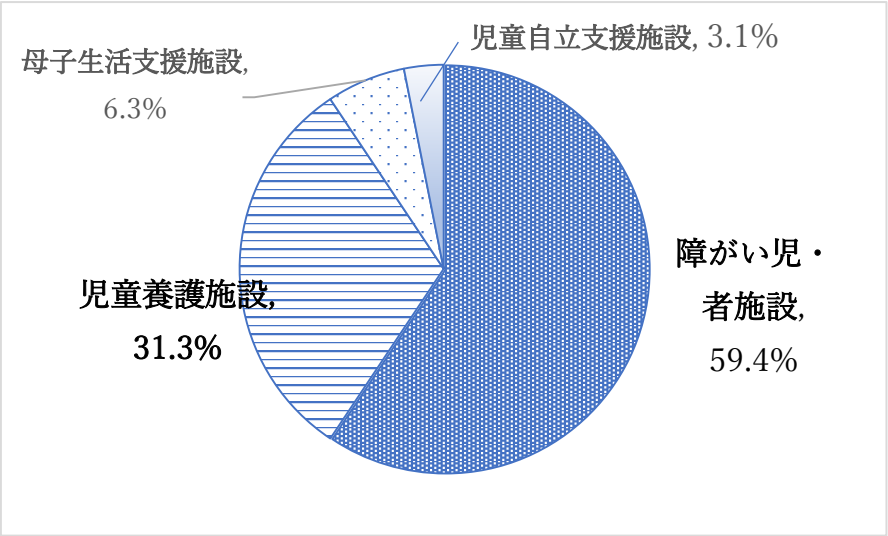
(2) 実習生だけになった時の困りごとの有無

(図 2)は、実習中にその場を任された経験を持つ者に対して、困ったことがあったかどうかを尋ねた結果である。その結果、実習中に一人きりになった経験を持つ者の半分以上にあたる 58.2%の学生が、「困ったことがあった」と答えている。



（図２）実習生だけになった時の困りごとの有無

(3) 困りごとがあった施設の種別



（図 3）実習生だけになった時に困りごとがあった施設の種別

（図 3)は、 実習先で一人きりになった時、困ったことがあったと答えた学生の実習先の種別をまとめたものである。一番多かったのが、障がい児・者施設の 59.4%である。ついで、児童養護施設 31.3%、母子生活支援施設 6.3%、児童自立支援施設 3.1%の順となっている。

(4)　困りごとの例

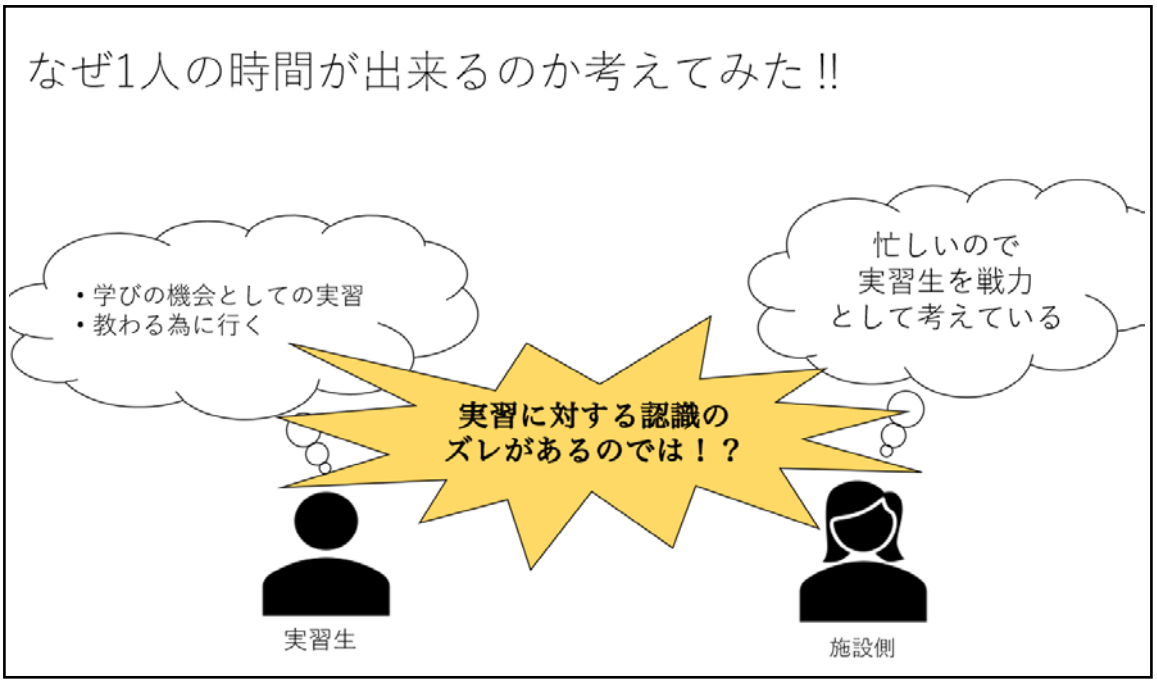
(表 1)　実習生が一人だけになった時の困りごとの例(施設別)

1 障がい児・者施設	1)失禁された時、嘔吐された時の処理の方法が判らない。 2)他害のある利用者の調子が悪くなった時が怖い。 3)排泄の際、女児が月経になったのをみて、「血!見て!血が出ている!」とパニックになって困った。 4)職員は食事中の子どもについているため、食事の終わった子どもたちが集まるホールに、実習生が一人になった。 5)子どもが自由な行動をとる(例:棚の上に乗る、人の物を勝手にとる等) 6)障がいの程度に差があり、どう接すればいいのかが判らない。 7)遊びたくないという子どもへの対応が判らない。 8)全員が遊びに参加してくれるわけではなかった。 9)車椅子、押し車の使い方が判らなかった。 10)就学前の障がいを持つ子どもたちへの、設定保育の方法が判らなかった。 11)その他
2 児童養護施設	1)子どもたちとリビングにいるとき、どうすればいいのか判らなかった。子どもたちと一緒にテレビを見て、関わろうとしたが「テレビを見ているだけではダメ」と言われた。 2)テレビの視聴中、小・中・高校生の男児とどのように接すればいいのかが判らなかった。 3)子どもが親の話をしてきた時、どのように反応すればよいのか判らなかった。 4)子どもたちと実習生だけの時、子ども同士でケンカが起こり、対応に困った。 5)サッカーをしている時、子どもたちがぶつかった時、対応に困った。 6)子どもとうまく話せない。
3 母子生活支援施設	1)一時預かりの生後 7 か月の子どもの世話を 1 時間ほど行った。 2)暴力をふるう子どもに、実習生の声かけによって、保育室に戻るよう促すことが難しかった。
4 児童自立支援施設	3)ひどく暴れる子どもがいた(奇声をあげる、物を投げつける、職員の靴を全て出す　等)

このアンケート調査では、実習先でどのような困りごとがあったのかを問う箇所を設けてあった。その結果を学生がまとめたものが、(表 1)である。(表 1)では、実習先で一人きりになった時の困りごとが、施設の種別ごとに整理されていた。

6) 学生たちの問い　―なぜ、実習生が一人だけになる時間が出来るのか―

以上のことを踏まえ、学生たちは、「なぜ、実習生一人だけになる時間が出来るのか)」という問いを立てた。この問いに対する学生たちの考えは、実習生である学生たちの意識と、施設職員の意識との間にズレが生じているのではないかというものであった。学生たちは、学びに行くという意識を持って、実習に臨んでいる。しかし、学生たちからすると、施設職員は仕事が忙しいことを理由に、自分たちを戦力として考えているようにみえたという。学生たちは、この意識のズレが、実習生一人だけになる時間が出来てしまう原因ではないかと考えたのである。この点について、学生たちが報告の中で図示したものが、(図 4)である。



(図 4)学生たちが考えた実習生と施設側の実習に対する意識のズレ

(図 4)に示したことについて確認すべく、学生たちは、障がい児・者施設での勤務経験のある教員 2 名に話を聞きにいっている。教員たちは、障がい児施設における個別療育は子どもと施設職員との 1 対 1 で行われるが、集団療育はそうではなく、必要に応じて職員がその場を離れることもあると伝えている。また、施設職員が忙しいかどうかは、その施設によって異なるといったことも、学生に伝えている。

教員たちの話を聞く中で、学生たちは、施設職員は忙しいことから実習生を戦力と考え、実習生を一人だけにしてしまうという自分たちの考えが、正しいとはいえないということを理解する。そして、実習中に一人だけになってしまう可能性があるが、事前に実習の担当者を確認しておくことや、利用児・者の情報を把握しておくなどの行動で対応すべきであると結論づけていた。

3 実習報告から教員が考えたこと

1) 一人だから困ったわけではない

この報告の中で、筆者の印象に残ったことがある。それは、実習生が一人だけになった時の困りごとの例(表 1)には、一人だけになったことから生じた困りごととはいえないものが含まれていること、である。

例えば、障がい児・者施設で実習生一人きりになった時の困りごととして、「障がいの程度に差があり、どう接すればいいのかが判らない」や、「遊びたくないという子どもへの対応が判らない」、「就学前の障がいを持つ子どもたちへの、設定保育の方法が判らなかった」といったことが挙げられている。これらは、その場に施設職員がいてもいなくても、実習において学生が戸惑い、悩むことではないだろうか。

また、児童養護施設で実習生一人きりになった時の困りごとは、そのほとんどが、子どもとコミュニケーションをとることの難しさに関するものである。例えば、「子どもたちとリビングにいるとき、どうすればいいのか判らなかった。」、「テレビの視聴中、小・中・高校生の男児とどのように接すればいいのかが判らなかった」、「子どもとうまく話せない」などである。これらは、実習生が一人きりになったことから生じる困りごとではない。実習生として子どもとどう接するか、このことに対する戸惑いである。そして、この戸惑いは、誰かがそばにいることや、誰かに接し方を尋ねることで、すぐに解決できることではない。子どもとの関係は、子どもとの関わり方について自らが考え、実行し、また考えて実行するという積み重ねによって構築されるものである。

また、「子どもが親の話をしてきた時、どのように反応すればよいのか判らなかった」という困りごとを書いた学生がいた。学生は、複雑な事情を抱えた子どもの語りに触れ、胸を痛めたと同時に、その深刻さに驚き、戸惑ったのだと思う。そして、子どもたちの心に伝わるような言葉を自分の内面から探してはみたものの、見つけることができなかったのであろう。しかし、このこともまた、一人きりでなく、傍らに他者がいたとしても、どうにかなることではない。また、子どもの心に伝わる言葉など、簡単に見つけ出せるはずもない。筆者の想像ではあるが、この学生は、「子どもが親の話をしてきた時」の対処法を知りたいのではなく、子どもの語りに対して自分が感じたことを他者に表出したかったのではないだろうか。しかし、その場には誰もいなかった。自分が感じたことを伝える相手がいなかったことが、この学生にとっての困りごとだったのではないだろうか。

(表 1)をみると、学生たちは、実習中に一人きりになることによって、自分の戸惑いを表出できないことやすぐに指示を得られないこと、そのために咄嗟に自分で考えて行動することへの怖さを感じたのではないか思う。

2) 「ゆらぎ」続ける力を育む実習教育を目指して

しかし、学生たちが実習中に一人きりになることによって感じた怖さは、悪い経験ではない。むしろこの経験こそが、反省的実践家として必要な歩みではないだろうか。この怖さに向き合うためには、本学科の実習報告の目的である「保育や支援の正解を軽々に導くのではなく」「自分の事として問いなおし」「思考を巡らせ」るしかない。それは、保育者として、正解のない道を歩み続けることを指す。

尾崎(1999)は、社会福祉を実践するなかで、援助者が経験する動揺、葛藤、不安、迷いといった「ゆらぎ」を、実践の専門性や質を高めるための出発点としている[2)]。本稿で示した実習生だけになった時の困りごとは、尾崎の言葉でいえば「ゆらぎ」である。このゆらぎに対する答えはない。ただひたすら反省的実践家として、経験した出来事について「思考を巡らせ」続けるしかない。実習での経験を契機として、学生たちには、「ゆらぎ」を恐れることなく、「ゆらぎ」続ける力を獲得してほしいと思う。そして、筆者は、実習教育を担当する教員として、「ゆらぎ」続ける力を育むための教育について探究していきたいと思う。

---

1) 龍谷大学短期大学部こども教育学科ホームページ
(https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-4778.html 2020 年 3 月 12 日閲覧)

2) 尾崎新(1999)『「ゆらぐ」ことのできる力ーゆらぎと社会福祉実践』誠信書房。

実習事前指導における障害理解に対する取り組みとその試験的評価

松溪　智恵　武岡ゆかり

1.はじめに

障害児者施設の実習に臨む学生に向けた事前指導は、既習内容や障害についての理解を深める重要な機会である。保育士ならびに幼稚園教諭を目指す学生に向けて、障害がある人に関する内容を取り扱う機会は限定されているためである。本学でも「特別支援保育」を主とし、「子ども家庭福祉」などの科目にも障害児者やその保護者に関する内容が含まれているものの、保育士や幼稚園教諭を目指す学生に向けた授業となるため、基本的には幼児期や児童期に関する内容が中心となる。

しかしながら、保育実習(施設)においては、多くの学生は成人を対象とした障害者施設で実習を行う。これまで学習する機会が少なかった年齢層を対象とした施設で実習することとなり、そのことに不安を抱える学生も多い。そもそも、保育士や幼稚園教諭を目指す学生であるため、施設実習自体に不安を抱える学生が多いことも他大学の調査で明らかにされている (多田内・重永 2014)。つまり事前指導においては、学生の不安を取り除くことも重要となる。実際「どのような施設なのか」や「障害がある人との接し方の具体例」を知りたがる学生も多い。

しかし、障害者施設で勤務してきた教員として、施設実習を単なる資格取得に必要な実習ではなく、障害理解の機会に繋げていきたいと考えている。なぜならば、保育士や幼稚園教諭の障害理解や障害児者への接し方は、障害児だけでなくその周りの子どもたちの障害理解にも影響を及ぼすと考えるためである。

そのため、事前指導の目標として、実習施設に関する紹介や、既習内容の整理を通して障害理解を進めることを掲げ授業を実施した。また、その目標がどの程度達成できたかを確認するために実習事前指導における障害児者に関する授業の事前事後にアンケートを実施し、分析を行った。

2.実施日時

2019 年 5 月 1 日と 5 月 8 日の 2 講時目

3.対象者

「保育実習指導III」を受講した学生 141 名に対して授業及びアンケートを実施した。5/1 の授業前に実施した事前アンケートの回収率は 90.0％、5/8 の授業後に実施した事後アンケートの回収率は 91.4%であった。

4.授業内容

5 月 1 日

(1) 既習内容の再整理

「障害」の定義について、社会モデルの観点から説明をした。具体的には、「身体」障害、「知的」障害のような定義は、医学的な診断を中心に捉えた言葉であり、あくまでも支援をする上での手掛かりにすぎず、本人が日常生活のどの場面で困っているのかに着目することが重要であることを説明した。そして、どの場面で困っているのか、支援を必要とするのか、ということを明らかにした上で、本人が希望する生活の実現を援助するのが福祉サービスの役割であることを説明した。

(2)映像視聴

2017 年に NHK で放送された「発達障害～解明される未知の世界～」の一部分を視聴した。先の授業内容の 1 つの例として、障害が「ある」ことが周囲の人に気付かれにくい人や、他者からは想像しにくい感覚面での困難がある人などを知ってもらうというねらいがあった。

5 月 8 日

(1) 施設の種類について学ぶ

障害児者の生活を支える仕組みとして、様々な種類の福祉サービスが存在していることを、その種類を一覧で示しながら説明した。その後、それらのサービスを利用するためにどのような手続きが必要であるか、なぜ必要なのかを説明した。

(2)映像視聴

施設実習で学生が配属される可能性が高いサービスである、児童発達支援と就労継続支援 B 型については、映像を用いてより具体的に説明した。また、通所施設と入所施設の 1 日の流れや支援員の仕事を比較してみることで、実習生としてどの場面にどう関わるのかのイメージを持ってもらった。

(3) 障害者施設実習における実習の目的

保育士・幼稚園教諭を目指す上で、成人を対象とした施設で実習を行う意義について説明した。子どもに適切な支援を行うためには、成長した姿も知っておく必要があること、特性に対する支援は発達段階の支援が含まれる障害児施設よりも、障害者施設の方が学生にとっては学びやすい環境であることを伝えた。

(4)保育者としての留意点

授業のまとめとして、加配制度と保護者が経験する障害受容の過程について説明を行った。施設実習や保育所実習、教育実習を経た学生の振り返りにおいて、障害児の支援方法で加配制度を挙げる学生が多いためである。加配制度の利用までの基本的な流れを整理し、子

ども本人だけでなく、保護者の支援も不可欠であることを伝えた。

5.調査内容

事前アンケートにおいて、学生の障害理解を把握するために、「あなたが『障害がある人』と聞いてイメージするのは何ですか？」という問いを記述形式で設定した。

そして、学生の自己理解を評価することを目的として「障害がある人に関して自分がどの程度理解していると思いますか？」という質問を設定した。回答は「①よく理解できている(障害がある人の特性などを自分なりに簡単に説明できる)」、「②だいたい理解できている(上手く説明はできないが意味は分かる)」、「③聞いたことはある(授業で学んだ記憶はある)」、「④理解できていない(授業は受けたが理解できなかった・覚えていない)」、「⑤わからない(判断できない)」という 5 件法を用いた。

事後アンケートでは、5/1 および 5/8 の授業を受講したことによって授業後に障害理解に変化が見られたかを確認するために「授業を受ける前と受けた後で『障害がある人』のイメージは変わりましたか？」という問いに対して、「①変わった」、「②変わっていない」、「③わからない」のいずれかをまず選択してもらった。その上で、「①変わった」、「②変わっていない」を選択した学生に対してはその理由を記述してもらうようにした。

そして、授業内容のどの点が印象に残ったかを確認するために「5/1 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またその理由はなんですか」、「5/8 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またその理由はなんですか」という記述式の問いを設定した。

6.分析方法

事前アンケートの「あなたが『障害がある人』と聞いてイメージするのは何ですか？」と、事後アンケートの「授業を受ける前と受けた後で『障害がある人』のイメージは変わりましたか？」という質問の「変わった」と回答した学生の「どう変わったか」という質問の記述内容をカテゴリ化することによって、学生の障害理解の段階とその変化を測定することを試みた。

カテゴリ化においては、理論的枠組みとして徳田と水野(2005、2014）が提唱した「障害理解の発達段階」を採用した。これは、障害の理解は「気づきの段階」「知識化の段階」「情緒的理解の段階」「態度的形成段階」「受容的行動の段階」の 5 段階に分かれるとする理論である。その枠組みの詳細は表 1 に示したとおりである。授業担当者両名が、記述内容がどの段階に該当するか分類した。2 者で評価が分かれた学生に関しては回答のすり合わせを行ったうえで、再度分類した。なお、徳田と水野の発達段階において並列の段階であるとされる、「知識化の段階」と「情緒的理解の段階」に関しては学生の記述内容が知識の面にある場合は「知識化の段階」、学生本人がどう感じるかについて記述がある場合は「情緒的理解の段階」であるとカテゴリ分けを行った。

事後アンケートの「5/1・5/8 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またそ

の理由はなんですか」に関しては、記述内容を整理し、学生の印象に残った内容に関して、その傾向を概括的に把握した。

表 1　障害理解の段階(徳田・水野 2005 と徳田・水野 2014 より)

<第 1 段階> 気づきの段階	障害のある人がこの世の中に存在していることに気づく段階。子どもは差異に気づき、それに興味を持つことは当然であるが、そこにマイナスのイメージを持たせたり、親などの周囲の大人が子どもの気づきを無視したりしないなどといった配慮が必要である。この段階は障害や障害児・者に対するファミリアリティ(親しみ)向上の第一期と位置付けることができる。
<第 2 段階> 知識化の段階	差異が意味をもつ意味を知る段階。そのためには自分の身体の機能を知り、また障害の原因、症状、障害者の生活、障害者の接し方、エチケットなど広範囲の知識を得なくてはならない。
<第 3 段階> 情緒的理解の段階	第 2 段階の知識化の段階と並列される段階である。障害児・者との直接的な接触(統合保育、統合教育、地域で行われるイベント、町で偶然会うことなど)や間接的な接触(テレビや映画などの映像、書物、周囲の大人の話など)を通じて障害者の disability（機能面での障害）や handicap(社会的な痛み)を「心で感じる段階」といえる。ここでは pity(哀れみや同情)、fear(恐れや罪悪観)や guilt(罪悪感)、discomfort(不安)などのネガティブな感情も含まれる。またそのような感情を持ったとしても特に問題にしない。さらに色々な体験をとおして障害児・者をより身近に感じられるように、またより受け入れられるように促して教育していく。
<第 4 段階> 態度的形成段階	十分な第 2 段階と第 3 段階の体験を経た結果、適切な認識（体験的裏付けを持った知識、障害観）が形成され、障害者に対する適正な態度ができる段階。第 2 段階の学習と第 3 段階の体験が皆無、あるいはきわめて不十分である幼児や小学校低学年の子供は態度が形成されていないと考えるべきである。 いったん態度が形成された後に、それを補完する形での学習と体験が継続されていき、態度はますます強固なものになる。その際、自分の態度と認知的不協和の関係になる情報は軽視されるので、かなり意図的な情報提供をしないと態度を変容させることはできない。
<第 5 段階> 受容的行動の段階	生活場面での受容、援助行動の発現の段階。すなわち自分たちの生活する社会的集団(学校、クラブ、会社、地域、趣味のグループなど)に障害者が参加することを当然のように受け入れ、また障害者に対する援助行動が自発的に現れる段階。

7.結果

(1)授業前後における障害理解の変化について

①「あなたは、障害がある人に関して自分がどの程度理解していると思いますか？」(事前アンケートより)

「だいたい理解できている(上手く説明はできないが意味はわかる)」と回答した学生が最も多く、66 名であった。その次が「聞いたことはある(授業で学んだ記憶がある)」で 58 名であった。「理解できていない　(授業は受けたが理解できなかった・覚えてない)」と回答した学生はおらず、「わからない(判断できない)」と回答した学生も 1 名だった一方、「よく理解できている(障害がある人の特性などを自分なりに簡単に説明できる)」と回答した学生も 1 名にとどまった。

②「あなたが、『障害がある人』と聞いてイメージするのは何ですか？」(事前アンケートより)

記述内容が障害理解のどの段階になるかを分類すると、「目に見えて障害があると分かる人」などと回答し、第 1 段階に分類された学生が 4 名、「精神的・もしくは身体的に普通の生活を送る上で何らかの困難がある人」などと回答し、第 2 段階に分類された学生が 76 名、「怖い。会話がしにくい、できない。いきなり大きい声を出したり、触ったりする。」などと回答し、第 3 段階に分類された学生が 26 名、「他人の手を借りないと生活しにくい部分がある人。道具(車いす)があると生活が助かる人」などと回答し、第 4 段階に分類された学生が 19 名、「周りの人の支援、環境が大切。社会で生活できるように個性を生かしながら頑張る」などと回答し、第 5 段階に分類された学生が 2 名であった。

③「授業を受ける前と受けた後で『障害がある人』のイメージは変わりましたか？」(事後アンケートより)

「変わった」と回答した学生が 105 名、「変わっていない」と回答した学生が 10 名、「わからない」と回答した学生が 13 名であった。「変わった」と回答した学生で、事前アンケートを提出している学生 97 名の、「『変わった』と回答した人はどう変わりましたか」を 5 つのカテゴリに分けた。第 1 段階に分類された学生はおらず、「障害がある人でも労働していることが分かった。」などと回答し、第 2 段階に分類された学生が 21 名、「障害がある人といってもいろいろなタイプがあったり、施設もたくさんあったり、前よりどこか身近に感じた。」などと回答し、第 3 段階に分類された学生が 23 名、「何に関しても援助を受ける人というイメージがあったが、環境作りがされていることで仕事や生活を自分の力で行うことができるということが分かった。」などと回答し、第 4 段階に分類された学生が 41 名、「自分でやりたいと思ってもできないことが多いから手伝ってあげたいという気持ちが強くなった。外のバリアフリーとかでも、使いにくいなと思うことがあることがわかった」などと回答し、第 5 段階に分類された学生が 6 名であった。

(2)授業で印象に残った内容に関する回答について

①「5/1 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またその理由はなんですか」(事後アンケートより)

・本人以外は気づかないような障害もあるということが印象に残った。今まで関わってきた人の中にも気づかなかっただけで障害を持っていたかもしれないと思ったため。

・障害を多面的に見るという話が印象に残っています。私自身、障害について多面的に見ていなかったからです。障害を持っている方は、生活が全体的に大変そうだなというイメージが強かったです。でも実際は、この部分は難しいけどこの部分はできるというふうに、それぞれ難しいと感じる部分は人それぞれだということを改めて学びました。その、難しいと感じる部分を支援できるように知識が必要だと思いました。

・感覚過敏の人たちを取り上げた VTR で、音がうるさすぎてスーパーに 10 分といられなかったり、視界が明るすぎて目が痛んだり、そんな症状があることを初めて知り驚いた。本人以外には理解されにくかったり、個人差があったり、感覚過敏の人に配慮した環境を作るのは難しいと思うけれど、もっと周りの人に知って欲しいと感じました。

・映像の中に出てきた障害を持つ人の見え方や聞こえ方が印象に残りました。視覚過敏や聴覚過敏など、症状がない人にはどのように感じるのか理解が難しいものだと思いますが、「どのように見えているのか」ということを再現することで互いに理解し合えるのではないかと思いました。また、辛いことを知っておくことで配慮できることも増えるように感じました。

②「5/8 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またその理由はなんですか」(事後アンケートより)

・施設での 1 日の流れやサービスの内容の話が印象に残りました。1 日の流れを、一例だったとしても聞いておくことができたことによって、そんな生活が営まれているのかを少しイメージすることができました。

・施設にもたくさん種類があり、その人その人の障害のレベルでその人に合った施設を選び、関わっていくことが大切だと思った。障害があっても働いている人がいることにびっくりしました。私たちと同じように社会に出て働いている人もたくさんいることを知り、自分なりに頑張っているということが知れて良かったです。これから施設の実習に行くにあたって、知らないことがたくさんあり、行く前に知れて良かったです。

・支援が必要な子どもを持つ保護者の気持ちについて、すぐに受け入れられなかったり、受け入れたつもりでいてもやっぱり否定したくなったり、気持ちはとても複雑であることを知って、子どもと保護者両方の支援の難しさを感じた。

・印象に残っているのは、保護者の気持ちの変化です。子どもを預かる側は、どうしても加配をつけたり施設に通う方が良いのではないかと思うが、保護者の立場になると受け入れられない気持ちが強いのは当たり前なんだと感じました。保育者は、子どもはもちろんですが、その保護者への配慮の大切さを学べました。

8.考察

(1)授業で印象に残った内容に関する回答から

「5/1・5/8 の授業を受けて印象に残った内容を挙げてください、またその理由はなんですか」という質問に対しての学生の回答として多かったものが、「障害者は周りからの援助がなくては生活ができないとの認識だったが、障害の程度に合わせた適切な支援（環境調整含む）があれば自立した生活も可能になるということが初めて分かった。」、「障害者は働くことが困難だと思っていたので、一般企業で就労されている方もいるという事実に驚いた。」など、これまでの障害児者に対するイメージの変化を述べたものであった。

その他、「障害者支援施設（サービス）の種類の多さに驚いた。」「障害者施設＝障害者が通っている・暮らしている施設だとの認識だったが、施設によって内容が全く違うことを知り、驚いた。」「障害児を対象としたサービスの種類が少ないことに驚いた。」など、サービスについて言及する学生も見られた。また、「加配は保育者の独断で決められるものではないこと。保護者がどの程度子どもの障害を受容できているのかを慎重に見極める必要があり、全ての保護者が加配に前向きなわけではないことを理解しておく必要がある。」と保育者としての態度に言及する学生も見られた。

障害児者に対する捉え方や加配制度に関しては、他の科目でも取り扱われてきた内容である。しかし、そこを印象に残ったと回答する学生が一定数存在するということは、障害理解のためには、科目を変えて繰り返し伝えていき、理解を促す必要性があることが示唆される。サービスの種類に関しては、学生が実際に行く施設を紹介するのにとどまらず、全体としてどのようなサービスがあるのかという比較の中で学びを深めていくことが効果的であることが示されている。

(2)学生の自己理解の評価や、記述内容のカテゴリ分類から

学生の多くはこれまでの授業内容を理解していると回答している一方で、記述内容をみると障害の症状や障害名の記述や、障害者に対する「怖い」という感情などを説明する学生が多くみられ、事前アンケートの回答では多くの学生が第 2 段階と第 3 段階に分類された。授業などによって障害に対する知識は蓄積されつつあるものの、自身の経験や障害児者の生活する姿と結びつきづらかったことが予測される。事後アンケートにおいても、自身の心情面に言及する学生は多く、障害理解において時間を必要とするのは知識面よりも心情面であることが示唆されている。それでも、授業において、医学モデルと社会モデルとの違いや、障害児者のサービス等を説明したことによって、障害児者の理解や生活像を捉えることが出来た学生も少なくないことが第 4 段階に分類された学生の増加に現れているといえる。

(3)今後の課題

授業内容の理解度について、今回は学生の自己評価により測定した。しかし、既習内容について教員から問われた際に「わかっていない」と学生は回答しにくく、回答に偏りが見ら

れた可能性がある。今後は「支援場面」や「知識面」など質問項目を分け、具体化することでより正確な理解度を測定したい。また、記述を分類する作業においても、評価者によって評価が分かれることが多いという問題が残った。先行研究などを活用し、より厳密な分析を目指していきたい。何より、今回の結果は「授業後」という即時的な結果であるため、この結果が持続するのか、変化するのかという点については、継続した調査が必要であると考える。

授業内容についても、改善すべき点が残っている。例えば、サービス利用や相談支援について、印象に残ったこととして言及する学生が少なく、内容が難しかったことが予測される。また、就労施設などの感想も「楽しそうに働いていた」という感想が目立ったため、伝える内容を再検討していく必要がある。他にも映像の視聴を印象に残ったものとして言及する学生も多いが、内容を誤解しているコメントも見られた。視聴後にスライド等を活用しながら映像の趣旨が正しく伝わるよう努めていきたい。

9.おわりに

障害児者に対する理解を学生に促すことは、保育士や幼稚園教諭の育成という観点だけでなく、インクルーシブな社会の実現を目指すうえでも、非常に重要である。今回の結果を見ると、事前と事後で、障害理解の各段階の人数に変化が見られた。どの段階であるのか、ということに注目するよりも「変化する」という点に注目することが重要であると考える。2 年間を通し実施される実習事前事後指導において、繰り返し障害について取り扱うことで、学生の障害理解の変化を支えていき、さらなる障害理解に繋がるようにしていきたい。

参考文献

多田内幸子・重永茂 (2014) 「施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査」, 久留米信愛女学院短期大学研究紀要 (37),69-76. <https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11037101_po_ART0010328257.pdf?contentNo=1&alternativeNo=> (2020/3/16 最終アクセス)

徳田克己・水野智美 編 (2005)『障害理解　心のバリアフリーの理論と実践』誠信書房.

徳田克己・水野智美 (2014) 「身体障害、発達障害の理解教育の段階モデルの提案」障害理解研究 (15), 1-8. <http://hdl.handle.net/2241/00152040> (2020/3/16 最終アクセス)

保育・教職実践演習（幼稚園）における各種実習の省察・反省・ふりかえり
―現状整理と猛省、今後の私たち教員の課題―

中根　真

はじめに

例年 11 月～12 月にかけて、こども教育学科 2 年生の各種実習の事後学修が展開される。具体的には保育実習Ⅱまたは Ⅲ（いずれかを選択）、保育実習Ⅰ（施設）、教育実習（秋期）の 3 種類の実習について、各クラスで発表し合い、話し合い、実習報告会の準備を進め、実習報告会で発表する。筆者は例年、実習報告会の司会・進行係を務めているため、これをテーマにふりかえって述べてみたい。

１．実習事後学修の導入（9 月 18 日 2 講時）

別紙のパワーポイント（参考資料）を活用しながら、各種実習の省察・反省・ふりかえりの重要性を説明して導入とした。例年は板書で対応してきたが、個人芸にしないねらいから今年度初めてパワーポイント資料を作成した。

内容のポイントは、なぜ本学では実習を「やりっぱなしにしない」のかについて、その根拠を倉橋惣三『育ての心』（1936 年）にさかのぼり、「子どもらが帰った後に」などを紹介し、保育者はつまるところ反省的実践家（reflective practitioner）であること、したがって「やりっぱなしにしない」実習教育の必然性を説明した。

２．各クラスワークの展開（9 月 18 日 2 講時～11 月 6 日 3 講時）と若干の課題提起

計 5 回の実習ふりかえりを行い、実習報告会の準備を進めた。

各クラスの学修展開は多様であるが、基本的には初回に作成した「各実習における私の喜怒哀楽」シートをベースにクラス内で情報共有し、実習報告会でのテーマや内容、発表方法の検討を進めていった。

なお、今年度は、あるクラス担任からクラスワークに対し、消極的な 2 名の学生の対応相談があり、筆者と教務委員が個別面談を実施した。面談の結果、前期開講の別科目における人間関係トラブルが背景にあり、その影響下でクラスワークが進行している状況を把握した。相性の問題もあるが、4 月以降は社会人生活も始まるため、たとえ苦手意識のある人とも協力し合う必要性を再確認する場となった。

上記の対応事例は、教員にとっては大変些細な出来事のように感じるが、学生にとっては一大事なのかもしれない。感じ方や受け止め方に世代間ギャップもあるだろう。いずれにしても、学生生活のなかの些細な出来事がクラスワークなどグループワークを進める上での支障になりうるという事例として直視したいと考える。無論、人間関係の悩みは永遠の課題の 1 つであろうが、子どもたちの育ちを支える保育者を志望する学生においても例外では

ない。砂上史子編著『保育現場の人間関係対処法　事例でわかる！職員・保護者とのつきあい方』（中央法規出版、2017 年）なども紹介しながら、今後はこうした側面の指導や教育的な促しが必要であるのかもしれないと考える。

３．実習報告会の展開

今年度は厳正な抽選の結果、以下のとおり実習報告会を順次実施した。

	報告クラス１	報告クラス２	報告クラス３
11 月 20 日	赤澤 これで合ってる…？ （保育実習Ⅱ）	野澤 食事を美味しく食べたい‼ （保育実習Ⅱ）	生駒 子どもに対する感情のコントロールについて（保育実習Ⅰ(保育所)）
11 月 27 日 ＊正午終了	羽渓 変わる瞬間 （保育実習Ⅱ＆Ⅰ(施設)）	土井 ゆるやかな発達とその背景を探ってみた （保育実習Ⅰ(施設)）	齊藤 保育をする上で大切にしたいこと （保育実習Ⅱ）
12 月 4 日	北村 作品展用の絵とは （教育実習(秋期)）	中根 子どもの主体性とは～限られた時間の中で～ （教育実習(秋期)）	野口 トイトレトレーニング事情 （保育実習Ⅰ(保育所/施設)、Ⅱ、Ⅲ）
12 月 11 日	田岡 多様な家庭の背景をもった子どもたち(保育実習Ⅰ(施設))	星野 抱っこ～状況に応じた対応～ （教育実習(秋期)）	松渓 見本のあり方～パラバルーンどうして 2 つはダメなの？～ （教育実習(秋期)）
12 月 14 日（土） 4 講 ＊卒業生　＆ １年生参加	田中 ① プール活動の場面における子どもへの対応 ② 実習日誌について （保育実習Ⅱ＆教育実習(秋期)）	堺 私はどうしたらいいの～ひとりぼっちは怖い～ （保育実習Ⅰ(施設)＆Ⅲ）	武岡 クラス全体を見つつ、一人の園児をどのように見ていくのか （教育実習(秋期)）

注)各クラスのレジュメにもとづき、テーマと実習種別を筆者が独自に整理・作成した（2020 年 1 月 19 日）。

４．1 年生は実習報告会（12 月 14 日）をどのように受けとめたか？

参考までに 1 年生の感想文から、主な受けとめ方を少しばかり抜粋・紹介してみたい。なお、1 年生は必修科目「社会福祉」の補講として参加した。

(1)　3 つの報告、質疑応答を聞いて

「学びに行くはずの実習なのに、保育者の不適切な支援が見られ、先輩方はそれについて改善点をしっかり考えられて、とても勉強になったし、見習いたいと思います。」

「1 回生、2 回生だけでなく、卒業生、経験されてきた方などの話やアドバイスなどがとても自分のためになり、活かしていきたいなという思いや、こういう考えもあるんだと知ることができた。特に卒業生の方の、“水が苦手な子に対して、自分ならどうするか”を聞いて、なるほどと思った。」

「実習内での疑問をその時に見たことと自分の考えだけで判断し、納得するのではなく、学生とその疑問について話し合い、事実の共有をすることでより良い学びにつながると感じました。また、実習に行ったことのない実習生にとって実習を終えた先輩方の現場での疑問や考えを知ることができたので、実習中どのように行動すれば良いのか、なんとなく理解することができ、実習に対する不安が少し減りました。」

(2)　卒業生へのリスペクト

「やっぱり現場の保育士さんの意見はすごいなぁと思った。余裕がある感じが伝わってきました。視野が広いし、引き出しもいっぱいある感じだったから、かっこいいなぁと思った。」

(3)　それで、これから、この私はどうする？

「今までは実習に行くことに不安をいだいていて行くのも嫌だ‼って思っていたけれど、今は、実際に自分の目で確認してみたいという気持ちになったし、不安に思っていたことも少しは軽くなった。」

「実習は不安だらけなことが前提として、そこで嫌になったりせずに、なるべく物事をポジティブに受けとめられるようにしていきたいと思いました。」

「今は不安が大きいですが、プラスに考え、ポジティブに考え、乗り越えたいと思えました。（中略）10 日間という期間の中で、私達実習生は何ができるのか、何を学べるのか、しっかり考えたいとも思いましたし、その中でもワクワクという感情も芽生えました。」

(4)　保育者という仕事の魅力

「今回の報告会に参加して、1 つの正解がない職業だからこそ、やりがいがあるということを感じることができた。」

おわりに

2011 年 4 月のこども教育学科設置以降、特別研究員であった 2013 年度を除けば、毎年実習報告会に参加してきたことになる。指折り数えると、7 回もこの場に立ち会ってきた。「やりっぱなしにしない」実習教育をスローガンとして続けてきたのだが、あらためてその意義を再確認すると同時に、これまで多忙を理由として、この実践の奥深さを立ち止まって省察、反省、ふりかえる機会をもたなかった自分自身を反省している。

紙面の都合上、15 クラスの報告内容すら紹介できず、不十分な内容ではあるが、さまざまな角度から本学における事後学修を研究できる可能性を実感した。例えば、各クラスワークの展開過程を事例調査的に追跡し、テーマの設定から報告会での発表までを観察し、学生たちの学びの深化を明らかにすることもできる。

また、実習報告会という場を初めて経験する 1 年生が、どのような報告を聞き、その後の質疑応答を見聞きするなかで、どのような気づきを得ているのか、年明けに初めて経験する実習に向けた心境の変化は何か、2 年生の先輩の報告内容や卒業生のコメントにどのような刺激を受けているのか。さらに、後輩たちの実習報告会に参加してくれる卒業生たちは、在学生の報告を聞き、何を思い、考えただろうか、と。問いは次から次へとあふれ出てくる。

私たち教員は、以上のさまざまな問いにどれほど答えることができるだろうかと思案している。例年の教室風景にどこか慣れてしまっている私たちの姿がある。いつも見ているけれども、気づかない、気付いていない。そんなダイヤモンドのかけらをたくさん取りこぼしている気持ちになってきた。

最後に心意気だけでも書き記しておきたい。「やりっぱなしにしない」実習教育は今後も続ける。しかし、である。教員の主観や実感に依拠した教育実践とはそろそろ決別の時がきたのかもしれない。嫌な言葉であるが、私たちの教育実践にも根拠、evidence が求められている。エビデンス・ベースド〇〇ばやりで正直閉口するのだが。実習生の学びを中心に据えながらも、実習を目前に控えた学生（下級生）にとっての学び、卒業生にとっての学び、そして、この場に立ち会っている私たち教員自身の気づきや学びについて、根拠を示しながら明らかにし、第三者にも説明できるよう努めなければならないと思う。巻頭言に書いた「見える化（可視化）」の課題は例外なく、ここにも求められている。

0，1歳児の育ちとその援助

北村眞佐美

Ⅰ　目的

本授業（6月12日）は、２回生の乳児保育（演習）履修半ばで実施した。乳児の発達や生活について授業中にDVDやテキスト等で学びの途中である。乳児保育は、1回生春期に保育1において実習を行った学生もいた。しかし、学生の思い込み等もあり十分に乳児の育ちとその援助方法や実際どのように対応すればよいか迷うことがあったようだ。そこには乳児の発達が著しいこと、成長の個人差、環境差個、個性があり多様な保育が必要になっているからである。そこで育児行為のみが保育であると考えており、乳児保育の重要さを認識しなければならない。育児と保育は異なる。専門家として乳児の集団保育を実施するための理解や援助方法が必要であると考え、2回生全学生で学修し確認するものとする。

Ⅱ　概要

事前学習において、保育指針の乳児保育のねらいでは、1，2歳児は幼児と同様の五領域であり、０歳児は「健やかに伸び伸びすごす」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものとの関わり感性が育つ」でありその関連性の理解を行った。乳児保育の意義・役割・乳児の発達、保育所での生活と遊び（手遊び・絵本・手作りおもちゃ・造形遊びの実践）を習得しつつ乳児期の発達の特性を学修した。しかし、実際のイメージを感じ取ることは容易ではなかった。

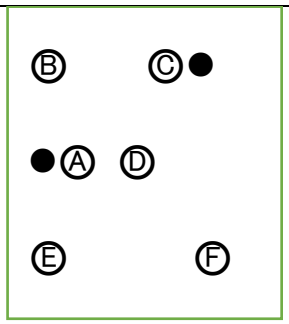
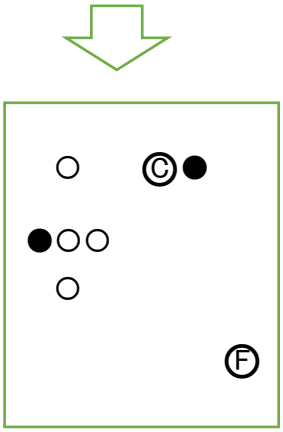
そこで、0歳児の指導計画をもとにしたロールプレイを2年生学生が行う。指導計画については、3歳以上の保育の指導計画作成の体験があるが、乳児の指導計画は未経験であるため筆者が0歳児の指導計画試を立案した。それを9人の学生が役割を担う。保育士役2名、子ども役6名、ビデオ撮影者1名とした。観察者は130名とする。

指導計画を読み合わせロールプレイ前の学生の様子として、保育士が異なる保育を行うことに「子どもは集まらせなくっていいのか」「二人の保育士が同時間にバラバラでいいのか」等不安そうにした。又「そういえば、こんな場面があったわ」等話しながら確認した。それぞれの月齢の「子どもの姿」を周知した。観察者の前でそれぞれの役割を演じた。

表１　ロールプレイ用0歳児指導案

0歳児　部分指導計画案			
日時	８月８日（木曜日）		実習者名
ひよこ組（0歳児）	人数６名	7か月・8か月・9か月・１0か月・１3か月・１5か月	
子どもの姿	Ⓐ　7か月児　保育者の膝の上でわらべうた遊ぶことを喜ぶ。お座りや腹ばいで遊ぶ。 Ⓑ　8か月児　ずりばいで移動し好きなおもちゃや他児のところへ行き、顔をじっと見て笑う。 Ⓒ　9か月児　ハイハイで移動できる。喃語が活発になり大人に対して能動的発声をする。 Ⓓ　10か月児　指さしの理解ができる。名前を呼ばれると振り向く。三項関係が成立する。		

	Ⓔ 13か月児　発語（マンマなど）　共感的遊び（ボール、かくれんぼ）を喜ぶ。 Ⓕ 15か月児　歩行ができる。指さしが盛んになる。自分で遊びを見つけて集中して遊ぶ。 ★保育者に慣れ、安心して過ごせるようになる。 好きな姿勢で少しの間一人遊びができる。喃語が活発になる。動作や音声の模倣が出来るようになる。名前を呼ばれると振り向いたり、手をあげて応えたりする。
主な活動	絵本や保育者の「いないいないばぁ」を見て喜ぶ 「いないいないばぁ」を真似てしてみる
ねらい	保育者とのかかわりを楽しむ。 他児と共感的な遊びをして声を出したり、しぐさを真似たりして楽しむ

時間	環境構成・準備	予想される子どもの活動	保育者の援助・留意点
00	 	○Aは保育者の膝に座る 絵本「いないいないばぁ」を見る ○ BはAと保育者のそばに行き一緒に絵本を見る「ばぁ」に合わせて一緒に言う。 ・いないいないばぁを保育者がすると喜ぶ。 ○DとEがいないいないばぁに気付き保育者の周りに来る。 ・一緒にいないいないばぁを楽しむ。 ・保育者の「ばぁ」の声や表情に期待する。 ・声を上げて喜ぶ。	○保育者が絵本を持ってくるとAが近づくの　で膝の上に座らせる。 Bもそばに来たので一緒に絵本をみる。 1ページごとゆっくり進める。「ばぁ」は一緒に言えるように待つ。 ○DとEそばに来て一緒に見るために少し絵本の位置を変えて4人が見やすいようにする。 ・絵本後は、一人一人に向けていないいないばぁをする。 ・手、本、布等でいないいないばぁをする。「ばぁ」の表情をたっぷり見せ安心できるようにする。テンポの変化等に気を付けて行う。 ・子どもが保育者の方を見ているか確認してから行う。 ・色々な方向から現れ、変化をつけ一緒に楽しさが感じられるようにする ○1対1での遊びを十分楽しめるようにする。「いないいないばぁ」を強制はしない。

10		○Cは他の保育者と遊ぶ ○Fは、保育者のそばに座らない。 いないいないばぁをしている方を見て歩き回りながら「いないいないばぁ」を試してみる。 ○ 他の遊びに向かう、または保育者の膝に座り、次の遊びを要求する。	○担当の保育者とふれあい遊びを楽しみつつ、そこでいないいないはぁをする。 ○歩くことが楽しく、保育者の周りに座らないが、他児の遊びに興味を示し見たり、動作をしたりして楽しんでいる姿を確認する。
備考	＊クラス全児で同一の時間の活動を行うことは無理があるので柔軟に行う。 ＊全児で行う時や個別で行う時があって良い。他の保育者と連携して行う		

観察した学生130名の感想レポートの提出を行う。
レポート内容からから語句の構成要素のコード化集約を行った。

Ⅲ　結果

すべてのコメントシートからの集約を行う。
一部の記述として

・大人に養育されないと育つ事がなく常に受け身であると思っていたが、自ら意思を持ち表出することがある。自己決定権がある。
・乳児はこだわりがないと思っていた。
・発達がバラバラ、同じ月齢でも違う、性格等違い部屋のあっちこっちで遊んでいることは、当たり前のことであると知った。
・実習時提案した保育に参加しない赤ちゃんがいて非常に焦った。焦ることないことがわかった自分に向かせなくても良いことがわかった。
・直接かかわった子どもの保育だけだはなく周囲にいる子どもを含めた保育があることに気付いた。
・大人のいわれるまま生きていると考えていた。
・乳児保育の方法が幅広い保育を進めることを考えていたが、十分楽しむことが必要であるこ

とがわかった。

・させる保育でなく活動の瞬間を見逃さないようにし、行動の読みとることが必要」。

・タイミングのよい対応が必要であると考えた。

・いくら面白い遊具であっても安全が第一であると分かった。発達にあったおもちゃや絵本が必要であると分かった。１年中同じではいけない。

・生活を進めることが精一杯になり、個々への配慮が欠け、子ども主体が成り立たないことがある。

・幼児の指導計画とは違い乳児はどのような指導計画を立案するのか考えにくかった」。

・観察の記録は　保育を進めるうえで必要であることを再認識した。

・信頼関係の作り方が何となくわかったような気がする。しかし、こうすれができるというコツがなく何回も少しずつ築くものであると知った。

・保護者にも話を聞きながら保育する。

・その日にあったことは、伝える事で子どもの成長ができると分かる。

表２　主要な気づきのワード集計

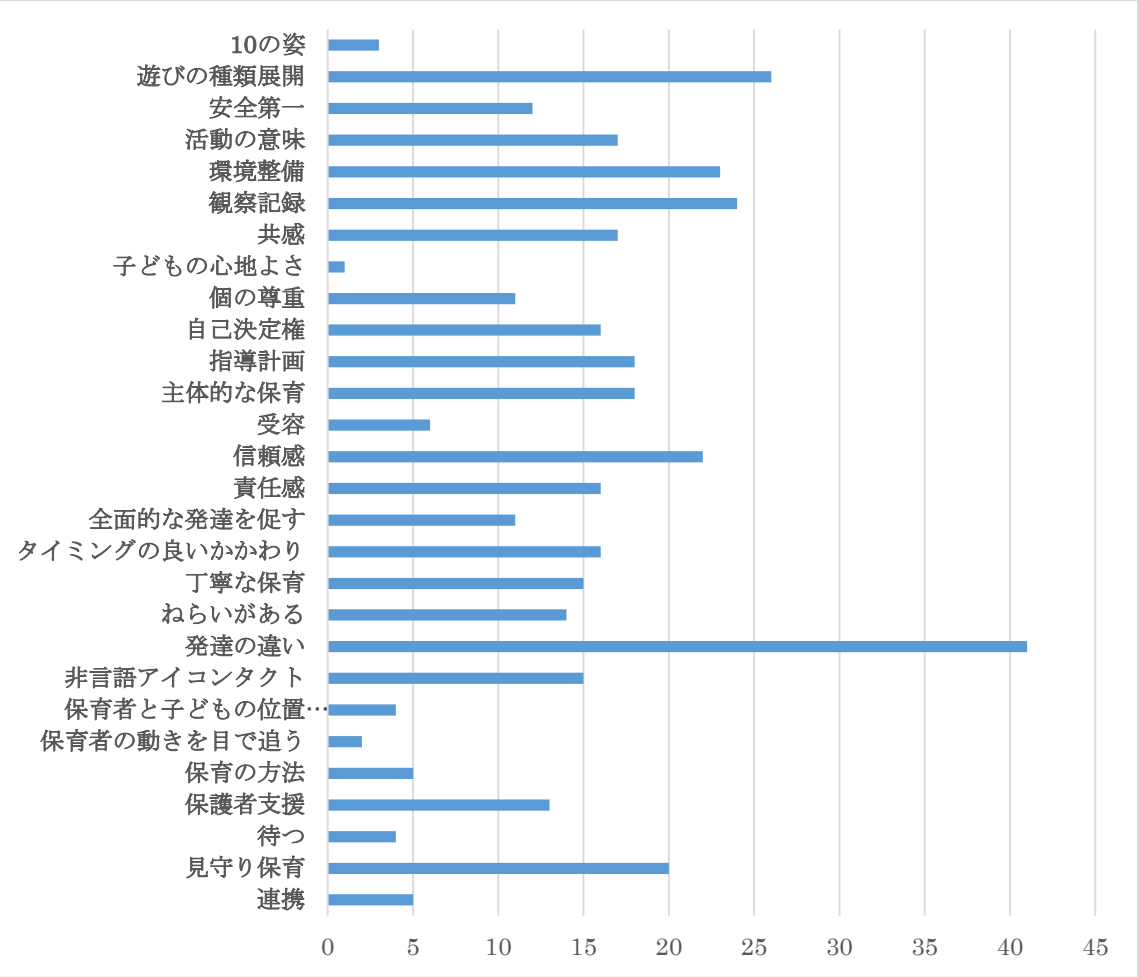
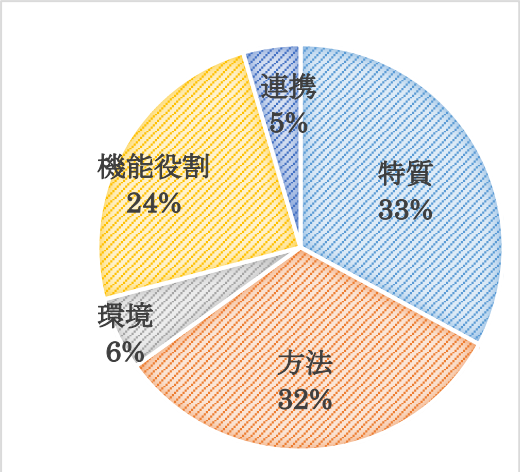


表３　構成概念



同じ０歳児のクラスであるのも関わらず、改めて発達の差に気づく学生が多い。遊びの展開方法や環境による保育とその整備・見守り保育にも着目した。愛着形成時である０歳児への信頼感が重要であること乳児保育の根底の個の尊重ということを再確認した学生である。自己決定権についてはデータ数では多くはないが、大人の援助なしでは何もできない０歳児ではないことに気づいた。

表２からデータの構成概念を追求した。１乳児の特質　２役割・機能　３保育の方法　４保育の環境　５連携・協働に分別した。理論で習得した乳児の特質を様々な面から育ちに気づくことが出来た。幼児の保育方法とは異なる援助方法を指摘した。また、保育者の役割・機能についても再認識できた。

Ⅳ　考察

既に授業において、乳児保育の意義や役割を学び、乳児の発達を押さえた生活や遊びの演習を通して学修していたが本授業後、乳児保育が子ども主体で行われていることを熟知した。どの年齢においても主体的といわれているが、年齢が低い場合は特に主体的でないと保育できないことを理解した。乳児自身は瞬時に周りからの刺激を受け入れたり、拒否したり行動やしぐさ、言葉で表現する。能動的な活動を行う。「育てもらう」から「育つ」意思を持っている。そして行動ひとつひとつに意味があり、伝えたい思いがあると理解ができた。乳児の自己決定権を認め、人権の保障を通して主体的に生きていく保育を行う事の重要さを認識したのではないかと考える。

学生は、発達の差を認識していたが、実習時に経験したみんなバラバラの保育であったことや保育者がいかに子どもの活動を指導しようと呼び集めてもできないことが理解できたのではないか。実習生が焦ってしまったことは、乳児の保育では常であり、保育の観点を見直すことが出来たと考える。現場の保育者は、乳児を瞬時にして行動や言葉、しぐさを読み取る。その時にタイミング良い対応、見守りが必要な場合を分別しなければならない。高度な専門性、難しさを感じとることが出来ていると思う。保育者として乳児保育は、人として尊重し援助することが重要であることを認識した。保育者の指導、一方的にかかわる保育に偏らないという保育の基本としての「心」を忘れることなく挑み将来への展望を抱くことが出来た授業であったかと思う。０歳児に焦点を置いたが１歳児においても同様である。子ども主体の保育について探究する。

育ちを重視する保育指導案作成にむけた実習指導
～２歳児の育ちと援助を通して～

野澤良恵

1. はじめに

2019 年度、こども教育学科では、「健やかに育つ・生きる＜いのち＞」を年間テーマに、保育者を目指す学生に実習指導を実施した。筆者は、「健やかに育つ」に焦点を当て、学生が保育指導案(以下、指導案とする)を立案する際に必要な、2 歳児の子どもの姿を理解することをねらいに授業を行った。

実習を目前に控えた学生の多くは、実習で使用する指導案を立案するための、具体的なヒントとなるような遊びや指導方法を習得することを、実習事前指導に求める傾向にある。しかし、本来指導案とは、保育所保育指針の「指導計画の作成」に記されているように、留意するべきことが多くある。具体的には、子どもの姿から発達段階をふまえること、これまでの保育の流れや季節や時期を考慮すること、子どもが主体的に活動出来るようにすることなどがあげられる。これらは、乳児保育などをはじめとする授業や 1 年次からの実習指導においても繰り返し説明されている内容である。

しかし、保育実習Ⅰ（保育所）の実習記録や実習指導者のフィードバックを見ると、学生は、指導案を立案する際、保育する対象の子どもの姿を考慮するよりも、自分が取り組みやすい内容を主な活動に挙げたいと考え、実際の子どもの姿から離れた内容になる傾向があった。また、指導案の反省や評価も「うまく説明できなかった」や、「自分が計画したように進める事が出来て良かった」等と、子どもが取り組んだ姿より、自分が行った保育指導への関心が高いように見受けられる学生も少なくなかった。

初めての実習で子どもの前に立った学生が、子どもの姿を考慮するより、まず自分の保育指導に意識を向けることや、保育技術向上のために指導内容を自己分析することは必要なことでもある。また、普段子どもと関わる経験が少なく、見学実習の機会がない本学の実習指導では、学生が子どもの姿を想像することが困難であることも理解できる。しかし、2018 年施行の保育所保育指針を見てみると、乳児保育に関する記載が増え、保育所においても、幼児教育を行う施設とされ「環境を通した教育」を行う事が重視されている。つまり、保育者主導の保育ではない、子ども主体の「環境を通した保育」の実践を学ぶ事が、実習指導においてもより重視されることになる。

そこで授業では、筆者の保育士としての実務経験をふまえ、具体的なエピソードや、写真と映像を通して子どもの姿を示すことで、学生が子どもの姿を考慮し、発達年齢に応じた指導案を立案できることをねらいとした実習事前指導を行った。なお、この授業は年齢毎に担当教員が変わるリレー形式で実施され、本稿では筆者が担当した 2 歳児を対象にした内容について取り扱う。

2. 概要

実施日時：2019 年 6 月 19 日水曜日　2 講時目

対象者：龍谷大学短期大学部こども教育学科　2 年生（保育実習指導Ⅲ、教育実習、受講者）

実施内容：

① 保育実習Ⅱに向けて
② 2 歳児の保育で大切なこと
③ 子ども主体の環境構成を行うために
④ 環境構成を考えてみよう(ディスカッション)
⑤ 2 歳児の発達段階の特徴
⑥ 家庭における 2 歳児の遊びの姿
⑦ 指導案<1>　朝の集いに参加する
⑧ 指導案<2>　野菜を使ったスタンピング
⑨ まとめ

まず「①保育実習Ⅱにむけて」では、保育実習Ⅱの目標課題を本学の実習ハンドブックから抜粋し、その重要性について伝えた。

「②2 歳児の保育で大切なこと」では、乳児保育の基本とされる養護と教育の一体化について説明した。そして、保育所保育指針の 1 歳児以上 3 歳児の保育に関わるねらい及び内容で示されている「子どもの生活の安定を図りながら、子どもの自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに応答的に関わること」を、具体的な事例を用いて示した。

「③子ども主体の環境構成を行うために」では、子どもが主体的にいきいきと生活を営むための配慮や工夫、環境を構成するために必要な子どもを観察することの重要性について伝えた。その上で、生活場面と環境構成・遊びの場面に分けて、2 歳児に対する環境構成の援助のポイントについて説明した。

＜生活場面＞

生活習慣の援助のポイントは、大人がしてあげるのではなく、子どもが自分で行おうとすることに対して援助を行うことである。具体的には、日々の実践において、援助する内容を声に出し、こどもの意思を確認することや、その理由を説明した。このプロセスをくり返すことで、子ども自身が見通しを持ち、主体的に行えるようになると伝えた。

＜環境構成と遊び＞

環境構成のポイントは、鈴木によると、「子どもをよく観察して『これがしたい』という発達のサインを見つけること」とされている（鈴木 2017)。発達のサインを読み取り、環境を整えることが出来れば、子どもは主体的に遊び始め、集中して「今やりたいこと」を繰り

返し、自分でしたい気持ちが満たされて遊ぶことが出来る。生活や遊びの中から、子供の成長発達、興味関心を捉え、常に環境を工夫、構成を続けていくことが、環境を通した保育に繋がっていくと伝えた。

「④環境構成を考えてみよう(ディスカッション)」では、いくつかの 2 歳児の具体的な発達のサインを示し、そこから粗大運動や微細運動の遊びの環境構成を、学生に実際に話し合ってもらう時間を設けた。

「⑤2 歳児の発達段階の特徴」では、2 歳児の情緒面の発達段階として、自我が芽生え、自己主張が強くなる姿や、いわゆる「いやいや期」を紹介した。そして、これらの姿が顕著にみられる場面である、学生も実習の場で経験するであろう物の取り合いに遭遇した場合を用いて、保育者の援助の一例を示した。

「⑥家庭における 2 歳児の遊びの姿」では、子どもの観察や環境構成の大切さを学ぶ事を目的とし、2 歳児の家庭での遊びの様子を映像で紹介した。実習では見る機会がない、家庭での 2 歳の姿を見てもらうねらいがあった。父母に見守られている安心感のもと、自信を持って得意げに滑り台を滑る姿や、本を利用したボール落としのからくり作りに何度も挑戦する子どもの姿を見せた。これらは前項で伝えた「自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに応答的に関わる事」や、「子どもがやりたい事を読み取り、環境を構成する事」が実践されている場面であり、保育所でも同じような関わりや環境構成を行える事が理想であると伝えた。

以上の授業をふまえ、最後に 2 歳児の保育指導案を 2 つ紹介した。「⑦指導案<1> 朝の集いに参加する」では、筆者が保育者、学生 5 名が 2 歳児の子どもとなり、模擬保育を行った。パペットを用いて出席を確認し、シフォン布を用いたわらべ歌遊びを行った。模擬保育の後に、パペット人形を用いて名前を呼ぶ事の意図や、シフォン布を用いたわらべ歌遊びの楽しさを説明した。シフォン布は、学生全員が触れられるように、フロア全体に回し、その感触や遊び方を共有できるようにした。

「⑧指導案<2> 野菜を使ったスタンピング」は、コーナー保育の指導案として紹介した。2 歳児の発達をふまえ、クラス全員で一斉に行う活動ではなく、自由遊びのコーナーの一つとして設定した。少人数でゆったりとそれぞれの子どものペースで表現活動が出来ることをねらいとしたためである。実際に使用するスタンプ台や野菜の写真を見せ、スタンピングを楽しむための環境構成のポイントも伝えた。

「⑨まとめ」では、環境を通した保育がうまく展開し、子どもが遊びに集中出来るようになると、保育者は一人ひとりの子どもと関わる時間が増え、子どもの発達段階や心理状況も細かく把握できるため、より丁寧な保育を行うことが出来ると伝えた。

3. 学生の反応・感想（コメントシートより）

・子ども主体とは、何度も様々な授業で遊びが大切と聞き、とにかく自由に好きな遊びをさ

せてあげる事と思ってしまっていた部分がありました。しかし、生活すべての中で、子ども主体について考える事が必要だと思い直すことが出来ました。

・0,1 歳児の頃は、何をするのも援助が必要であったが、2 歳児は自我が芽生え、子どもが主体的に動く姿がよく見られるので、その姿を保育者はよく観察し、環境を整えていく事で、子ども達の育ちものびのびと、自己肯定感を高めていける保育に繋がると思った。

・子どもを保育する上で関わってくる環境への考え方は、簡単ではないと思いました。子どもの「成長のサイン」を見つけ、気付くためには、日々子どもと過ごす中での観察がとても重要なんだなと思いました。環境の構成は、一回きりではなく、保育を行う上で、永遠と続いていくものだと知ることができました。

・2 歳児を含め、どの年齢の子どもに対しても、子どもの気持ちを尊重し、その姿を温かく見守る事、そして養護的な関わりを持つことが大切なのだと、改めて確認することが出来た。

・2 歳児は個人差が大きく、自分の思いを相手に伝えられる子がいたり、まだ意思がはっきりしていない子もいるので、前の実習の時もトラブルが多かったです。今日の授業のように、トラブルでは、その場を治めることが大切なのではなく、まずはお互いの気持ちに共感しながら、言葉で代弁しつつ、見守る事が大切なのだと学びました。

・野菜のスタンピング遊びの指導案では、はっきり野菜の形が出るものを選んだり、持ちやすい大きさに切るなど、2 歳児に合わせて遊ぶ事の大切を学んだ。単純な遊びだからこそ、準備をいい加減にするのではなく、飽きないようにする工夫が必要だし、どんなねらいを持って行うのか考えるのが大変だと感じた。

・2 歳児の動画は、集中して本を並べ 2 歳児の子が自分で試行錯誤している姿に、そこまでできるのだととても驚きました。

4. まとめ

本稿で報告した授業では、保育実習Ⅱに向けて、2 歳児の指導案を中心にした内容ではなく、2 歳児の育ちを理解し、子ども主体の保育を考えることをねらいとした指導を行った。これは、実習に行く学生が、指導案を立案するための設定保育だけに捉われず、「環境を通した、子ども主体の保育」を考えられるようになって欲しいためである。子どもは、生活、遊びすべての場面の中で、育ち、学びをくり返している。学生は、その援助の一つひとつの営みを、子ども主体で丁寧に行うこと、生活や遊びに相応しい環境を整えることの重要性を理解し、意識して実習に臨む必要がある。その中で、子ども主体の保育を考慮し、子どもを観察することは、必然的に子どもの姿から考える指導案を立案することに繋がっていくと考えられるためである。

多くの学生のコメントに、子ども主体の保育や、環境を構成する事の大切さを学んだと記されていた。他にも、学生が実際に保育実習Ⅰ(保育所)で経験した、物の取り合いの援助についての学びや、紹介した保育指導案についてのコメントも多くあった。また、家庭での遊

びの動画も印象に残ったようであった。

様々な場面における具体的な子どもの姿を示すことを中心に授業内容を構成したが、項目が多く、一つひとつを深めるには至らなかった。特に、発達のサインから粗大運動や微細運動を考え、話し合う作業を行ったが、具体的な正解を示すには、時間が不足していた。学生がシミュレーションを行う時間を設けるなど、子どもの姿をより想定しやすくなるよう、実践と解説の時間を調整しながら、内容を工夫していきたい。

保育者の資質や専門性を高める為に、知識や技術を確実に習得する事は必須である。その資質や専門性とは、子どもをリードして「楽しませる」保育者であることより、子どもをよく観察し、一人ひとりの発達や興味を探り、それに合わせた多様な環境を構成し、子どもの状態に合わせて臨機応変に改変出来る柔軟性であると考える。

保育者を目指す学生には、子どもの最善の利益を確保する為に、常に現状を問い続け、試行錯誤し、保育の質の向上のために学びを続ける姿勢を持って実習に臨んでほしいと考えている。この姿勢こそが、「健やかに育つ・生きる＜いのち＞」を預かる保育者にとって、重要である事を学生が感じ取り、誠実に子どもと向き合えるよう、具体的でわかりやすい実習指導を今後も追究していきたい。

参考文献

厚生労働省(2018)「保育所保育指針解説」

鈴木八郎 編著 (2017)『発達のサインが見えるともっと楽しい　0・1・2 さい児の遊びとくらし』ひろばブックス

“健やかに育つ”姿
—3 歳児・4 歳児・5 歳児の保育から学ぶ—

齊藤真由美

本報告は、筆者の担当授業を通して、年間テーマ「健やかに育つ・生きる＜いのち＞」につながる学生の学びをどのように育むことができたのかを振り返る。

１．授業の目的

「3 歳児の保育」・「4 歳児の保育」・「5 歳児の保育」、3 回の授業を通しての目的を以下のように考えた。

① 乳幼児期の発達の道筋を理解した上で、3 歳児、4 歳児、5 歳児の“健やかに育っていく”発達の姿を捉える
② 園生活における 3 歳児、4 歳児、5 歳児の具体的な姿を通して、各発達段階における子どもの姿を明確に捉える
③ 一人ひとりの姿を理解してかかわろうとすることの大切さや、3，4，5 歳児が“健やかに育つ”ために必要な保育者としての援助のあり方に気づく
④ “健やかに育つ”ことの大切さを実感し、“健やかに育つ”ために必要な援助ができる保育者を目指したいと思う

２．授業の目的を達成するために

上記の授業の目的①、②、③、④を達成するための考え方や方法を以下に示す。

１）目的①を達成するために…「教育実習」（水曜日 3 限）の授業スケジュールは、発達を理解することの大切さを知って積極的に学び、実践に活かすことができるように計画されていることは言うまでもない。この「教育実習」の授業での学びの流れを受けての本授業であることを大事にしたいと考える。例えば、「乳幼児の発達・観察から始まる保育（5 月 22 日）・担当者：田岡」での　資料“乳幼児の発達過程の表”を持ってくることを事前に伝えておき、本授業での実践の姿と結びつけ、振り返り見て確認する作業を取り入れる。また「0、1 歳児の保育（6 月 9 日・担当者：北村）」、「2 歳児の保育（6 月 12 日・担当者：野澤）」で取り上げられた内容と結び付けて話す、などである。

２）目的②③を達成するために…園生活の中での遊びの様子、保育者のかかわり方などを具体的な事例や画像を通して伝え、子どもの姿にイメージを広げながら、発達を理解し、適切な援助のあり方を学んでほしいと考える。また、子ども一人ひとりの育ちや思いがあることを実感したり、それを大切にした援助のあり方を考えようとしたりできるよう、学生が模擬保育をする機会を取り入れる。

詳細については、３．授業の概要１）－④　に挙げている。

３）目的④を達成するために…筆者は、昨年度「こども教育学科教育年報」の反省と今後の課題の中で“記憶に残ったこと、心動かされたことがあったかどうかを問うべきであった。それがその後の学生のさまざまな経験とつながり、広がったり確かな学びとなったりしていくのだろうと気づかされた”と記している。そこでこの反省を受けて本授業では目的④の“健やかに育つことの大切さを実感する”ことに重点を置くこととする。また、本授業は今年度の前期が終わろうとする時期にあり、授業対象者（2 回生）は、テーマ「健やかに育つ・生きる＜いのち＞」の前期授業を受けている学生である。さらに、前年度にはテーマ「うまれる・育つ・いきる＜いのち＞」に焦点化した授業を受けてきた学生である。これまでの学びがある中だからこそ、“健やかに育つ”ことの意味や大切さに本授業で気づいてほしいと願っている。目的④がどのように学生に伝わったのかを把握し、筆者の授業評価につなげたいと考え、“健やかに育つ”に関しての気づきや考えを書いて提出する機会を持つ。学生が自分の今の気づきや考えを文字化することは、学びを明確にし、今後の授業や実習、自分自身の生活に対する考えなどにもつないでいくことができるのではないかとも考える。

３．授業の概要

実施日：

3 歳児の保育（2019 年 6 月 19 日）

4 歳児の保育（2019 年 6 月 26 日）

5 歳児の保育（2019 年 7 月　3　日）

対象者：本学科 2 年生

１）　3 回の授業を通しての取り組みと授業展開

① 保育者が保護者に毎週配布している“おたより”（一部分）を読むことで、各学年の子どもの姿を捉えられるようにする。

“おたより”には子どもの具体的な言葉や行動と共に、そこから見える子どもの発達の姿や保育者のねらい等が記されている。各授業の前週に配布し、読んでおくこと、各学年の子どもの姿をイメージしておくこと、授業はじめに“おたより”を読んで気付いたことを発表することを伝えておく。そして、当日は数名が発表し、伝え合う。

② DVD から各学年の子どもの姿を捉える

子どもの姿、保育者の姿そのものを見ることでより理解が深まるようにする。

例えば、3 歳児（11 月）“あわぶくたった”や、4 歳児（6 月）“キャベツの中から”の遊びの様子を見る。

③ 発達過程を理解することで見えてくる各学年の子どもの姿を捉えるために、発達段階を踏まえた、その年齢、その時期にふさわしい遊び方を考えていく。

3歳児の保育…3歳児にふさわしい“走る”ことを楽しむ活動とは
3歳児が楽しめる“いす取りゲーム”とは
4歳児の保育…4歳児が楽しめる“いす取りゲーム”とは
5歳児の保育…5歳児だから楽しめる、5歳児に経験させたい“いす取りゲーム”とは

④ 授業担当者が作成した各学年の指導案（未記入の部分あり）から保育のあり方を学ぶ。

3歳児の保育…“おひっこしゲーム”
4歳児の保育…歌遊び“やきいもグーチーパー”
5歳児の保育…“いす取りゲーム”

・“保育者の援助と留意点”を詳しく読み取る
・指導案の未記入部分を考え作成する
・指導案のある部分の保育の模擬保育を行う
10名程の学生が保育者役と子ども役になって行う
・模擬保育をした学生、見ていた学生、それぞれの気付きや考えを意見交換する

2） 3回の授業を終えて

3回の授業の終わりに“健やかに育つ”について気づいたこと、考えたことを配布プリントに記入し、提出する。

学生に配布し、提出を求めたプリント＜3歳児・4歳児・5歳児の保育の授業を終えて＞は、以下のような記入内容で、記述については自由形式とした。

＜3歳児・4歳児・5歳児の保育の授業を終えて＞

3回の授業を通して、3歳児から5歳児へと健やかに育っていく姿を捉えたり、健やかに育つために必要な保育のあり方を学んだりされたと思います。今の時点では「わかった」とは言えないかもしれませんが、子どもたちが健やかに育つことへの思いや考えが少し広がってきていれば嬉しいです。

◇授業から学んだことを通して、子どもたちが健やかに育つということに関して気づいたことや思ったりしたことについてまとめてください。

４．学生の学び　―健やかに育つとは―

今年度のテーマ「健やかに育つ・いきる＜いのち＞」につながる、学生の学びはどのようなものであったのか、＜3 歳児・4 歳児・5 歳児の保育の授業を終えて＞のプリントの記入内容から捉える。

学生の学びその①　―精神面での健やかな育ちの大切さへの気づき―

授業を受けるまでは、“健やかに育つ”ということは体が健康であると思っていた。しかし、精神面で発達段階をしっかり踏んで成長していくこと、心の状態が豊かなこと、の大切さに気づいた、と多くの学生が書いていた。そして、そのためには人とのかかわりの中で育まれることに注目すべきだと気づいていた。

具体的に挙げている内容としては、

・生き生きと主体的に毎日を送る
・自己主張をしたり、挑戦したりすることが出来る
・遊びを通して友達や先生とかかわる
・友達と遊ぶ中で社会性や自立心を育む
・自分の考えや思いを安心して伝える
・友達と喧嘩をしたり競い合ったりすることで、怒りやくやしさ、葛藤などのいろいろな感情を経験する
・自分の気持ちを表したり、相手の気持ちを考えたりする
・自分から何かをしたいという思いが育つ
・周りへの関心が高まり、協力できるようになる
・自分は必要とされている、ここに居るという存在価値を見出す
・自分を肯定し、自分は愛されていると感じる
・一人ではなく、友達や先生、家族がいることを感じる
・自分の個性を認めてもらう
・自然と触れ合う　　等である。

学生の学びその②　―子どもが健やかに育つための保育者の役割に対する気づき―

学びその①で挙げた気付きや考えを持つだけでで終わらず、“健やかに育つ”ために大切にしたい保育者の役割までにも考えをつないでいた。

具体的に挙げている内容としては、

・子どもの発達段階を理解し、その年齢や発達にあわせた活動をする
・子どもの発達やその時期に育ってほしい力などを考え、一人ひとりの子どもに合わせた援助や環境を整える
・指導案や指導計画などにより、子どもにどうやって育ってほしいのかの目標やねらいを明確に持って、子どもが“健やかに育つ”ことができるように援助していく

・一人ひとりが“健やかに育つ”発達は違うことを理解しながら保育を工夫していく
・子どもの気持ちに気付く
・子どもの主張を大事にする
・子どもの気持ちをしっかりくみ取り、受けとめ、適切な言葉かけや関わりをする
・子どもの思いを認め、受け止める
・見守る
・共感する
・子ども主体で考える
・子どもが保育者との信頼関係の中で、安心してのびのびと生活できるようにする
・様々な遊びの環境を作る
・事前の準備を十分にする　　等である。

学生の学びその③　―自分がこれからすべきことへの気づき―

学んだこと（学びその①、②）を自分のこれからの生活（実習・就職・日常生活）と結びつけて、自分自身のより豊かな学びとしていた。

具体的に挙げている内容としては、

・実習先では、10 日間でもその育ちにより良いかかわりができるように、一人ひとりを見て、丁寧に接していきたい
・今回の学びを心にもち、これからの実習に取り組んでいきたい。
・子どもの発達を考慮した上で、子ども主体の活動ができるような保育者として活躍したい
・これから保育者として生きていく中で、あいまいな気持ちではなく、子どもの成長発達を願い、その子らしい生き方ができるような適切な援助をしていきたい
・常に子どもに寄り添い、子ども一人ひとりを理解するような保育者になりたい
・子どもの気持ちを受けとめるためには、自分自身が心を広くし、どんな時も冷静に物事が考えられる状態でいられるようにしたい
・保育者になった時、子どもの気持ちに共感し寄り添えるよう、今から、人に言われたことをいったん受け止めてから次の言動をすることを練習しようと思った　　等である。

５．まとめ

本授業についての反省点は、多々ある。例えば、模擬保育での保育者役・子ども役の学生が真剣にその役の考えや気持ちを表現できるようにかかわることができたか？模擬保育を行う学生と見ている学生が一体感をもって学べるようにかかわることができたか？受講生一人ひとりの考えや思いを理解する工夫、一人ひとりの考えや思いに答える努力をすることができたか？等である。しかし、授業の目的①②③④を達成することができたかどうかについては、4. 学生の学びで捉えた学生の気づきを考えると、おおむね達成できたという見方

もできる。また、本報告のねらいであった“年間テーマにつながる学びをどのように育むことができたのか”について 4. 学生の学びの内容のみで報告していることも十分な振り返りができたとは言い難い。しかし、学生一人ひとりがこれまでの自分の考えや生活を通して“健やかに育つ”を捉え、自分自身の今後につないで考えていこうとしている姿があったことは、豊かな学びが育まれた姿であると捉えたい。そして同時に、こども教育学科教職員全員のこれまでの取り組みの中で育まれたものがあったからこそ、これらの豊かな学びへと育むことができたのであると実感している。

響き合う心を育む歌遊び

土井由美

本稿は、2019 年 5 月に短期大学部 2 年生の教育実習という授業において、保育実践・実技指導「歌とゲームの指導」と題して行った授業の報告である。

1　授業の実践内容

授業名：教育実習（水曜日 3 講時）　保育実践・実技指導「歌とゲームの指導」
対象者：龍谷大学短期大学部こども教育学科 2 年生
実施年月日：2019 年 5 月 8 日（2 年生クラス前半）・5 月 15 日（2 年生クラス後半）
場所：本学深草キャンパス柔道場

2　授業の目的とねらい

・歌遊びを通して、子どもの何が育つのかに注目しながら、具体的な指導方法を学ぶ。
・学生自らが遊ぶことに没頭し、本来の遊びの楽しさを仲間と体験することで、その経験からの気づきを子どもの育ちへと繋げ、保育のイメージを作る。

3　授業内容

学生が大人であることから、大人でも楽しめる歌遊びを選ぶ必要がある。そこで、筆者が長年研究している北米の歌遊びのプログラム、Education Through Music[1]（以下 ETM）から数曲選び、実施した。ETM の特徴は、歌遊びの中で起こる様々な経験を通して、子どもの豊かな育ちと発達を支援することにある。今回も、種類の違う遊びを学生達が経験して、それらを振り返ることで、歌遊びの楽しさの中に「育ち」としてどのような要素が含まれているのかに気づいてもらうことをねらいとした。

ETM の歌遊びは、”Song-Experience-Game” と呼ばれ、その中には、表 1 でしめしたような、よく聴く、認められる、友達と交わる、予測する、協働する、多様性を認める、アイディアを交えるなどの様々な経験が含まれる。今回は特に、歌で遊ぶことを通して、学生が子ども心を取り戻し、友達と響き合える楽しさを経験できるような遊びを選んだ。また同じ仲間でも、それぞれの個性や違い、多様性に気付けるような活動も含めた。

表１　実施を試みた歌遊びの曲名・歌詞・内容と経験

曲順	曲名と歌詞	遊び方と内容	提供される経験	学生の経験
1	***Round We Go*** ♬*Round and Round and Round We go* *Round and Round and Round We go* *Round and Round and Round We go* *Skip to my Lou, my darling*	“Round”の言葉が聴こえる度に、体の部分を回す。 最初はリーダーに注目して、どこが回っているのかを発見する。クイズ形式 リズムに合わせて好きなところを自由に回す	新しい歌の歌詞に注目する－よく聴くという体験 子どもに歌をよく聴いてもらうことやどこが回っているか注目してもらうための導入の方法を知る 自分ならどこを回すか、子どもならどこをどんなふうに回すかを探る	初めての歌を子どもが聴いた時の感覚を味わう/よく聴く 子どもの注意をひく方法として、クイズ形式を体験する 自分も体験しながら、子どもの様子を想像してみる 予想を立てる
2	***Skip to My Lou*** ♬ *Hi Mary, I see you* *Hi Tom, I see you* *Hi Kathy, I see you* *Skip to my Lou, my darling*	3人グループになり，歌詞の通り, Hi Mary, I see you と二人が一人に向かって名前を呼びながら，手を振って挨拶する。手を繋いでスキップで回る。	自分の名前を仲間から呼ばれることで，自分の存在を受け容れられる/あまり知らない友達と触れ合う	話したことのないクラスメートから名前で呼ばれる/見つめられる/手を繋いでスキップする/一体感/承認
3	***London Bridge*** ♬ *London Bridge's falling down,* *falling down* *falling down* *London Bridge's falling down,* *My fair lady*	3人組になり、二人が橋になる1 人はその橋を歌に合わせてくぐり、歌の終わりに橋の下に入る。その時どちらかの橋の人の顔に自分の顔を向けた方向で立つ。顔を向けられた人が次の順番 何度か経験した後、次は他の橋を潜り抜けて、どこかの橋の下に入る	子どもの時によく遊んだ橋を潜るワクワクした体験を思い出す/突然目の前に友達の顔が現れる楽しさ/ 他の橋を回り、1曲の長さでどれだけの空間を歩けるか、空間把握、空間認知力を刺激する	この形態で遊ぶには、何歳ぐらいの子どもが適しているかを考える/ 捕まえられないように潜る遊びではなく、歌の終わりに橋の下に入るという聴く力を刺激する遊びの体験/ 空間把握の力

4	***Brother John*** ♬*Are you sleeping?* *Are you sleeping?* *Brother John* *Brother John* *Morning Bells are ringing* *Morning Bells are ringing* *Ding Dang Dong* *Ding Dang Dong*	階名を表すド・ミ・ソのハンドサインを使って遊ぶ。 ・ペアになって，階名のハンドサインを合わせる ・歌詞の部分に，相応しい動作を考えて振り付ける ・8 人～10 人ぐらいのグループになり、1 曲全部に相談して振り付けし、各班の振り付けを鑑賞する	音をハンドサインというシンボルで表す体験/ パートナーと心を合わせる/目を見つめる/ 動作を作る協働作業/振り付けの発表/他の作品を鑑賞グループ活動による協働/ 表現作成の為の他者とのコミュニケーション/ 制限された中での創作発表	今まで関わりのなかったクラスメートと向かい合う 協働作業/アイディアを出す/受け容れる/見つめ合う/手を合わせる/歌いながら発表する 他者を観る/制限時間内での協働作業/自分の意見を述べる/認められる/相手の意見を尊重する/同じ条件の中で、創造性・想像性の違いなどに気づく

（筆者作成）

4　学生の振り返りから

授業を振り返ってのコメントを提出してもらった中から、学生の経験したことを抜粋する。（原文のまま）

・よく知っている人も知らない人も、遊んでいる間は話しやすいと感じた。遊びの中ではほとんどの人が「受け容れる」態勢が出来ているんだなと思った。名前を呼んだり、触れ合ったりすることで、楽しさが倍増するということがわかった。

・自分がまず楽しむことが大事だし、友達と触れ合いながら遊ぶことで、人とのかかわりが深くなっていくのを感じた。

・ハンドサイン遊び [2]では、間違えてもうまくいっても、その楽しさを共有できるのがいいところだと思う。人と同じ気持ちを共有することが、人ともっと近くなれる方法だと感じた。

・友達と名前を呼び合い、目を見つめ、子ども心に楽しんでいる自分がいた。保育者になる者として、心から楽しめる純粋な心を持つことが大切だと学んだ。

・相手が笑顔で話してくれることで、自分の緊張感が和らぐことを改めて知り、他者との

かかわりの中で、信頼感、社会性が育まれていくのを感じた。

・名前で呼び合うことで距離が縮まっていくことを体感した。距離が近いと感じる方が子ども達も楽しくなるし、幸せを感じてくれるのではないかなと思った。

・ロンドン橋もたくさんの橋が待ってくれていて[3]、「どこまで遠くに行こうかな」「一曲の間にどこまでなら間に合うかな」と自分の中でいろいろ考えて、悩んでドキドキして橋に入った時には、友達に会えた喜びで思わず笑顔がこぼれました。先生が“Joy(よろこび)”を大切にと話されていたことを自分なりに体験できたと思いました。心から楽しみ思わず笑顔になるJoyはこれから保育者になる中で、本当に大切にしたいと思いました。

・保育者として子どもの何が育まれるのかを考えながら環境作りをすること、子ども自身が自分を発揮できる場所を作ってあげることの重要性を改めて感じることができた。実習では子どもたちのために、クラスの特徴や発達年齢をよく理解しながら、全力で遊びを考えたいと思った。

多くの学生が楽しさについて振り返っている中でも、遊びの中での負の体験[4]の負荷について、どう対応すればよいかを疑問に感じている学生もいた。

・負の体験は大人の自分でも心にグッとくるものがあったので、子どもの場合は泣いてしまったりするであろう。その対応が不安である。つい甘やかしてしまったり、負の体験をしないようにゲームのルールを変えてしまうと思う。負の体験の負荷をどう判断してどのように子どもにかけていけばよいか、少し疑問に思った。

5　まとめ

子ども達が健やかに生きるためには、健康な体はもちろんだが、友達としっかり遊ぶことによる健全な心の育ちが重要である。保育園・幼稚園という集団の中で、一人ひとりが生かされながら、自信をもって自己を発揮できるように導かれなければならない。保育者は、一人ひとりの個性を認め、その個人のよさや特徴を生かしたクラス集団の在り方を考える必要がある。保育者が子どもを認めることはもちろん大切だが、その保育者の姿を取り込んだ子どもが他者を認める姿へと育ち、お互いに認め合い、育ちあう集団へと変わる。

子ども一人ひとりを認め、寄り添うことは保育者にとって大切な仕事であるとはいえ、子どもの心の正負の二面性をしっかりと受け止めるのは容易なことではない。まずは自分が周りから認められる経験をたくさん持っていることが大事だろう。特に友達からの承認は、自信もでき、自己肯定感につながる。学生たちは、短い授業内の歌遊びの中で友達から「微笑まれた」だけでも、自分を受け容れてくれていると幸福感を感じている。学生に

は出来るだけ多く、友達と楽しく遊ぶ機会やお互いを受け容れ合い、人と響き合う喜びを感じる機会を設けたい。

たかが歌遊び、されど歌遊びである。遊びの中に「人とかかわる喜び」を経験できるような遊びの仕掛けを準備すれば、歌って遊ぶだけで、人が触れ合い、響き合い、微笑み合って幸せな気持ちになれる。そこには健やかな育ちがある。学生たちにはこの経験を活かして、その喜びを子どもたちに還元していってほしいと願っている。

【注】

---

[1] ETM は、1960 年代後半にアメリカ・カリフォルニアのメアリー・ヘレン・リチャーズ博士(Dr. Mary Helen Richards)によって音楽教育の手法として始められた。ETM の特徴は、歌遊びの中で起こる様々な経験を通して、子どもの豊かな成長と発達を支援することにある。日本には 1980 年に紹介され、その後の長年にわたる実践・研究の結果、特定教科の枠を超えた総合的な教育プログラムとして、保育・療育・教育分野、英語教育分野、家族支援、医療福祉の場などで実践されている。

[2] ハンドサイン遊びは、表１の４「遊び方と内容」欄に記載

[3] ロンドン橋の遊び方は、表１の３「遊び方と内容」欄に記載

[4] 子ども同士の遊びでは、楽しさや面白さ、達成感などを正の心の動きとした時、子どもたちは一方で辛い、悲しい、不安、不満、葛藤などの負の心の動きも持ち合わせる。負の体験も、遊びの中で子どもが経験してこそ成長につながる。(鯨岡峻『関係発達論』より)

この歌遊びの中では、3 人グループになる時に一人だけ友達が見つからない場合やロンドン橋に歌の終わりに入れなかった場合など、ちょっとした失敗や運の悪さなども含まれ、その体験を何とかやり過ごすことで心の育ちが期待される。

【参考文献】

鯨岡峻（2011）「子どもは育てられて育つ」関係発達の世代間循環を考える　慶応義塾大学出版会

実習サポート講座「名札づくりにチャレンジしよう！」実施報告

辻 友理、松原 亜朋衣、大西 圭子、北村 眞佐美、生駒 幸子

１．講座の概要

本学こども教育学科の１年生は、学生の希望する資格・免許に応じて１年次の春休みに教育実習（春期）、保育実習Ⅰ（保育所）の２種の実習を経験する。これらの実習において学生は１年間の座学での学修成果を発揮するとともに、保育現場でしか学ぶことのできない保育の実際と乳幼児とのかかわり、職員・教諭の職務について体験的に学ぶ。

実習に向けて学習意欲を高める準備のひとつとして「名札づくり」を位置づけ、実習指導室及び多目的室が主催して実習サポート講座「名札づくりにチャレンジしよう！」を、昨年度に引き続き以下の通り実施した。

講座名	実習サポート講座「名札づくりにチャレンジしよう！」
実施日	①2019 年 12 月 11 日（水）13：15～14：45 ②2020 年 1 月　8 日（水）10：45～13：15
場所	深草キャンパス　21 号館 401 教室
対象	短期大学部こども教育学科　1 年生
参加人数	①2019 年 12 月 11 日（水）　26 名 ②2020 年 1 月　8 日（水）　70 名

２．講座の運営・準備

実習サポート講座の打ち合わせを 2019 年 9 月から辻、松原（実習指導室）、大西（こども教育多目的室）で行い、名札づくりに必要な道具と材料を準備した。学生には実習事前事後指導である水曜日１講時の授業で 11 月中旬、実習サポート講座について案内チラシを配布してアナウンスを行った。物品準備のために参加人数を把握する必要があるため、事前に申し込みをして参加してもらう（案内に申込用紙添付）。準備物は以下の通りである。

【準備した道具・材料】

フェルト（厚手・薄手）・布用ボンド・カッターマット・デザインカッター・裁ちばさみ・ハサミ・トレーシングペーパー・裁縫道具セット・刺繍糸・マジックテープ・安全ピン・羊毛フェルト作成セット（羊毛・マット・ニードル針など）

［ハサミは数が限られているため、なるべく持参するよう呼びかけを行った］

３．講座の実施

会場に集まった学生に道具と材料の説明を行い、名札づくりに取り組む学生たちのサポ

ートを行った。ハサミやカッターを使用するため安全管理に留意し、またペンやボンド等で講義室の机を汚さないよう配慮するよう指導した。時間の許す限り北村、生駒（こども教育学科教員）もサポートに加わった。学生が懸命に慣れない針仕事や細かい作業に取り組む姿に、実習への意欲を感じることができた。名札づくりにおける指導のポイントのうち特筆すべき点は、以下 3 点である。

（1）名札の安全な留め方について

名札というと安全ピンで留めるものと思いがちであるが、乳幼児の安全管理上、安全ピン使用を禁止する実習園もある。そのため実習の事前オリエンテーションなどで、実習担当者の指示を仰ぎ実習園の方針に従うよう指導した。安全ピン以外に、実習時に使うエプロンや衣服に縫い付ける方法のほか、腕章のように腕に巻く方法もある。北村が腕に巻くタイプの名札数種類の見本を提示し、アドバイスを行った。

（2）名札に使う図柄（キャラクター等）の取り扱いについて

アンパンマン、ポケットモンスター、うさこちゃん等のアニメやコミック、絵本などのキャラクターを図柄に使いたいと希望する学生は多い。しかし実習園によっては、キャラクター図柄を保育に持ち込むことを好ましくないとしている園もあることを説明した。

（3）個別の技術に応じた多様な作成方法について

細かいものの扱い、手芸そのものが得意な学生、苦手な学生がいる。苦手な学生でも気軽に名札づくりに挑戦できるよう、フェルトを切って貼るだけの手法を紹介している。また得意な学生には、刺繍や羊毛フェルト等にも挑戦できるよう多種多様の道具や材料を準備した。松原の指導のもと、はじめて羊毛フェルトに挑戦したグループが出来上がりを喜び合う姿もみられた。

４．講座を振り返って―その意義と今後の課題―

実習サポート講座の意義を（1）学生の学び、（2）実習指導の充実という 2 つの側面からまとめておく。

（1）学生の学び

名札づくりの意義は、①実習生が子どもに名前を早く覚えてもらう、②子どもと親しみ会話をはじめるきっかけになる、③仲間と共に実習を頑張ろうという高揚感・連帯感がうまれる、の 3 点が『教育年報　第 1 号』(2018 年）でまとめられている。新たに、④子どもの発達・興味関心に思いをめぐらせる、⑤大学・実習指導室にしっかりと支えられている実感を持つ、という意義を加えておきたい。

④子どもの発達・興味関心に思いをめぐらせる

「この大きさ、形で、太陽って分かってもらえるかな？」「この色のほうが野菜に親しみを持ってもらえるかな？」と名札を作成しながら仲間やサポートメンバーと対話し、学生が子どもの認知発達や興味関心に思いをめぐらせる姿があった。

⑤大学・実習指導室に支えられている実感を持つ

「名札づくりを自分一人ではなく仲間と一緒に出来て、いろいろな方にアドバイスしてもらえて嬉しかった」「サポート講座のおかげでステキな名札ができてとても嬉しかった。実習で子どもたちにもとても喜んでもらえた」「実習中に困ったことがあっても、実習指導室にサポートしてもらえるから大丈夫だと思える」など、サポート講座の後や、実習巡回の際に学生の言葉を聞きとった。はじめて実習に赴く学生たちは期待とともに大きな不安も抱いているが、その不安を受け止めてもらえる、困難に際しても実習指導室を起点に大学がしっかりと励まし、支えてもらえるという安心感を得て実習に取り組めていることを学生たちの声から汲み取ることができた。以上 5 点を学生の学びの側面からの意義とする。

（２）実習指導の充実

今年度の実習サポート講座も昨年度に引き続き、実習指導室職員の辻、松原、こども教育多目的室の大西が運営、準備に携わり、学生の名札づくりの指導を行った。本学では、実習事前事後指導授業を教員が担当し、その授業をふまえて、実習指導室は実習指導関連業務を担当、こども教育多目的室は保育の環境と乳幼児の生活や遊びについて学ぶ自学自習を支援している。これら二つの場が授業と有機的に連携し、学生の実習サポート講座を実施できていることは、学生の正課と正課外の学修をつなぐ有意義な取り組みだといえる。

また実習サポート講座は従来の実習指導の枠組みを超えて、より学生の状況や学習ニーズを直接的に捉えることのできる機会になっている。実習を控えた学生の期待と不安の入り混じった心情を職員と教員が協働してキャッチし、よりきめ細やかな実習指導を行う手がかりを得ることができている。

充実した実習事前事後指導は、教員はもとより、実習指導室・こども教育多目的室の職員の丁寧な学生理解と学修支援なしには成り立たない。この実習サポート講座は、本学における職員・教員が協働し作り上げている充実した実習指導体制を象徴するものである。

上記の講座実施の意義をふまえ、最後に今後の課題を以下 2 点にまとめておく。

（１）名札づくりのための参考資料の購入と設置

名札づくりで参考にできるフェルトを使った手芸や刺繍、羊毛フェルトの参考資料を購入し多目的室に設置しておきたい。実習サポート講座に参加する学生が参照し、名札のデザインや作り方をあらかじめ考案する際の参考になると考える。名札づくりは実習準備の一環であると同時に、実習で出会う子どもたちのことを思いながら「心を込めて」ものを作る喜びを知る機会でもある。保育者が参考資料などを活用して学び、「心を込めて」日々、保育の準備（環境整備・環境構成も含む）をする大切さに気付いてほしい。

（２）出来上がった名札の写真撮影

今回の実習サポート講座では 2 回目の参加学生は時間が短く、名札づくりを途中で切り上げてあとは自分で作成した。1 回目も出来上がった学生は少なかったため、出来上がった名札の写真を撮ることができなかった。後輩の参考資料としても役立つため、出来上がった名札の写真を各自で撮影してもらい、manaba course 等で共有することを考えたい。

【実習サポート講座「名札づくりにチャレンジしよう！」の様子】

無心になって作っています。
ステキな名札ができるといいね！

息で吹き飛びそうな小さなフェルトを、
頑張って貼り付けています～

羊毛フェルトに挑戦！
いいのができて、とっても嬉しそう♪　よかったね！

映画「夜間もやってる保育園」の鑑賞

堺　恵

日　　時:2019 年 4 月 17 日(水)
場　　所:龍谷大学深草キャンパス３号館 301
実施主体:短期大学部こども教育学科
参 加 者: こども教育学科　１年生、２年生、龍谷大学他学部の学生、教職員、
　　地域住民の方々

1 映画の概要

映画「夜間もやってる保育園」(企画・片野清美、製作及び監督・大宮浩一、2017 年製作)は、東京都の新宿歌舞伎町に隣接する大久保で 24 時間保育を行う「エイビイシイ保育園」を舞台にしたものである。

「エイビイシイ保育園」は、24 時間保育の実施だけでなく、完全オーガニックの給食による食育や多動的な子どもたちへの療育プログラム、卒園後の学童保育など、独自の試行錯誤を続けている保育園である。また、映画の中では、「エイビイシイ保育園」だけでなく、北海道や新潟、沖縄などの保育施設についても紹介している。

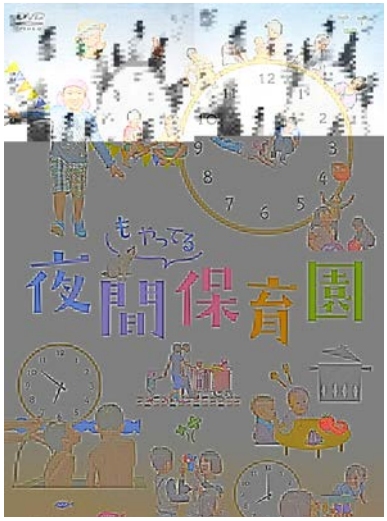
2　映画を観た学生たちの声

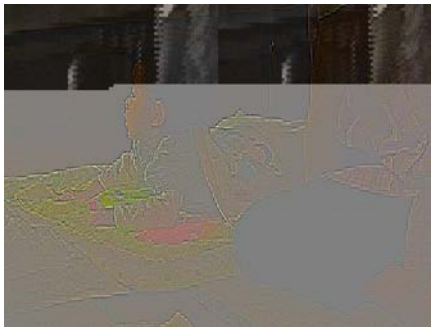
映画鑑賞後、学生たちからは、次のような声が寄せられた。

・この映画を観るまで、夜間保育園にマイナスのイメージを持っていた。また、夜間保育園の存在自体をあまり詳しく知らなかった。しかし、この映画を観終わってからは、夜間保育園への見方が変わったと思う。
・映画を観て、初めて夜間もやっている保育園のことを知ることができた。
・夜間保育園については、(なぜあんなに小さな子どもを夜中に面倒見てあげないの?)(子どもが可哀そう)と思っていたが、それは大きな間違いだった。夜間保育園に子どもを預けている理由には、それぞれの家庭での事情があった。
・映画を観始めた時は、(夜は保育園に通う子どもと働く親が関わることのできる唯一の時間なのに、預けるなんてありえない)と思っていた。しかし、映画を観続けるうちに、親にも事情があることを知り、納得できた。
・映画を観て、今の世の中に貧富の差があることや、働き方が多様なため夜間に働いている母親がたくさんいることに驚いた。そうした家庭には、夜間保育園は必要なのだと感じた。

・それぞれの事情がありながらも、一日中働き、子どもの世話をする親の姿は、心打たれるものがあった。
・子どもの健やかな成長をはぐくむ場所として、母親が安心して働くためにも、夜間保育園が増えればいいと思った。
・親の負担を少しでも減らし、子育ての悩みを持つ親のサポートをすることによって、虐待やネグレクトを未然に防ぐことができるのではないか。このような施設がもう少し増えてもいいのではないか。無邪気に遊び、日々成長している子どもたちを守るにはどうすればいいのか。この映画では、たくさんの事を考えさせられた。
・映画を観終わって、私はもっと多くの人に夜間保育園の存在を知ってほしいと思った。また、夜間保育園への偏見がなくなってほしいと思った。
・夜に預けられる子どもは可哀そうなのか。夜間保育園を利用している子どもたちは、決して可哀そうな表情をしていなかった。それは、保育者たちが、子どもたちを不安にさせないように、一生懸命保育をしているからだと思った。
・夜間保育園に子どもを預けている親は、子どものことを思って夜間保育園を利用しているのだとわかった。親が家にいなければ、子どもは一人でごはんを食べていたかもしれないし、怪我をしたり、何か問題があった時に誰もそばにいなかったということも起きてしまうかもしれない。そのようなことを考えると、夜間保育園があることはてとも重要で、家庭支援を行うことができているということがわかった。

学生たちは、「夜間もやってる保育園」の鑑賞を通して、子どもたちの育つ家庭には、さまざまな事情があるということを学んだようである。また、家庭の様々な事情に寄り添う保育の一形態として、夜間保育園があることも、理解したようである。「夜間もやってる保育園」の鑑賞は、学生たちにとって、子どもとその家庭を支える保育のあり方について考えを巡らせるよい機会となったのではないだろうか。





「こどもの口はふしぎがいっぱい」

講師：岡崎好秀先生

野口聡子

日時：2019 年 7 月 10 日(水) 10:45 ～ 12:15

場所：龍谷大学深草キャンパス　(和顔館 B201 教室)

実施主体：こども教育学科　1 年生、2 年生

来場者人数：教職員　18 名

1.経緯・目的

保育士養成課程において、建学の精神に基づき、いのちを繋ぐ「食」について、食の循環、環境への意識を高め、健やかな感性を持った保育者を育てることに力を入れている。

昨年は、「うまれる・育つ・生きる＜いのち＞」というタイトルで様々な授業や活動を企画し、＜いのち＞について深く考える機会を持った。その活動の継続として、今年は「健やかに・育つ・生きる＜いのち＞」と題して、講演会を 2 回開催した。7 月に歯科医師岡﨑好秀先生をお招きし、「こどもの口はふしぎがいっぱい」というテーマの特別講義を開催した。本学 1 年生、2 年生の学生が、「いのち」や「食」の大切さを踏まえたうえで、子どもたちの健やかな育ちをどのように伝えるかを考え企画した。

本学では小児栄養の演習で調理実習を数多く実施している。現代は親から子への「食」に関する伝承が減少し、不規則で偏った食生活となっていることが多い。保育者を目指す若者に食に関わる知識や技術を伝える機会が少なくなっているため、小児栄養演習では調理実習を通して、講義内容と関連付けて実際に調理を体験することで、より「食」を身近なものとして捉え、自身の食生活を見直すとともに、「食べることの大切さ」を幼児たちに伝えることができる保育者の養成を目指している。さらに、保育者として幼児たちの健やかな育ちを見守ることを気づき、考えるために「こどもの口はふしぎがいっぱい」と題して特別講義を開催した。

2.講演内容

社会や食環境の変化は子どもの健康に大きく影響している。「子どもの口腔の変化」から、口に現れる子どもの健康という広い視点が得られた。また、「こどもの口のふしぎ」にふれながら、かけがえのない＜いのち＞の育ちに寄り添う喜びや責任、困難さを実感するだけでなく、「共生の理念に基づき生きる」という本学の人間形成のヒントが見つかったと考える。

さらに、王子動物園のカバの口の中、野生のチンパンジーと動物園のチンパンジーの口の中の様子の違いから、健康な歯とはどのようなものであるか、知る機会となった。

保育者として子どもを観察するということが重要であると考え、取り組んできたが口の中を観察することによって、子どもの抱える背景まで考えを広げる機会となった。

＜学生の感想（抜粋）＞

- ✧ 健やかに育つということに家族でご飯を食べることは人や動物にとって一番大切なことだと思いました。
- ✧ 「心に借金をして帰す」のではなく、「心に貯金をして帰す」という考えで治療されているのは凄いと思いました。
- ✧ 虫歯がたくさんできてしまう子ども達の生活の背景には食習慣だけでなく、生活習慣や家族との関わりが深く関係していると学びました。
- ✧ おやつを規則正しい時間に与えている子どもは我慢することを覚え、おやつを食べたいときに食べる子どもは我儘になってしまい、虫歯も多くなることを学びました。子どもの心と身体を育てるということは歯と関わりがあることに興味深さを感じました。
- ✧ 子ども達の歯で家庭の事情を知ることができるということを初めて知り、子どものサインに気がつける保育者になりたいと思いました。
- ✧ ネグレクトや虐待を受けている子どもの歯の画像から「原因は子どもになるのではなく、周囲の大人や環境にある」という言葉が心に残りました。健康な永久歯が生えてくるためには、健康な乳歯が不可欠であり、両方とも大事にしなくてはいけないと気がつきました。

4.講演前・講演後アンケート

講演前、講演後に学生にアンケートを行った。

1)アンケート用紙＜講演前・講演後質問項目＞　対象:2 年生

＜講演前質問項目＞

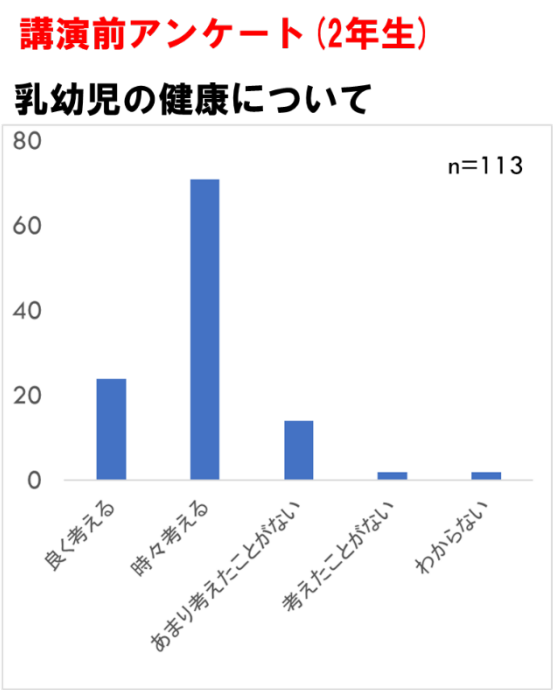
ｉ. 乳幼児の「健康」について考えますか。

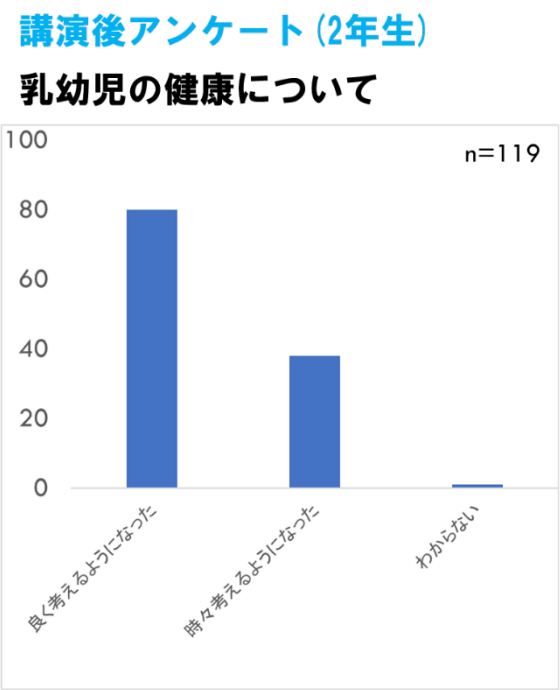
①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない　⑤わからない

＜講演後質問項目＞

ｉ. 講演「こどもの口はふしぎがいっぱい」を聞いた後、乳幼児の「健康」について考えるようになりましたか。

①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない　⑤わからない





＜講演前質問項目＞

ⅱ. 乳幼児の「歯」についての講演について興味を持ちましたか。

①大いに興味がある　②興味がある　③どちらともいえない　④ほとんどない　⑤まったくない

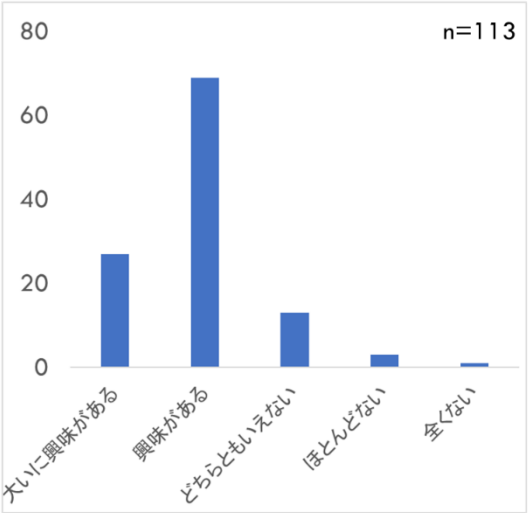
＜講演後質問項目＞

ⅱ. 講演「こどもの口はふしぎがいっぱい」を聞いた後、「歯」について興味を持ちましたか。

①大いに興味を持った　②興味を持った　③どちらともいえない　④ほとんどない　⑤まったくない

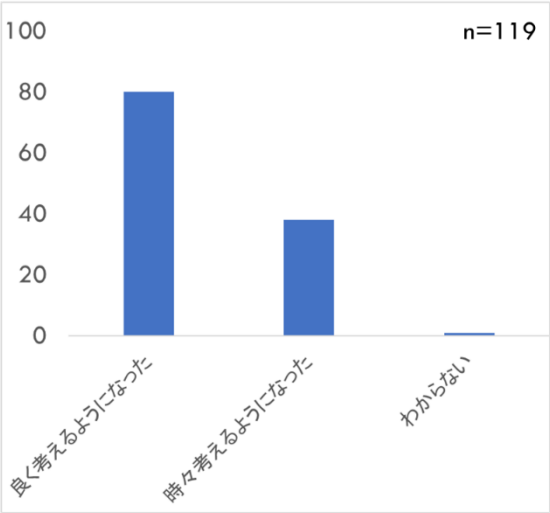
講演前アンケート（2年生）

乳幼児の歯について



講演後アンケート（2年生）

乳幼児の歯について



＜講演前質問項目＞

ⅲ. 子どもの歯の状態と生活状況との間に関連があると思いますか。

①大いにあると思う　②あると思う　③どちらともいえない　④ほとんどないと思う
⑤まったくないと思う

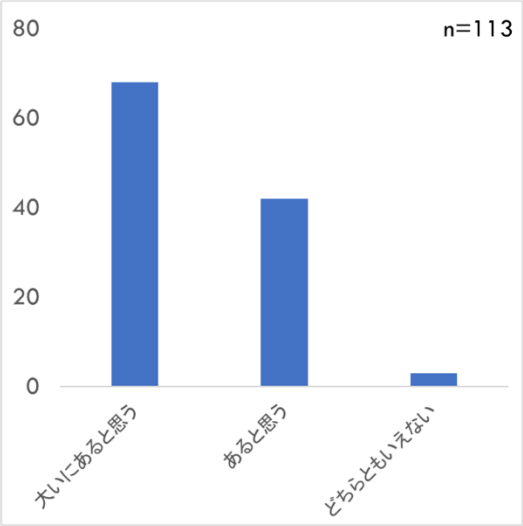
＜講演後質問項目＞

ⅲ. 子どもの歯の状態と生活状況との間に関連があることを理解しましたか。

①よく理解した　②ある程度理解した　③どちらともいえない
④あまり理解できなかった　⑤全く理解できなかった

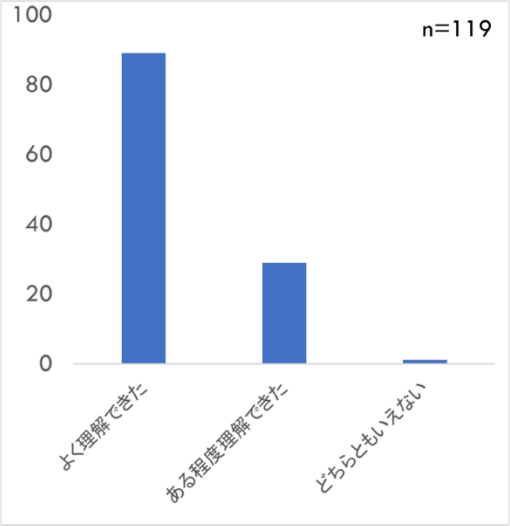
講演前アンケート（2年生）

歯の状態と生活状況との関連



講演後アンケート（2年生）

歯の状態と生活状況との関連



2)アンケート用紙＜講演前･後アンケート項目＞　対象:1 年生

＜講演前質問項目＞

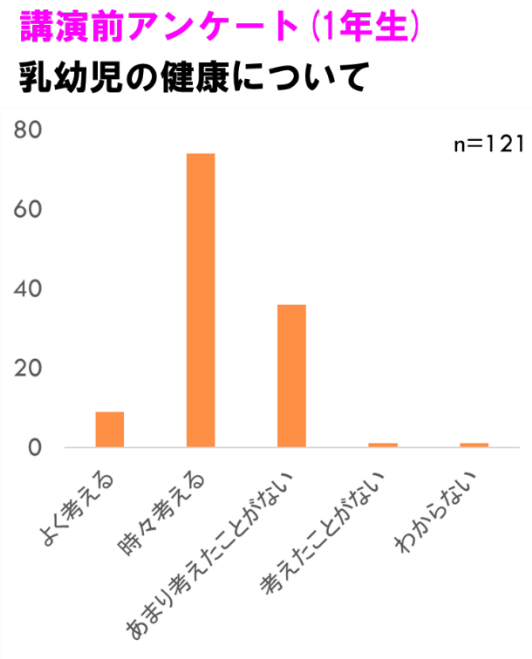
ｉ. 乳幼児の「健康」について考えますか。

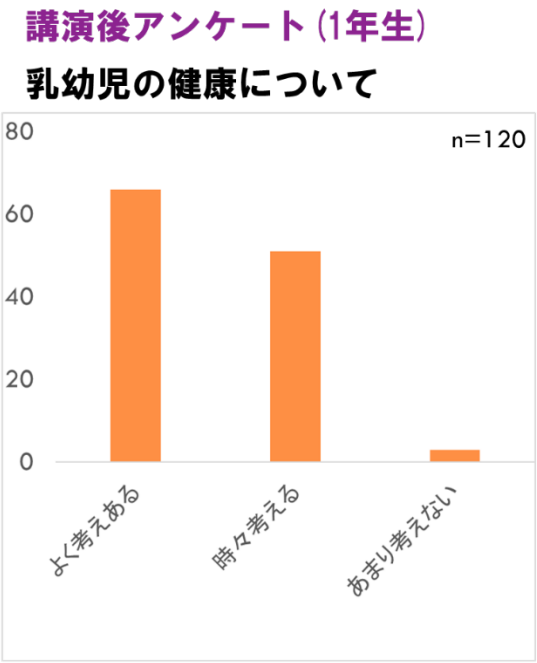
①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない　⑤わからない

＜講演後質問項目＞

ｉ. 講演「こどもの口はふしぎがいっぱい」を聞いた後、乳幼児の「健康」について考えるようになりましたか。

①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない　⑤わからない





＜講演前質問項目＞

ⅱ. 乳幼児の「歯」についての講演について興味を持ちましたか。

①大いに興味がある　②興味がある　③どちらともいえない　④ほとんどない　⑤まったくない

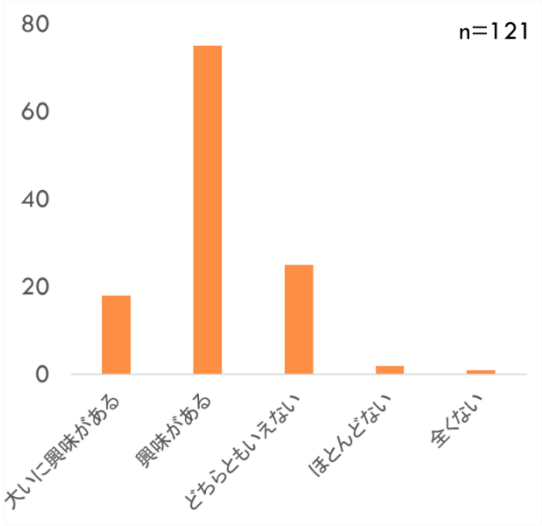
＜講演後質問項目＞

ⅱ. 講演「こどもの口はふしぎがいっぱい」を聞いた後、「歯」について興味を持ちましたか。

①大いに興味を持った　②興味を持った　③どちらともいえない　④ほとんどない　⑤まったくない

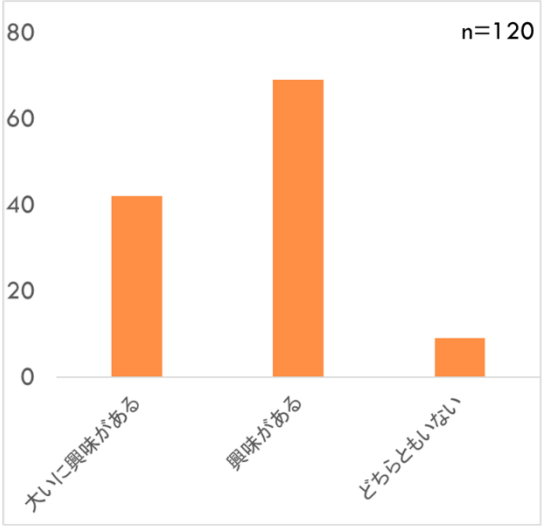
講演前アンケート（1年生）

乳幼児の歯について



講演後アンケート（1年生）

乳幼児の歯について



＜講演前質問項目＞

iii. 子どもの歯の状態と生活状況との間に関連があると思いますか。

①大いにあると思う　②あると思う　③どちらともいえない　④ほとんどないと思う
⑤まったくないと思う

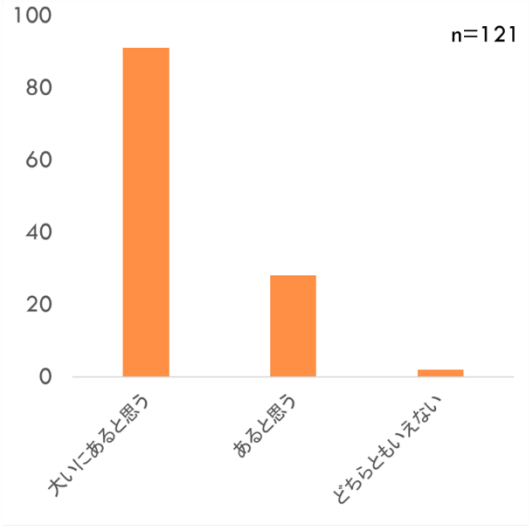
＜講演後質問項目＞

iii. 子どもの歯の状態と生活状況との間に関連があることを理解しましたか。

①よく理解した　②ある程度理解した　③どちらともいえない
④あまり理解できなかった　⑤全く理解できなかった

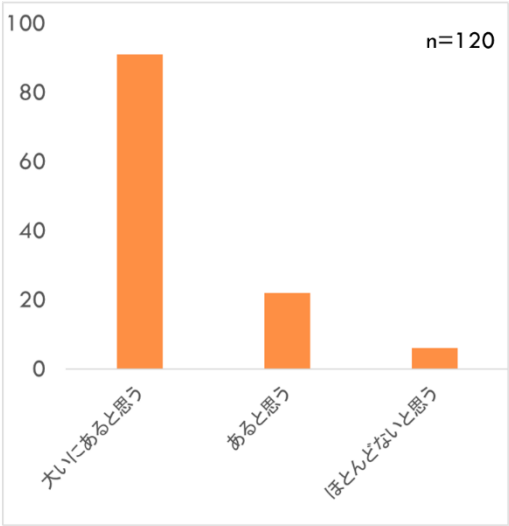
講演前アンケート（1年生）

歯の状態と生活状況との関連



講演後アンケート（1年生）

歯の状態と生活状況との関連



講演前・講演後のアンケートを実施して、学生たちが岡崎先生の特別講義を受講し、乳幼児の「健康」、「歯」「歯の状態と生活状況との関連」について、興味を持ち、取り組もうとしていることが講演後アンケートで示唆できる。特に「あまり考えない」、「時々考える・興味を持つ」と回答した1年生の学生たちが、顕著に興味、関心を持つようになったと考える。

5.小児栄養における「食育の実践発表」について

新保育所保育指針(平成30年)に第3章健康及び安全、2食育の推進（2）食育の環境の整備等の項目において、子どもが自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や食の循環・環境への意識、調理する人への感謝の気持ちが育つように、子どもと調理員等の関わりや、調理室など食に関わる保育環境に配慮すること[1)]。と定めれている。そのため、保育所(園)・こども園において、「食育」に取り組む施設が多くなってきた。

そこで、2年生全員が受講している小児栄養における「食育の実践発表」を「食育」をテーマに各班(5～6名)で企画、媒体を作製し発表する項目を設けている。

岡崎先生の講演後行った「食育の実践発表」では、25チームの発表の内8チームが「歯」についての発表を行った。

食育発表題目

○なぜ、はみがきをしなければならないか　○虫歯のお話し　○たろうの歯みがき
○虫歯について　○歯みがき　バランスよく食べる　○よく噛んで食べよう！
○にいやくんを笑顔にしよう大作戦(歯について)　○歯みがきを好きになろう

6. まとめ

浄土真宗の精神に基づいた豊かな人間性、いのちの循環を考えることは、本学の建学の精神でもある。食にまつわること、いのちのサイクルを考えることに様々な教員と連携し、このプロジェクトに取り組んできた。

プロジェクト実施2年目を向かえ、食に対する興味、関心、意欲を引き出し、今年度「健やかに・育つ・生きる＜いのち＞」と題し取り組む1つとして行った歯科医師岡﨑先生の講演「こどもの口はふしぎがいっぱい」を受講した。学生達が受講することで学生達の感性や実践力を養うことができ、さらに小児栄養の授業における「食育」の学習の機会として活用することができた。

参考文献

1）厚生労働省編、『保育所保育指針』(2018)

♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学

講師：岩倉政城先生

野口聡子

日時：2019 年 11 月 3 日(水) 10:45 ～ 12:15
場所：龍谷大学深草キャンパス　(和顔館 B201 教室)
実施主体：こども教育学科　1 年生、2 年生
来場者人数：教職員 18 名

1.経緯・目的

7 月 10 日(水)に岡崎好秀先生の「こどもの口はふしぎがいっぱい」と題した特別講義に引き続き、11 月に歯科医師岩倉政城先生をお招きし、「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」と題して特別講義を開催した。本学 1 年生、2 年生の学生が、「いのち」や「食」の大切さを踏まえたうえで、子どもたちの健やかな育ちをどのように伝えるかを考え企画した。

2.講演内容

1. 保育はことばがけではない。
2. 保育は子どもに豊かな体験を保障したとき保育になる。
3. 豊かさとは五感を使った人(愛着対象) と自然との触れ合いにある。
4. 勝ち得た二者関係が次の三者関係を保障する(社会性の獲得)。
5. 愛着対象を持てなかった子にも修復は可能である。
6. 修復に向けて愛着対象になってあげるのが保育者の役割である。

岩倉先生の軽妙なひとり芝居や参加学生とのロールプレイを交える一方、中島みゆき「命の別名」、「げんこつ山のタヌキさん」、ジョン・レノン「Mother」の音楽を駆使した大変ユニークなものであり、かつ説得力のある内容であった。

体験なしで「思いやり」は伝わらないこと。ことばによらない交流、触れるなど五感を通した豊かな体験があって始めて情緒と言葉がつながり、人と共有できる言葉がけになること。他者からの言葉による抱く・撫でる・さする・揺する・あやす働きかけが行動変容に繋がる意志を通わすことについて、多くの実例を交えて具体的に理解する機会となった。

3. 講演前・講演後アンケート

講演前、講演後に学生にアンケートを行った。

1)アンケート用紙＜講演前・講演後質問項目＞　対象:2 年生

＜講演前質問項目＞

ⅰ.「愛着形成」について知っていますか。

①よく知っている　②知っている　③よく知らない　④全く知らない

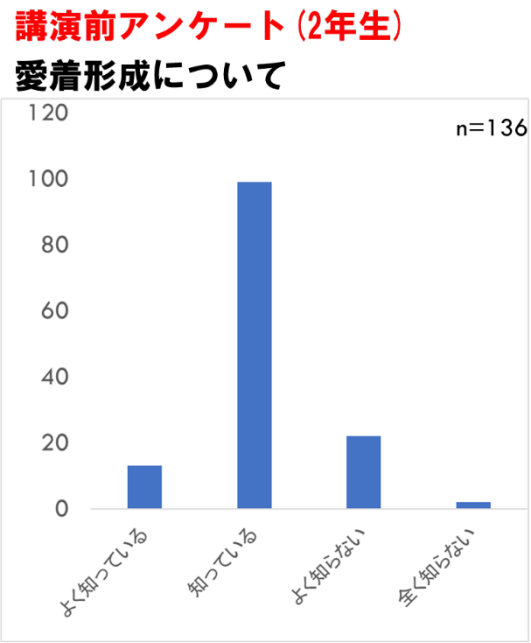
⑤わからない

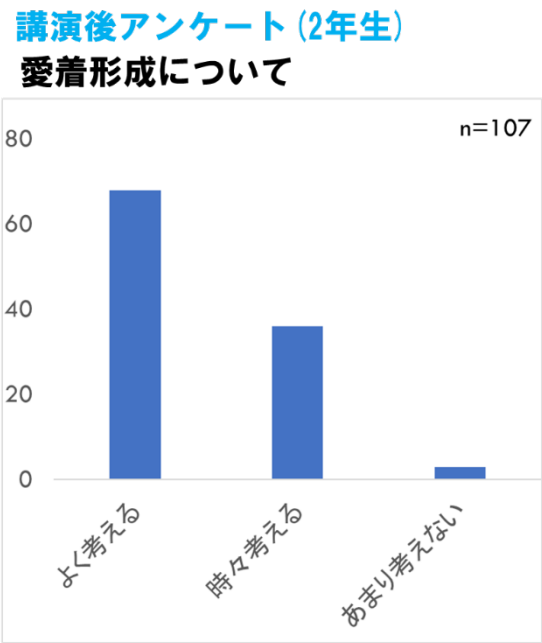
＜講演後質問項目＞

ⅰ.講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、「愛着形成」について考えるようになりましたか。

①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない

⑤わからない





＜講演前質問項目＞

ⅱ.スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について興味を持っていますか

①大いに興味がある　②興味がある　③どちらともいえない　④ほとんどない

⑤まったくない

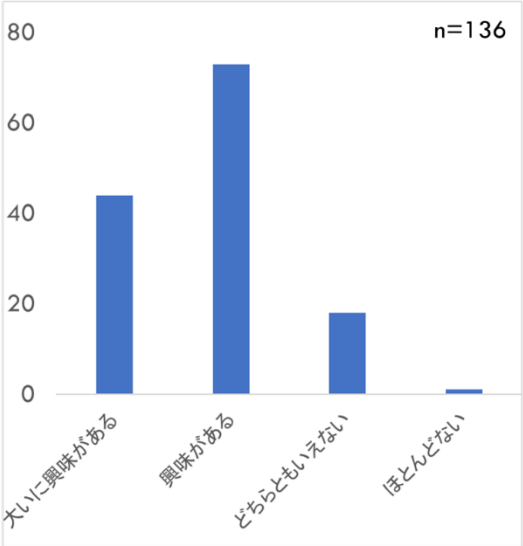
＜講演後質問項目＞

ⅱ.講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について興味を持ちましたか。

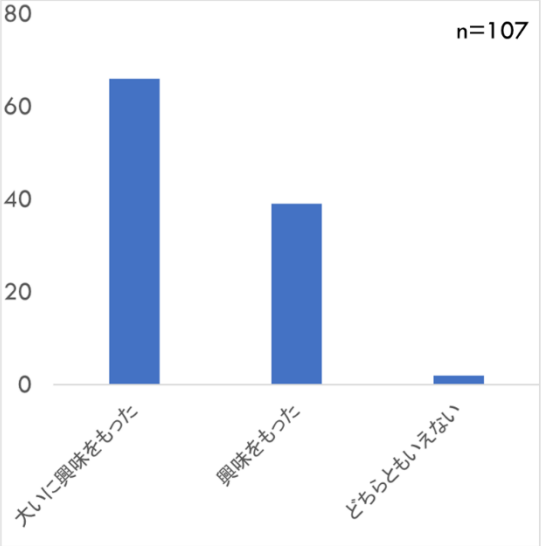
①大いに興味を持った　②興味を持った　③どちらともいえない　④ほとんどない

⑤まったくない

講演前アンケート（2年生）
コミュニケーションについて



講演後アンケート（2年生）
コミュニケーションについて

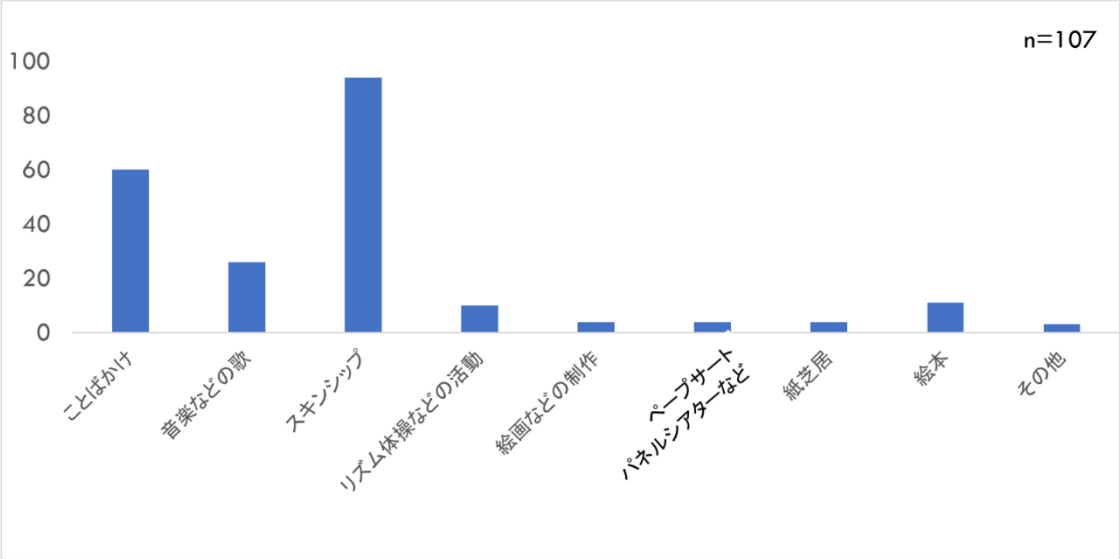


＜講演後質問項目＞

ⅲ. 講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、「愛着形成」を園児と作る時に、保育士・幼稚園教諭として、何が大切と考えますか。　（複数回答可）

①ことばかけ　②音楽などの歌　③スキンシップ　④リズム体操などの活動
⑤絵画などの制作　⑥ペープサート、パネルシアターなど　⑧紙芝居　⑧絵本
⑨その他

講演後アンケート（2年生）
何が大切か



1)アンケート用紙＜講演前･講演後質問項目＞　対象:1 年生

＜講演前質問項目＞

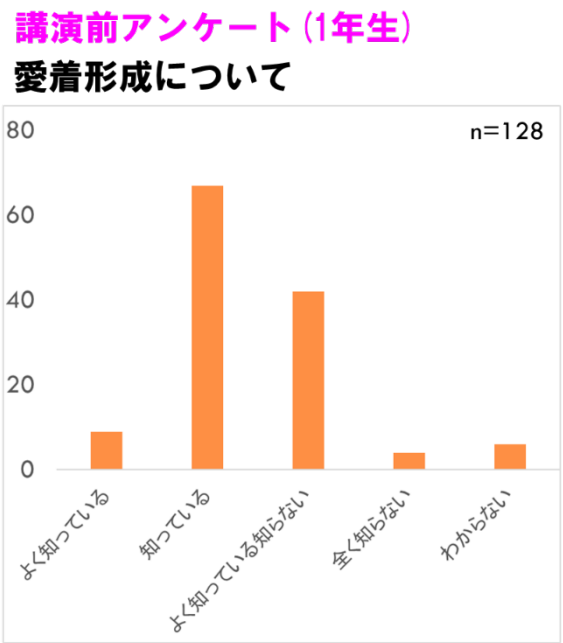
ⅰ.「愛着形成」について知っていますか。

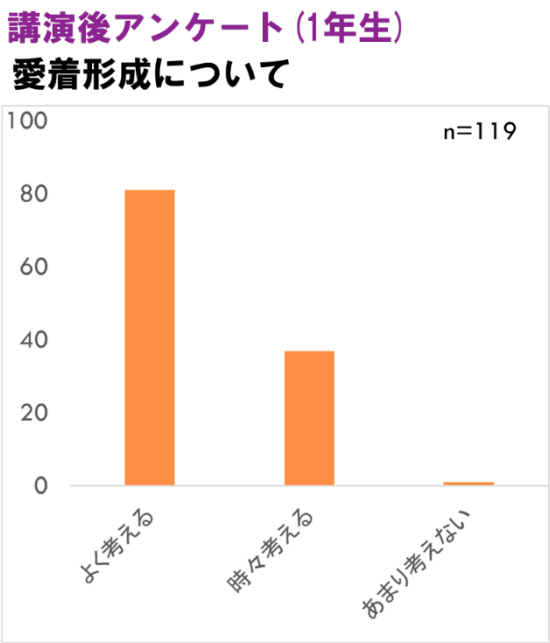
①よく知っている　②知っている　③よく知らない　④全く知らない
⑤わからない

＜講演後質問項目＞

ⅰ.講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、「愛着形成」について考えるようになりましたか。

①よく考える　②時々考える　③あまり考えたことがない　④考えたことがない
⑤わからない





＜講演前質問項目＞

ⅱ.スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について興味を持っていますか

①大いに興味がある　②興味がある　③どちらともいえない　④ほとんどない
⑤まったくない

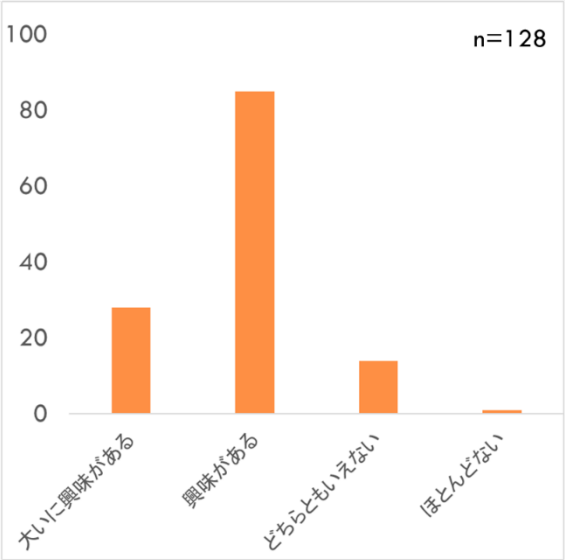
＜講演後質問項目＞

ⅱ.講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について興味を持ちましたか。

①大いに興味を持った　②興味を持った　③どちらともいえない　④ほとんどない
⑤まったくない

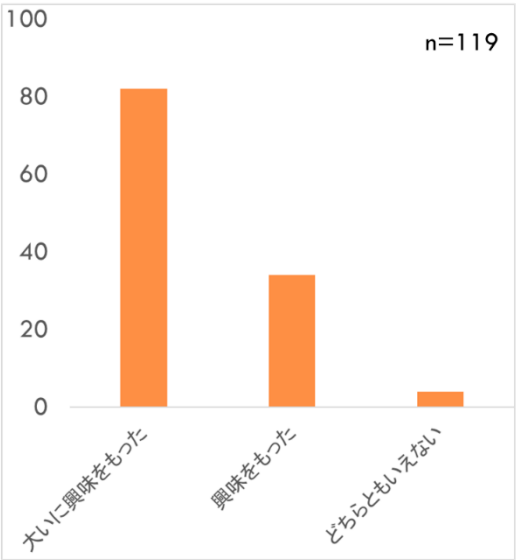
講演前アンケート（1年生）

コミュニケーションについて



講演後アンケート（1年生）

コミュニケーションについて



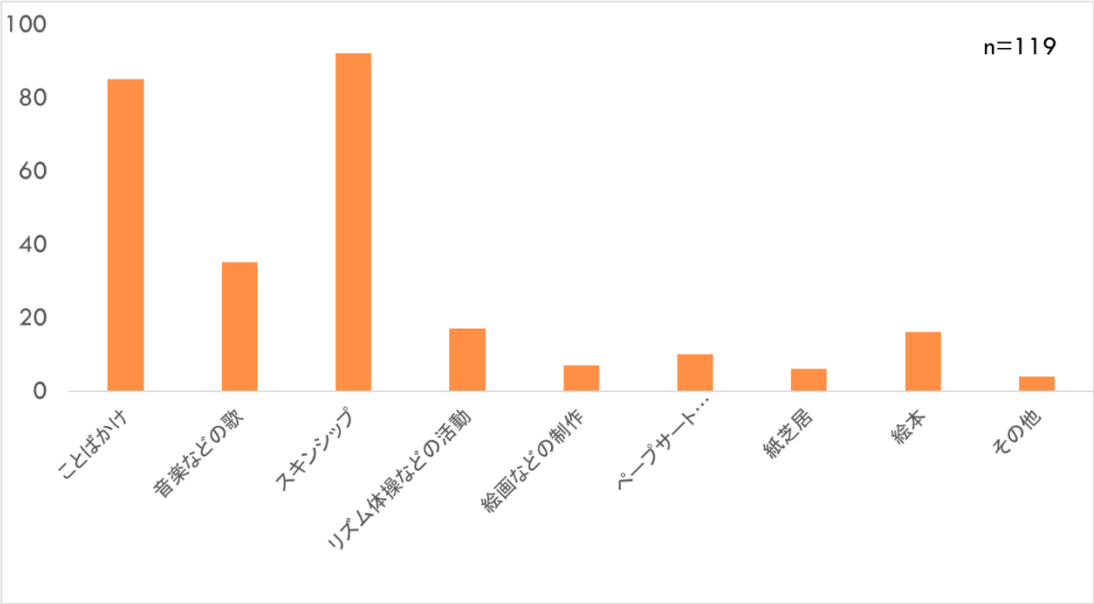
＜講演後質問項目＞

iii. 講演「♪げんこつ山のタヌキさん♪から学ぶ保育学」を聞いた後、「愛着形成」を園児と作る時に、保育士・幼稚園教諭として、何が大切と考えますか。　（複数回答可）

①ことばかけ　②音楽などの歌　③スキンシップ　④リズム体操などの活動　⑤絵画などの制作　⑥ペープサート、パネルシアターなど　⑧紙芝居　⑧絵本　⑨その他

講演後アンケート（1年生）

何が大切か



講演前・講演後のアンケートを実施して、学生たちが岩倉先生の特別講義を受講し、乳幼児と「愛着形成」、スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について、「愛着形成」を園児と作る時に、保育士・幼稚園教諭として、何が大切と考える機会を持ち、取り組んでいることが示唆された。特に「あまり考えない」、「時々考える・興味を持つ」と回答した１年生の学生たちが、顕著に興味、関心を持つことが出来るようになった考える。

4. 教員の専門性を活かした取り組み

浄土真宗の精神に基づいた豊かな人間性、いのち循環を考えることは、本学の建学の精神でもある。講師の話を聞き、学生の興味関心が高まった。乳幼児と「愛着形成」、スキンシップなど五感を使う「コミュニケーション」について、それぞれの担当教員と連携し、プロジェクトに取り組めた。

保育士養成課程において、 プロジェクトを通して実習指導授業において、様々な科目を学生は受講するが、実際には学んだことを総合的に捉え、行動に移す必要がある。このプロジェクトでは音楽、図画工作、小児栄養などを担当する教員が関わり、それぞれの分野でのものの考え方、捉え方を学生たちとともに模索し作り上げた結果、様々な角度から取り組み、幼児にどのように伝えるか学ぶ機会となった。

映画「いのちのはじまり」の鑑賞前後のアンケート結果

赤澤　正人

目的

生と死、命を考える教育プログラムにおいて、こども教育学科では、保育者の資質向上を目的として『生まれる、育つ、生きる＜いのち＞』をテーマに、＜いのち＞を大切に育むことを根底において保育・教育実習指導を行っている。その中で、＜いのち＞にまつわる映画鑑賞を通して、各種実習で出会う子どもたちや学生自身の＜いのち＞の育ちについて考える契機とした。本稿では映画「いのちのはじまり」の鑑賞前後のアンケート結果を基に、学生の気づきや学びを報告する。

概要

映画「いのちのはじまり」（監督：エステラ・ヘネル、2016 年マリア・ファリナ・フィルムズ制作）は、公式サイト [1] からの抜粋で、『世界 9 カ国で家族や育児現場を取材し、さまざまな文化・民族・社会的背景における子育ての今を伝えます。さらに、早期幼児教育の専門家たちへのインタビューを織り交ぜながら、親をはじめ子育てに関わる周囲の大人たちが、安心して育児に取り組める公共政策の必要性を訴えます』といった内容となっている。

映画鑑賞の日時と場所、参加者については下記のとおりであった。なお映画鑑賞によって体調や気分の異変を感じた場合は、退室可能であることを事前に周知した。

日時：2019 年 11 月 6 日（水）10：45～12：25

場所：龍谷大学深草キャンパス 3 号館 301 教室

参加者：龍谷大学短期大学部こども教育学科 1 回生、2 回生、龍谷大学文学部臨床心理学科 A ゼミの学生、龍谷大学他学部の学生、教職員、一般の方々の約 300 名

＜アンケートの実施＞

こども教育学科の学生および文学部臨床心理学科 A ゼミの学生には、映画鑑賞前後のアンケートを manaba course を用いて回答を求めた。アンケートの内容は、いのちについて考える／考えた経験や程度、子育て、育児について考える／考えた経験や程度、将来自分が親になった時のことを考える程度、親子関係について考えた程度や家族に対する思いなどについて尋ねた。

結果

回答者の内訳について、映画鑑賞前のアンケートではこども教育学科 257 名（1 回生 126 名、2 回生 131 名）、A ゼミ 84 名の計 341 名から回答を得た。そして、映画鑑賞後のアンケートでは子ども教育学科 260 名（1 回生 126 名、2 回生 134 名）、A ゼミ 84 名の 344 名から回答を得た。

まず、図 1 に映画鑑賞前の「いのち」について普段考えた／考える頻度、図 2 に映画鑑賞

後の「いのち」について考えた程度の回答割合を示す。

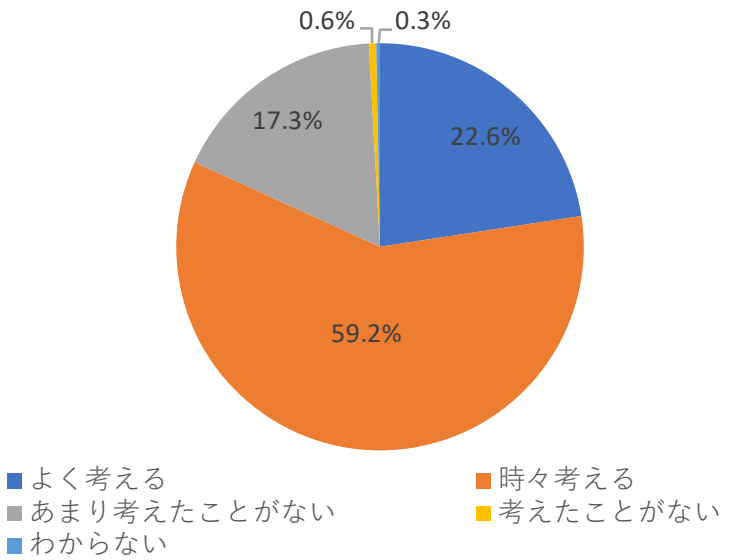


図 1　映画鑑賞前「いのち」について考えた／考える頻度の割合

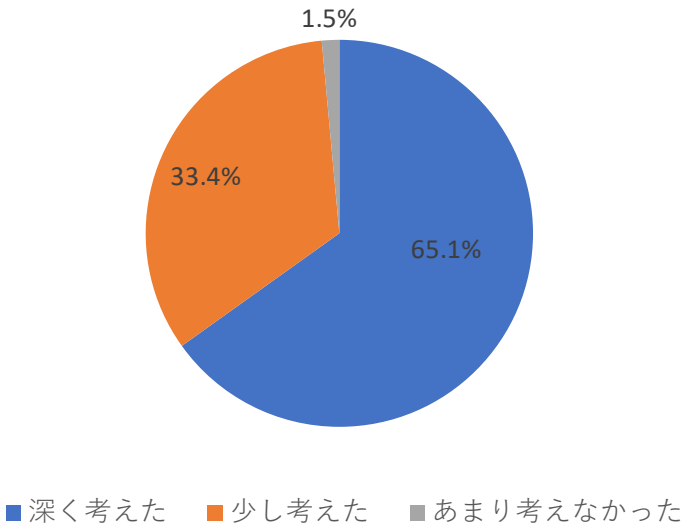


図 2　映画鑑賞後、いのちについて考えた程度の割合

映画鑑賞前は、「いのち」について「よく考える」（22.6%）、「時々考える」（59.2%）と回答した学生は 81.8%であった。一方で 18.2%の学生が、「いのち」について、「あまり考えたことがない」（17.3%）、「考えたことがない」（0.6%）、「わからない」（0.3%）と回答していた。そして、映画鑑賞後は、「いのち」について「深く考えた」（65.1%）、「少し考えた」（33.4%）と回答した学生は 98.5%であった。

次に、図 3 に映画鑑賞前の子育て、育児について普段、考えた／考える頻度、図 4 に映画鑑賞後の子育て、育児についての考えた頻度の回答割合を示す。

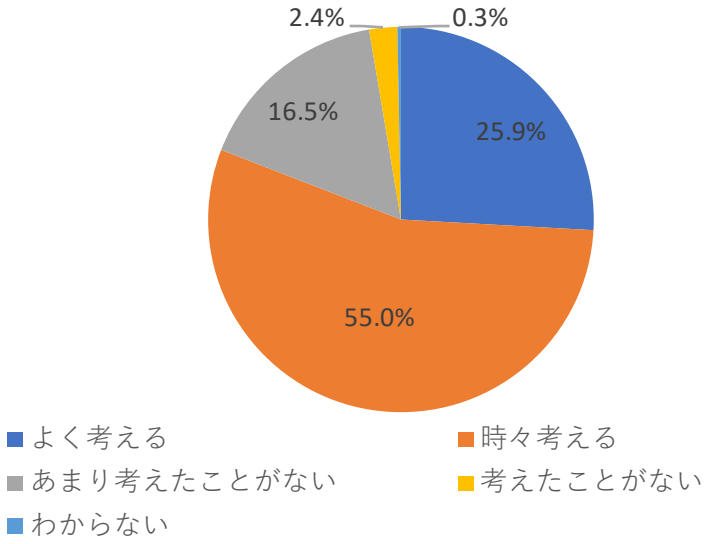


図 3　映画鑑賞前の子育て、育児について考えた／考える頻度の割合

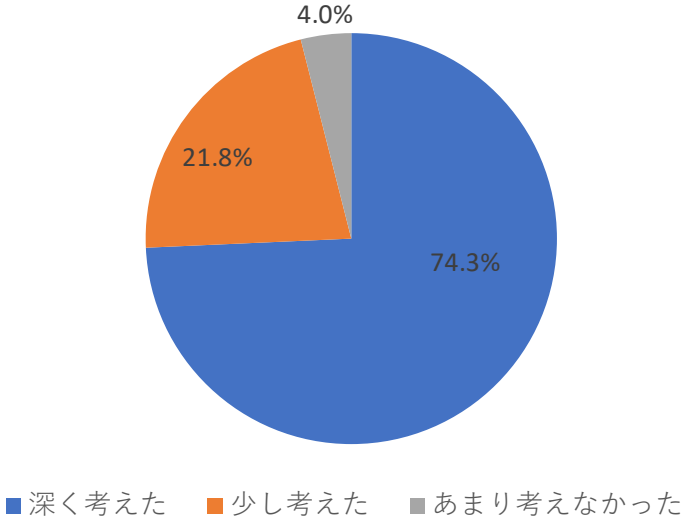


図 4　映画鑑賞後の子育て、育児について考えた程度の割合

映画鑑賞前は、子育てや育児について「よく考える」（25.9%）、「時々考える」（55.0%）と回答した学生は 80.9%であった。映画鑑賞後は、同様の質問に「深く考えた」（74.3%）、「少し考えた」（21.8%）と回答した学生は 96.1%であった。

続いて図 5 に映画鑑賞前の将来自分が親になった時のことを考える頻度、図 6 に映画鑑賞後の親子関係について考えた程度の回答割合を示す。

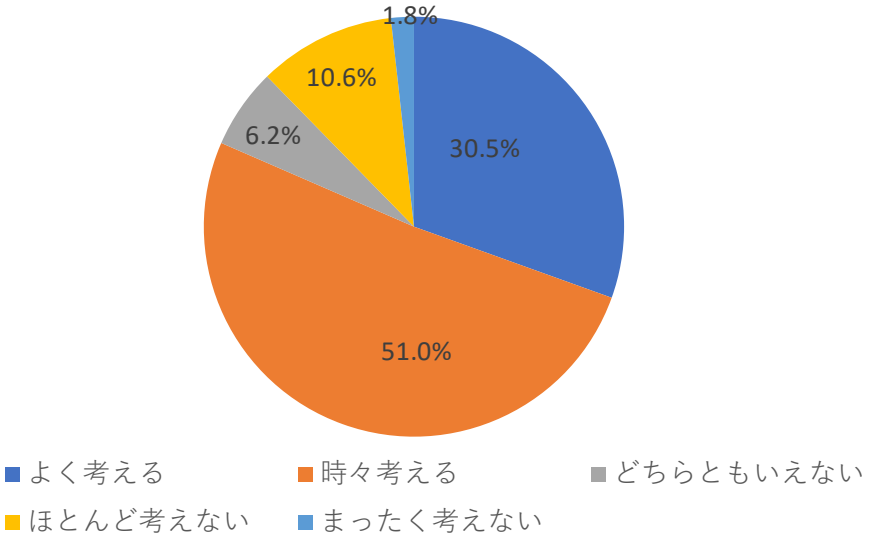


図 5　映画鑑賞前の将来自分が親になった時のことを考える頻度の回答

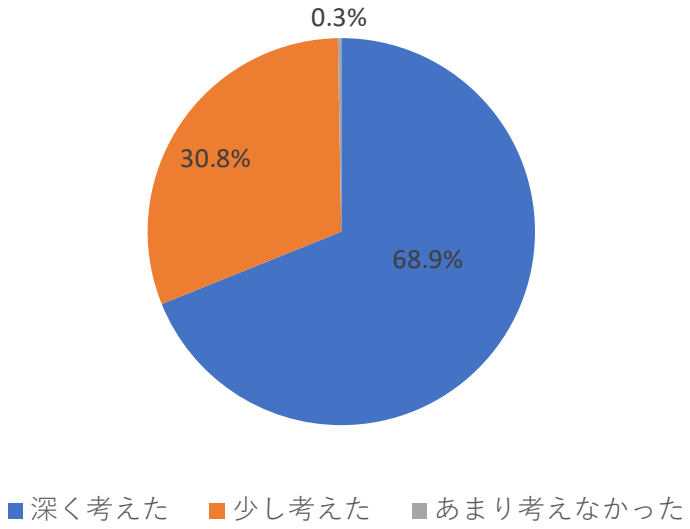


図 6　映画鑑賞後の親子関係について考えた程度の割合

映画鑑賞前は、将来自分が親になった時のことを「よく考える」(30.5%)、「時々考える」(51.0%) と海とした学生は 81.5%であった。映画鑑賞後に、親子関係について考えた程度では、「深く考えた」(68.9%)、「少し考えた」(30.8%) と回答した学生は 99.7%であった。

そして、図 7 に映画鑑賞後の家族に対する思いについてのこども教育学科の学生の回答割合を、図 8 に A ゼミの学生の回答割合を示す。

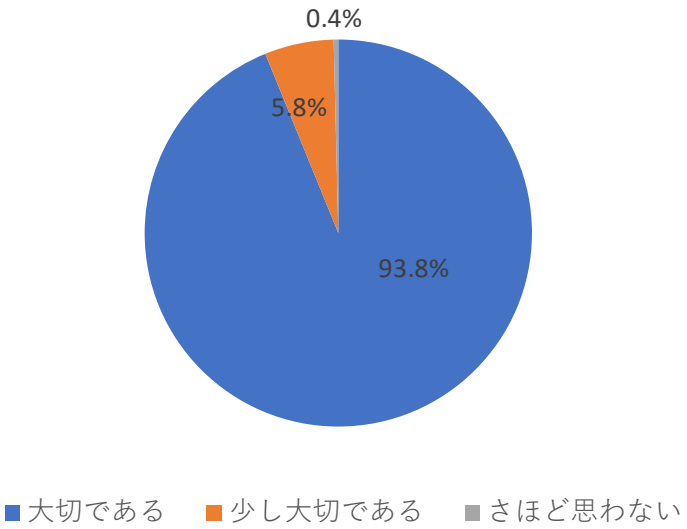


図 7　映画鑑賞後の家族に対する思い（こども教育学科）

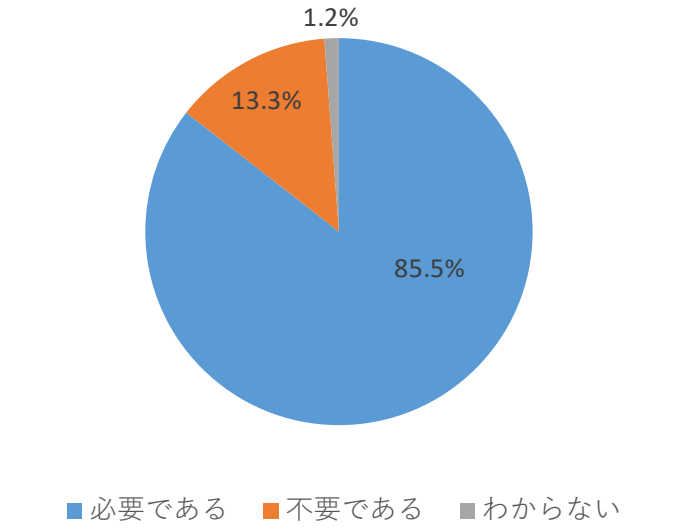


図 8　映画鑑賞後の家族に対する思い（A ゼミ）

こども教育学科では、家族が大切である（93.8%）、少し大切である（5.8%）と回答していた。A ゼミでは、家族が必要であると回答したのは 85.5%、不要であると回答したのは 13.3%であった。

考察

映画鑑賞前では、<いのち>について考える学生は、「よく考える」「時々考える」を合わせて 81.8%であり、普段から多くの学生が<いのち>について考える機会があることがうかがわれた。映画鑑賞後には「深く考えた」「少し考えた」を合わせて、98.5%の学生が<

いのち＞について考えたと回答していた。60%以上の学生が、「深く考えた」と回答していたことからも、映画鑑賞が＜いのち＞について、より真剣に考える大切な契機となったことが示されたと思われる。

また、子育てや育児について考えた結果を見ると、映画鑑賞前後で回答の選択肢が異なるため単純比較はできないが、鑑賞前の「よく考える」と鑑賞後の「深く考えた」の割合を見ると、後者が 3 倍近くなっていた。様々な文化、民族、社会的背景における子育てを伝える映画内容であったことを考慮すると妥当な結果と考えられるが、多様な子育てのあり方を学び考えるための重要な機会となったと思われる。

同様に単純比較はできないものの、映画鑑賞後の親子関係について考えた程度も、映画鑑賞前の自分が親になった時のことを考える頻度を参照すると、考えの深まりが認められたことが示唆され、親子の関係の様々な在り方について考える契機となったと思われる。

学生が各種実習で関わる子どもや自分自身の＜いのち＞について、改めて考える契機となり、子育てや親子のあり方の重要性や多様性を学び自らのこととして考える機会となった本映画鑑賞は、非常に意義のあることだと考えられた。

参考文献

1) いのちのはじまり　子育てが未来をつくる公式サイト
https://www.uplink.co.jp/hajimari/　（2020.03.10 最終閲覧）

1年間の実習指導授業を通して―「健やかに育つ」とは

田岡由美子

１．再び問う―「健やかに育つ」とは

今年度も、巡回教員ならびに実習指導室とこども教育学科多目的室の職員による全員参加のスタイルで実施してきた水曜日の実習指導授業をもとにして、『2019年度　龍谷大学短期大学部こども教育学科教育年報』を作成することができた。今年度はこの世にうまれた子どもが健やかに育つことの意味を、子どもを取り巻くさまざまな家庭、社会・文化状況から考え、子どもたちの＜いのち＞が十全に育つために何が必要なのか、どのように支援をしたらいいのかについて考えることを根底において、実習指導授業を展開してきた。個々の教員による授業報告はそれぞれの章でなされている。

では、全体のテーマである「健やかに育つ」ことの意味を、学生はどのように捉えているのか。これについては、前期の授業終了後に1回調査を行ったのみで、諸般の事情で授業開始と後期終了後の調査はできていない。そのため、学生の考える「健やかさ」が受講を通してどのように変容したか、本取り組みの効果はどうであったのかについては、残念ながら評価することはできない。ただ、学生が前期15回を受講した時点で「健やかさ」をどのように捉えているかについての一つの報告として以下に記しておきたい。

２．学生の考える「健やかに育つ」の意味

（１）実施年月日・・・2019年7月10日（水）

（２）対象学生・・・・こども教育学科2年生135名（回答はうち112名）

（３）実施方法・・・「あなたは“健やか”の意味をどのように考えますか」という質問に対して自由記述で回答。複数回答可。

（４）分析方法・・・学生の回答は一語であったり、文章であったりと様々な回答様式だったため、回答から内容ごとに分類し、ラベリングした。挙げられた内容や言葉の回数を％で数値化した。

（５）結果

	分類項目	主な内容	のべ回答率
①	心身の健康	・背が伸びる、体重が増える ・健康なだけでなく、心の形成もなされる ・体も心も元気に過ごせる ・体だけでなく心が健康に育っている ・病気をせず元気なこと ・健康に育つこと（両親の手助けを含む） ・外で走り回る元気	49%
②	愛情・信頼関係	・子どもを取り巻く環境の中にいる人から愛情をもって成長ができていること	20%

		・愛される環境があること ・愛情を持って育てられること ・子どもが、自分が愛されている実感を持ち、身体も心も成長し続けること ・みんなが平等に愛されて育っていくこと ・親と信頼関係が築けていること ・子どもの気持ちを考える ・我慢をし、叱りながら、子どもを見て真剣に悩んで考え、ぶつかること	
③	食事と睡眠	・十分な栄養と睡眠 ・よく食べ、よく眠り、毎日を楽しく元気に暮らしていること ・健康でご飯をもりもりおいしく食べること	10%
④	自分らしさを発揮できる自由	・子どもが自分らしく楽しく生きること ・家庭や保育所内で自分の思いや考えを行動に出せる、言葉にできること ・伸び伸びと過ごせること ・笑いあえることがあること	10%
⑤	安心・安全な場所	・安心して生きる場所があること ・安心でき、安全な環境があること	5%
⑥	挑戦・失敗	・いろいろなことに挑戦する ・たくさんの冒険をしながら、失敗をして、学ぶこと	3%
⑦	遊び	・自由に遊ぶこと ・外で遊んだり、友達と遊んだりすること	3%

３．考察と課題

回答の中には、”健やかな”さまを表しているものや、子どもの健やかな育ちに必要な援助の仕方が混在していた。また、自由記述にしたため、長文もあれば、一語のみを記している学生もいた。

全体としては、多くの学生が身体のみならず心も元気で健康な状態を考えており、身体的にも精神的にも成長するイメージを持っていることがわかる。しかも、「挑戦」や「失敗」といった言葉を書いている学生がいたことは、「健やかさ」には、すくすく伸びるという発達のイメージと同時に、楽しさや喜び、あるいは困難やそれにともなう辛さなどを乗り越えて内面的に成長するといった人間ならではの精神的な成熟も視野に入っていた。また、「安心・安全」といったように不安に感じたりおびえることがなく、心身が満たされ安定

した状態をイメージしている学生もいた。

他方、「健やかに育つ」ために必要な事柄を記した学生も多くいた。「食事」や「睡眠」といった基本的生活習慣や、何物にも束縛されずに自分らしさを発揮できる「自由」、緊張や気兼ねがなく、のびのびと行動でき、思いっきり笑えるような環境を通して「健やかな育ち」が実現すると考える学生もいた。さらに人や物や事象と関わることを通して自分を外に表現する「遊び」を取り上げる学生がいた点は、乳幼児について学ぶこども教育学科の特徴と言えよう。

では、このような「健やかに育つ」ために、日常生活のさまざまな場面で具体的に何をどのように行ったらよいのか。この問いが、おそらく実習指導授業や日々の学び（たとえば、乳児保育、5 領域の保育内容、さらには子育て支援や社会的養護における学び）につながっていくはずだ。心地よく眠れるための配慮は何か、和やかな雰囲気で「食」に興味を持って食べるためにはどうしたらいいのか、発達に応じて自由に体を動かせる空間や玩具、人といった環境をどのように整え、子どもが楽しめるように工夫するのか、あるいはそれができない状況にある子どもに対して何をどう変えていけばいいのか、さらには保育者・養育者が健やかであるためには何が大切なのか等々、「健やかに育つ」という底流に流れるテーマと日々の具体的な一つひとつの保育の営みを関連させて考えることが、今回われわれが目指した取り組みであった。

上記のアンケート調査の学生回答にはそれに応える内容もあったが、全員の学生がそこにまで思いを馳せられたかどうかは把握できていない。ひるがえって実習指導授業だけで、保育の全体像や構造が理解できるものでもなかろう。今後、学生が現場に出てさまざまな体験を積み重ねる中で実感を持って納得できる部分も多々あろう。ともあれ、大きなテーマのもと教員同士がお互いの授業を見せ合い、お互いに異なる分野から保育を見つめ直すことの積み重ねの中で、そのつながりを明確に把握し、さらに個々の授業を工夫し、内容的に深めていくことが何より肝要であろう。

2020 年度は、「大人も子どもも共に生きる＜いのち＞」という大きなテーマを掲げた実習教育を展開する予定である。学生の変容過程の把握に努めること、教員自身がテーマとのつながりを考えながら授業を組み立て、工夫すること等の課題をもって実施したい。